小說叢書第四
42
6231

あづま菊序詞

千花萬花落ち竭して、天地寂寞たるの時、獨り東籬に香を吐て、一朶霜を傲るの菊花あり、古人これを目して、花の隱逸なるものとなし、又これを婦人に配して、貞操全き者に比ふ、實よや嬌娜たる佳人の繁き浮世の霜を凌ぎ、凜として苦節を全うする風情い、菊花の霜よ傲るに殊ならぞ、本篇の主人公阿菊の如き即ちこれなり、見よや蓬洲翁の筆よも菊の香

い通ひて、讀む者の身骨をして両つながら香ばしからしむるの趣きあることを、

明治二十九年三伏の墨さ激しき時

そゞろよ床しき香を思ひおこして

辱知　笠園識

伊勢丸

特8
42

あづま菊

蓬州

《第一枝》

小春に近き季候柳ゝて、梅が辻の菊今を盛りと聞き、今日此頃に遊ばずば、東風が誘ひに来る春まで、郊行く事も内證の、巾着の底ふるふてまでもと、浮れ出る人の寡からず、中にも鼠幅帽を眉深に冠り、洋杖携へたる洋服紳士の連とは見もれど、其紳士よりは十歩ばかりも隔て、後れて、歩み行く一對の美人こそ一層に目立ちて見えたれ、年齢は二ツ三ツ違へども孰れも二十歳を多くは超さず、行屆きたる行裝は茲に略して、言語の點より此兩人の素姓を推測れば、年長なる方は彼の紳士の妻君にして、年若くして婀娜めきたるは、之正しく權妻なるべし、妻君らしき女は權妻らしき女を呼びとめて妻君「れ菊さん、一寸御覧、アノ造菊の似顔は右團治そッくりですねエお蔦」ホントに御新造さん左樣でございますねエ妻君「大抵造菊といふものは、八重垣姫だの菊童子が能く造てあるが、

妾は當地で菊を觀るは本年がはじめだが、和女なんぞは毎年お出だらうねへお蔦「否エ貴女、春先きだと能く櫻にはまゐりますが、却つて出て居る時分は何でございましたヨ、餘り菊觀にはまゐりませんでした、本年は御新造さんのお庇陰で、斯う云ふお供を致しまして何だか氣が清々致します、アラマア、旦那のお足のお早いこと妻君「ナアニ和女、如彼してお歩き遊ばす方が、妾達と御一緒にブラ〳〵歩くよりは足勞ないッて、東京で團子阪なんぞへ觀菊にれ供をしても、妾や下女は、造菊の團十郎の人形か何かを迂かり見て居る間に、何處へか往つておしまひなさるんだよ、然して何かへ、和女今度の演劇はモウ見にお出かへお蔦「否エ妻君「まだかへ、夫れでは今日旦那にお願ひ申して置て二三日の間に一緒に行うかねへお蔦「ハイ、難有う、何卒お供をさして頂きませう、如何も貴女の樣にお優しくなすッて下さいますので、妾は平素實兄とも、然う申して居るンでございますヨ、貴女の前ではございますが、御本妻と妾と云ふ者は、如何なにしても中の悪いもので、芝居でも小説でも、恰で敵同士に作つてございますのに、此う申しては誠

に失禮ではございますが、貴女は妾をば眞實の妹の樣に、御深切になすッて下さいますので妻君「ナアにお菊さん、成程世間はいろ〳〵だけれど、妾と本妻が中を悪くするのは、ソリヤ眞實に心が狹いと云ふもので、世の中では本妻が妾の事をば、敵の樣に嚴しくするもわるが、ソレだと其換りに旦那の方では、却つて内證のお楽みを、諸方へお拵へなさると云ふ事が幾許もあるから、將來ともお菊さん、嫌だらうけれども、和女は妾をば姉だと思つて、何角に力になつておくれヨお蔦「眞實に貴女の樣に仰しやいますと、妾はモウ難有くッて、如何もお返事の致しやうがございませんですワ妻君「和女には立派な實兄さんがお有りだから、其樣なでもあるまいが、妾のことは大方旦那にれ聞きだらうが、一昨年阿母さんが亡くなッてからと云ふものは、妾の身は木から落ちた猿で、兄弟も親類も今ではないのだから子、唯頼りにするのは旦那計り、夫れだけれども子、又其旦那にも斯々だと、御相談の出來ない事が能く有るものだから、斯うして和女がお勸めかは知らないが、中睦くしておくれだから、妾は眞個に實の妹のやうに思つて居るヨ、

だから何事にも遠慮なんぞをせずに、用のある時は何なりと然う言ッて、使ひをお寄來し、而して裁縫ものや何かも、和女の平日着位なら、妾が本宅の下女に指揮をして縫せようからお菊「アレまあ勿体ない事仰しやいます、唯斯うして置いて下さるのでさへ有難い事で御座いますのに、夫れこそ罰が當ります妻君「オヤ勝手な事を饒舌て居る間に、旦那を見失つて仕舞つたヨ、オホ、、、。嗚呼斯くまで中の睦まじさ、理由知らぬ觀菊客は、姉妹とも見紛ふならん、折しも花瑠の彼方より、急ぎ足に來かゝる一人の女が、お菊の姿を目疾く見附けて　女「オヤ、お觀菊でございますかお菊「オーお増さん……

《第二枝》

繁花な市街の眞中に、浮世小路の名に背かず、粹な家作船板の、塀から見越しの槭の樹も、一葉二葉と色染めて、冬を隣りと報らすらん、さてしも此秋の上旬つ方、此家に移住みたる女主は、一時は南地で有名たる、某席の醫妓にて、歌菊と稱ふ婀娜的なり、當時は今橋二丁目の勝田精一の外妾となり、名さへお菊と稱びかへたれど、花街の餘波の

まだ失せやらぬは、悪慣の吸付煙草に知られたりお菊「お増さん、此間はお樂しみ。此お増と云ふは女髪結にて以前から馴染なり、今しも梳女を先きへ歸せしものと見て、自分は櫛をしまひなどして、反古で油手を拭ひ終り、お菊が馳走の煙管を輕く受けて一寸頂きお増「有難う、貴女こそお樂しみでしたらうが、妾は彼時は連の人を見失つて、少とも面白くもなんとも無しでございました、貴女が彼時御同伴なのは、アリヤ旦那のレコですか。お増は小指を示せば禁爾として お菊「ア、左樣ですヨ、彼の通りの御嫖致だから、何處へ御供をするのも羞しい程ですヨお増「眞個に貴女と饒倖ですねへ、旦那はお人が宜い處へ持つて來て、御新造さんが大層行屆いた方ださうですからお菊「眞個に左樣ですヨ、妾なんぞは知つての通り、如彼な稼業をして居たものだから、町方の風儀なんぞは、少計も知らないけれど子、彼樣にまで善く出來た御新造樣は、マア世間には有るまいかと思ひますワ、此間御覽だつたか知らないが、彼の着物だッて悉り御新造樣のお誂へで、裁縫まで本宅でして下すッたのですヨお増「オヤ爾うですか。幾度か首を左右に振りつゝ、

煙管に煙草をつぎて返し、一寸後を振かへり視てお坦「御新造さん、お梅どんはお菊「今一寸お使ひに遣りましたが、何ぞ用事でもお坦「否へ、最前から見えませんから、トキニ御新造さん、コリヤ世間のお話しですから、貴女お氣にお障りなすッては不可なせんヨ、妾が矢張髮結に行く先きの、或る處のお妾さんですが、其のお方も舊と北新地の藝妓衆なんですが、まだ旦那が青樓で馴染でお在でなさる時に、御新造が落籍をさせて、而して立派に今の處へ圍つてあるのですが、何と貴女のれ身の上と、能く似て居るぢやございませんか、だから妾は、お宅へ參る度びに爾う思ふんですヨ、其貴女御新造といふのが、御本妻でもあるけれど、なか〳〵如何して夫者といふので、旦那よりは其れ妾さんを優しくして、ヤレ姉妹分にならうの、お互ひに將來とも力になり合ふのと云つて、着類は素より一切合切、何一點不自由を爲せないやうに、御新造が指揮して其妾宅へ送るんですが、夫れがソレ和女さん、オヤ失禮、アノ御新造さん、斯ういふ妾も貴女も婦人で居て、斯んな事を申すのは可怪いけれど、女といふ者は罪の深いものですヨお菊「而して其御新造といふのは、如何な事をなすつたのですエお坦「ナアニ、夫れも妾がね、確實な手證を押へたといふ譯ではございませんが、然ういふ御新造だと、得て大變に太膽ことをして居るもんですヨ、自分が何か良くない事をして居る爲めに、御亭主に放蕩をさせるものあり、又自分が財産を搖さ廻す爲めに、種々な工夫をする御新造が幾許もありますヨ、イエ眞個ですヨ、次第によれば歌菊さん、オヤまた失禮、ッヒ昔の口癖が、オホ、〻、〻、イエ眞個に、次第に寄れば貴女、擰ふものか、御新造を叩き出して、本城を乘取てれしまひなさい、オヤ餘まり話しに實が入ッて、飛でもない事を申しました、而して御新造さん、芳さんは此節如何なすッてござるんです、れ便りはございますかお藥、實兄さんですか、彼人も仕方のない放蕩漢で、當地に居るかと思ふと、東京へ往つて居て、妾と眞實の兄妹だけれど、眞個に困り者でしたが、年齢は藥と云ふて眞個に子、去年わたりから見ると、本年は如何いふ者か、格別穩順しくなつて、昨今の處では眞面目な容子だから、少しは妾も安心ですヨお坦「而して度々お出ですか。此時ガラリと戸口

の開音に談話を止めお増「オヤ入口が開きました、お梅どんか知ら、ドレ妾はモウお暇致しませう。れ増は忙しき中から長話しに時間を移さ、時計の針を尻眼で視ながら、其處に有合せた反古紙を拾ひ、其儘袂へ押込みて歸り行きたり。

《第三枝》

利休下駄の歯音高く、れ増が歸り行きたる跡へ、無遠慮にもお菊が居間へ打通るは、今曙せし寶兄の芳五郎なり、今日は平素になく羽織がけの堅氣扮裝、れ菊笑顔の愛想よく

お菊「オヤ兄さん、何時お出なすッたノ、妾はお梅が歸つたのかと思つて居ました　芳「御免〳〵と、二三度戸外から聲をかけたが、髮結と饒舌て居て、聽ないのか返事がねへから、遠慮なしに上つて來たが、公乃だから宜やうなものゝ、不用心だぜ。芳五郎は窮屈さを堪へて、火鉢の向側に行儀よく座れば「お菊「大層今日は堅氣だねへ　芳「ナアニ然うでもねへよ、實は今迄和女にも、種々な心配をさせたり、又厄介にもなつたが何日が何日までも馬鹿な眞似も爲て居られねへと、漸と氣が注いたから、斯して少し眞面目にな

つて見ると、今まで何程妹だからッて、苦勞をさせた事が氣の毒でならねへ、モウモウ安心してくんな、己らア阿母が亡なる時に云つた事が、漸く今となつて判つたので、アハ、、、、イヤ眞個に考へて見ると、實につまらねへ事をして居たのサお菊「嘘にも和兄の口から然う云つておくれだと、妾も誠に安心だけれど、一頻りの樣ぢやア實に妾も芳「モウ〳〵既往た事は云つてくれるな、今となつちやア面目ねへヨ、トキニ顏の色が少し變だが、如何かしたのか、時候が斯んな盥梅に變だから、氣を注ねへぢや不可せ。何日になき寶兄の言葉、お菊はいよ〳〵喜びて、煎茶など薦めながらお菊「ホンニ氣の利ない、和兄にはお茶だのお菓子よりも、御酒の方が宜だらうのに　芳「ナアニ、況して搆ひなさんな、實はノ、跡月から金比羅樣へ潔然と斷てしまつたお菊「オヤ眞個に　芳「眞個だとも、幾許嗜きな酒でも、十日餘り耐忍すると、モウ飲みたくはねへヨ、夫れは然うと、此間和女の話しぢやア、斯うして營業を廢たのも、また何も彼も本宅の御新造が、旦那に先立てして下さるゾだと、大層和女は喜んで居たが、マア夫れは何により結搆で、和女の

幸福ぢやアあるが、また眞實の兄の乃公が氣になつて見ると、種々な考へが起つて、取越苦勞をするから、今日はチト仰山なやうぢやアあるが、和女の注意の爲めに話すことがあつて來たのだお菊「然うかへ、开處は兄妹の中だかられ互ひに氣の注た事は言合のが、オヤ兄さん、マア安座を組て寛くりとしては如何だへ、和兄が其樣な座りやうをして居た事は、まだ妾は一度も見ないから、何だか窮屈さうでいけないワ　芳「ヂヤ御免ねへ、ア、痛へ〳〵、稽古の爲めやらかして見たが、隨分せつねへもんだお菊「オホ、、、而して妾の心得とは　芳「夫れはノ、世間の話しだから、和女また氣に掛ちやア不可が、實は旦那の處の小指的が、イヤ御新造が餘り和女をば、深切になさるに就て、斯ういふ話しがあるンだ、コリヤ他所の事だゼ、或家の御新造が、自分の旦那の妾をば姉妹の樣にしてノ、此節ならば觀菊だとか、イヤ演劇だとか、ソリヤ眞個に中睦くして居るが、女といふ者は罪が深へヨ、旦那は何も知らねへで、お妾の內へ往つて居る不在の晩にはノ、夜の一時二時となると其御新造と云ふのが、水雛垢を取つて前栽の赤松の木へ、丑時參り

をするンだとよ、イヤ眞個だヨ、昔は藁人形を造へて、五寸釘を打たさうだが、今も云ふ通り其人達と、姉妹分とか何とか云ふ位だから、寫眞の交換ッこをして居るだらう、其れ妾の寫眞をば、マア聞きねへ酷いぢやねへか、松の木へ持て往つて燒火箸を突さすンだとヨ、イヤ眞個に、恪氣も斯なつちや埒らねへセ、藁人形でせへ効能があると云のに、和女寫眞と來ちやア、一念も屆くだらうぢやアねへかだから深切だ〳〵と氣をゆるして居ると、飛でもねへ事になるンだ、食物なんぞを貰つた時にやア、別して氣を注けねへぢや危險だ、何を貰ても迂かり喰ふちや不可せ、先代萩ぢやねへが、狆にでも猫にでも毒味をさせてから喰ひねへ、オヤ迂かりと和女の話しになつてしまつた、アハ、、、、併し寫眞なんぞは交換しちや居ねへだらうお菊「イ、エ兄さん、モウそりや疾ッくの昔に　芳「交換てあるのか开奴困つたなア、ドウ、其御新造の寫眞を出して見せねへ、乃公ア人相を視て遣らう。お菊は兄の望みに、手函に收め置きたる一葉の寫眞を取出ふお菊「サア御覽、美い御樣致でせう渡す寫眞を手に取上げ、一目視るより驚きて　芳「是れがア

ノ御新造かお藁「ハア、お重さんと仰しやる方ですヨ　芳「アノ此女が……フン。

（第四枝）

今橋二丁目の勝田の家には、今日日曜日とて兩人の來客あり、壹個は某廳へ奉職る山淵友純と稱び、主人精一とは同郷人なり、今一人は據て出入する梅澤作二郎と云ふ商人にて、格別の骨董好きの男と見ゆ、座敷の裝飾火鉢煙草盆まで一々念入れて見る癖あり、主人が薦むる煎茶の茶碗を捻くり、糸底までも委しく覩て　作「結構です、失敬ですが此御茶碗は御新調ですか、近頃一向拜見を致しませんですが　紐「左樣、實は此間漸く手に入たのですが君は好者だから御鑑定は　作「左樣です子、目下支那品でも、此品の物は却く〳〵容易に見受けません、トキニ山淵樣は、御當家の御主人とは御同郷なり、且つ格別御別懇ですから、矢張骨董等はお嗜でせう、山淵は苦笑ひして　友「處が僕は、不風流極まる人間ぢやから、勝田君とは大違ひです、夫れに第一何國へ出張するか、轉任するか別らんから、不自由にないだけ手廻りの器物があらば、夫れで澤山だと云ふ考へで居ます、

勝田君とは實に竹馬の友で、郷里に居る時分はなか〳〵磊落な質であつたが、近來は大阪紳士の一人だから、失敬ぢやが君は、格別体裁家になられたです、全体四五年前に亡くなられた君の妻君は、彼れで何でした子、格別交際家なり、隨て來人も屢々だから、床の軸は如何だとか、イヤ火鉢と煙草盆と、相應して居らんと不可なぞと、追々君も妻君に感染て、イヤ如何も失敬〳〵、併し其妻君が黄泉の客となられて、當今の妻君もなか〳〵如何して交際家だ、而して今日は　紐「内に居ますが、何か臺所で。斯く云ふを聞き氣疾やの作二郎は、變に考へて頭を搖き　作「イヤ是れは恐入ります、今日もまた御酒などを頂いては、實に恐れ入ります、實は先刻申しました通り、明後々日は例の骨董市がありますから、一泊がけに京都へれ誘ひにまゐつたのですから、其諾否を承はればモウお暇と致しませう　紐「夫れは無論行くとしませうがマア君宜しいぢやないか、山淵君と今から面亭まで、夕飯を喫に行くお約束をしましたから、君も御同道にれ出かけなさいねへ山淵君　友「左樣です、對座では談話が盡るから、お同伴のある方が至極宜いです、

是非お附合をば願とう　作「如何も恐入りますねへ、毎度毎度　緒「御迷惑でせう却つて、オイ誰ぞ。精一が鳴す手の音に、妻のお重は此室に來りてお重「誰殿もモウお歸りでございますか、マア御緩りとなさいまし、誠に失禮を致しまして　友「毎度長席で　作「御新造さん、此間は如何もお重「イヽエ貫君、誠にれ搆ひ申しませんでした　緒「オイ、諸君と御同道に而亭迄往て來から、私の羽織をお重「ハイ貫夫れ衣服も夫では何ですから、一寸彼處でお着換遊ばせ　精「ナアニ是れで宜ヨお重「だつて貫夫、諸君と御同道ですもの　緒「ヂヤ着換やうかチ。面倒だけれど、一寸御免お重「お待せ申して濟ませんねへ。夫婦は次の室へ退きし跡に、兩客は小聲になり　友「アノ妻君も如彼して居らるゝと、料理茶屋の娘とは見えませんねへ　作「オヤ、左樣でございますか、私はまた東京で矢張御親類から入つしたのかと存じました　友「アリヤ東京の築地で、有明と云ふ料理商の娘でしたが精一君も一時は彼の婦人の爲めにと、格別財産を傾けた位です、併し御覽の通り、紳士豪商の娘と云つても差しくは無し、第一品行の正しいのには感心です　作「是れは内證のお話

しですが、當家の御主人もなか〳〵婦人家です、彼の通りの御新造をお持なすッて居て、先達て南地の歌印をば落籍せるなどは、實に豪傑です、併し其事を畢竟御存じないから宜しいけれど、御新造が左樣な譯ですと、知れた時は大嫉妬でせう、恐るべし〳〵アハヽヽヽ　友「處が至つて中が睦いさうです。密々話しの處へ精一は衣服を改め、羽織の紐を結びながら來る跡に、お重は帽子を片手に携へお重「諸君何もお待せ申しまして　緒「サア、お供しませう。

《第五枝》

お重は客と夫を玄關まで送り出し、再び厨に來りお重「早う拵へるつもりの處へ、お客さまがあつたから斯んなに遲くなつたが、折角の思ひ立だから、拵へて持せて上やう。お重は兩三日前東京の知己より、時ならぬに淺草海苔の到來したるにぞ、卷鮓を製へ、彼のお菊の許へ送る心なり、傍から手傳する下女のお槇が、鮓を卷くを手傳ひながらお槇「御新造さまは如何して、なか〳〵れ酢もじは御上手でございますねへ、妾共が能く宿に

居る時分に、変た事とでございますが、中の寶がそんなに工合能く、お飯の恰ど眞中の處へまゐりません、兎角片方の方へ寄つてしまひまして、第一海苔が濕つて、香も何もなくなつてしまひます、オホ、、、、お馬「香といへば、春先だと新海苔で宜いけれど、今頃に斯んな鮒をば持せて進たら、お菊さんはれ笑ひだらうね。此お槇は豫てより、他人の恪氣に氣を揉み居る處なれば、今日もお重が妾の許へ送らんとて、手づから深切に煮焚して、鮒など製るを口惜しく思ひ居る處なれば、器物を拭巾で拭ひながら、目尻をキ、りと釣上げお槇「御新造さん貴女とマア如何にお胸が廣いと申して、餘りでございますヨ。思ひ掛けなき下女が言葉にお重は俎板の手を止めお馬「オホ、、可怪な事を云ふ人だねへ、何が餘りだと云ふのだへ、お槇「何がと仰しやつて貴女、ソリヤモウ、旦那樣は殿達の事でございますし、世間に外妾を圍つてござる方は、幾人もありますけれど、マア大抵は御本妻には内證とか、假令ば公然にした處で、幾分か御遠慮はなさるものです、況して貴女、御本妻の目から見るときは、お召使ひの下女よりか、遙かに劣つた位ですのに、貴女とアノおきくさんをば御姉妹の樣に奥服商が來ればとて、御自分の品は跡まはしにして、是れもおきくさん、彼品も妾宅の方へと、眞個に傍側から視て居りまして も、はがゆひ程でございますお重「何を云ふのかと思つたら、又お菊さんの事かへ、コレお槇、總て婦人といふ者は、第一に謹むべきは、此恪氣嫉妬だヨ、和女も今に嫁入をするであらうが、御亭主が假令如何な事をするとも、口喧しくれ云でないヨ、如何で和女本宅に居る女房と、外に置てある妾とか、又馴染の女とかに比べては、女房は面白くない事は極つたものだから、其面白くない女房が、出入する毎に恪氣をしたり、嫌に出先の穿鑿をしたりすると、却て御亭主の方では夫れが五月蠅ものだから、種々お嘘を吐く樣になるから、ト云て何も御亭主をば粗畧にするのではないヨ、何程浮氣な男でも何でも、一ッは配偶者の楫取次第で、五度遊びに行く處は三度になるものだから、开處がソレ女房の呼吸といふものだ、妾などは其樣な呼吸とないけれど、和女も知つての通り東京の者で、別に一家親類があるではなし、フトした事からアノお菊さんを視ると、誠に

肖て居る人がわつて、イエ亡なつた姉の顔に其儘だから、夫れから何だか懐しい樣な氣になつて、假に姉妹となつて、斯うして交際て見れば見る程、彼女も優しい氣質だから、何事にも互ひに、力になり合ふと約束までもたのだから、和女に限らず誰でも此末、決してお菊さんの事をば悪く云てくれでないヨ。如何なお槇も此言葉を聽き、今は何とも返す言葉なくお槇「御新造さん、飛だ粗忽を申ました、モウ是からは妾宅の事は何も申しますまい、而して此お酢もじはお雪「此器物へ入れて、妾が手紙を附けるから、子供にでも持せて遣つてれくれお槇「ハイお雪「御來客がわつたので今時分になつたが、モウお菊さんは夕飯を、喫べた跡かも知れないが、行掛は急いで行く樣にしてれくれヨ。お重は厚き眞心から、手早く一筆書添ふる、其間に下女は重箱を風呂敷に押包みお槇「岩吉とん、一寸お使に。店の方にて丁稚の聲　岩「ヘーイ……。

（第六枝）

何事に寄らず感情の強きは婦人の常なるに、お菊は此程髮結のお增と、實兄芳五郎が餘

處に聽せる話しの注意に、少しも心も動きしものか、變な感玄の起りしに、捕て加へて此兩三日精一の顔さへ見ざるより、口に云はねど胸一ッに、千々の思ひどやるせなき、主婦思ひの下女お梅は、何がな御機嫌とりくにお槇「御新造さん、感冒を召した樣に思召なら、早い間にお醫者さまに診てれ貰ひ遊ばせ、然うで無いとお熱が強くなつては、直々何も喫る事が出來なくなりますからお雪「イヽエ其樣に大層にする程でもない、先刻浴湯に往たのが悪かつたかも知れんが、決して何も心配するほどではないよ、少し頭痛がする樣で、何も喰る氣にならんが夫れではお梅、和女何家かの賣藥店へ往つて、何でも宜から感冒藥を一服贈て來ておくれお槇「ハイ宜しうございます、貴女此處に期うしてござるよりか、夜具を展ますかられ横におなり遊ばせ、お頭痛の時はお氣を沈着て暫らくでも就眠遊ばす方が宜しうございませう。お梅は甲斐甲斐敏も手早に、主人の寐處を設りお槇「夫れでは斯うして置きまして、妾は一寸往つてまゐりますお雪「御苦勞だが然うしてれくれお槇「まだ宵の間でございますから入口のコロ、は落さずにまゐります。下

女と急速賣藥店へと出行きし跡に、お菊は尙ほ種種の事のみ胸に浮み出れば、暫らく心を沈めんと、今しもお梅が設け置たる、臥房に入りて枕に就きたり、氣の勞れにや忽ちに、眠氣催ふしすや〳〵と、眠ると間も無く何時の間にやら、下女のお梅が歸り來りて

お梅「御新造さん、唯今歸ました。呼覺されて心注きお藥」オヤ妾とした事が、ッヒ寢てしまつてお梅「眞にお起し申して惡うございました、而してお藥を買つてまゐりましたが、斯んな振出し藥でございますお藥」何でも利さへすれば宜いけれど、うつ〳〵とした故か、頭痛も恰で忘れた樣に癒つて、大層に心持ちが快くなつたよお梅「夫れはマア何よりでございます、其お勢ひに貴君、れ夕飯を召上つては如何でございます、オ、眞に妾とした事が、迂りとして飛だ粗忽な事を致しましたお藥」飛だ粗忽とは、お茶碗でも破したのかへお梅「イ、エ貴女、先刻貴女が浴湯へ入ッしつたお不在の間に、御本宅の御新造さまから、何品でございますかお重詰がまゐりて居る事を、迂かりと失念して居りましたお藥」オヤ左樣、而して何か御口上でもありはしなかつたかお梅「ハイ、例の岩吉どんのお使で

ございますから、御口上も何も申さずに歸りましたが、お手紙が添へてまゐりましたお梅「眞個に御新造さんは、能く御氣の注く御深切な方だねへ、此處へ持て來てお見せお梅」ハイ。下女は起て件の重箱を持來りお梅「此お手紙が附いてございました。お菊は其手紙を手に取上け、繰返し〳〵讀了り、嬉しさうに莞爾してお藥「マア一寸お梅お優しい事、毎度御新造から頂く食物は、直ぐ旦那が跡からお越しになつて、悉皆お喰りなさるものだから、今日のは旦那に遠慮しないで、一人で喰てくれと書てあるよ、コレ御覽、御手製の海苔卷だよお梅「眞に恰で商賣人が製へた樣でございますねへお藥「格別お手際だから、見ると喰べたくなつたヨ、和女も御相伴をお爲よお梅「有難う、妾は今の先お夕飯を頂いた計りでございますお藥「それではお煎茶を入れて來ておくれお梅「ハイ。お梅は煎茶を入れに行きし間に、日來喰める海苔の香に、箸さし入れて一個二個、食ふと忽ち胸苦しく、コハ何故と思ふ間に、五臟は惱亂五体は麻痺れ、物言はんにも舌こわばり、鼻と口より逆ちる、血は紅の瀑の如く、手足をもがき七顚八倒、偖は豫て實兄が話しは、此事なる

かと心注き假令此儘死するとも、旦那にせめて此事をと女の一念聲はり上お菊「ア、――苦しい、助けてくれ……。此一聲に何事が、起りし事かと下女のお梅は、周章狼狽駈來りお梅「御新造さん、申し御新造さん、如何なさいました、夢でも御覽じましたか、モシ御新造さん、れ寐返りを遊ばせ、御新造さん〳〵。

（第七枝）

お菊は目醒めてけゞん顏、折しも門口の戸を叩く音しければ、下女のお梅は立つて戸口に到りお梅「誰殿でございます。戸外には精一が微醉聲にて　精「私ぢや、アー醉ふた〳〵お梅「オヤ旦那さまでございますか。お梅は忙がしげに戸を開けてお梅「眞に宜い處へお入て來遊ばして、斯くいふ顏を精一は熟視とながめ　精「和女は如何かしたのか、何か物怪さもした樣に見ゆるがお梅「ハイ、實は唯今御新造さんが、大層にうなされてお出遊ばしたのを、驚いてお起し申した處でございますから　精「左樣か、何を魘れたか、此折箱を開けて、中の魚を鉢へでも入換て置きな。精一は小楊枝を使ひながら座敷に打通れば、其

時はハヤ既にお菊も我に復りお菊「れ出遊ばしましたか　精「何か魘れたぢやないかお菊「ハイ、ッヒうつうつと致しますと、嫌な夢を見ましたのを、お梅が起してくれましてお梅「旦那さま、實は斯樣でございます、此四五日は貴君のお歩がお遲〳〵しう御座いますので、大層御新造さんはお案ぜでございました、處が今日は朝ッから御氣分が悪いと仰しやって、夕方には漸の事で浴湯へお越になつたのでございます、けれど子貴君、御晝飯も召上らず、夕飯も嫌だと仰しやるから、恰度今日は夕方に、御本宅から御重詰を頂きましたので、其品でも召上つてはと申しましても、夫れも嫌だと仰しやるから、日が暮ると直ぐに妾と、彼處の賣藥店まで感冒藥を買にまゐりまして、持て歸つて見るとスヤ〳〵と、お快さそうに就眠て入しやるもんですから、無理にれ起し申すも如何だと、妾は其のまゝれ臺所に居りますと、今の先恰度貴君がお越遊ばすとさに、大きな御聲で……お菊「イエ貴君、今お梅の申します通り、誠に暫時の間に怖い夢を見まして、アヽー、何だかまだ胸がどき〳〵して　精「ナァニ、何處か內部ゐ虛弱の處があるから、詰らない

夢を見るのだ、其様な時は酒でも飲で、氣を散じたら何の事も無い、而してマア如何な夢を見たのか。と尋ねられても夫れぞとは、判然に云はれぬ此場の仕誼、唯俯首て居る容子に、強ては問ず精一が、今しも下女が話しの中に、御本宅から重詰とは、如何なる品を彼のお重が、今日もまた送りたるか、テモ嘸まさき中なりと、何の氣もなく下女に向ひ　精「今日は夕飯を喫る心算で、面亭へ往った處だ大酒家の山淵と彼の梅澤なんといふ連中だから、如何して飯處か、両人は泥酔で歸って往ったから、ッヒ私もまだれ飯を喫ないが、お菊も氣色が悪さうだから、今持て來た折の香と、其重詰を下物にして、淡泊と一口飲んだ跡で、茶漬をやらかさう、お菊、和女も一口お飲みお菊「ハイお梅「夫れでは御新造さん、アノ頂いたお酢もじと、彼の儘持ってまゐりませうかお菊「エー、アノ海苔巻かへ　精「何だ巻酢か、其品は好物だ、巻酢の茶漬は酔覺めには至極妙だ。精一は何の氣もなく巻酢と聞いて頻りに賞翫し、下女が持出すと直ぐ箸を附んとしければ、お菊は慌て押止めお菊「アヽモシ迂かりと、イヱ貴君は夫を喫ってはいけません　精「何故、如

何いふものでお菊「イヱ如何と申す事ではございませんが、御新造さんからのお祢に、貴君にと差上ない様と書いてございますから　精「ナアニつまらない、お重は如彼な女だ、何でも此家へ寄越た品は、私一人が喰てでもしまふやうに思ふて、其様な事を云ふてよこすのだ、ドレ先刻からチト千松だから、毒でも搆はん喫るべしだ、毒と云ふさへ胸にあたれば、寧そ夢をば打明けんと、思ふ中ハヤ精一は、二ッ三ッ四ッ續けて喰ひ　精「アヽ、手細工だが海苔が本場だけに格別甘いコレお菊、和女も喰べてお梅にも遣りなお菊「ハイ妾は　精「嫌か何故、巻酢は好きであらうお菊「左様ですけれど　精「アハヽヽヽ、中の嗜いお重から寄來したのだから、大丈夫だ、毒味とソレ此通りだ。また一個を口に入れたり。

（第八枝）

島の内の蠣屋町に、路次とは云へど小意氣な住居は、彼の女髪結れ増が家なり、戸籍面では水野マスと、女戸主の寡婦なれど、已れと出商賣の事とて、雇婆に留主居と煮焚を

任せ、板間と格子戸の拭き掃除は梳女の甲乙が持役なれば、なか〳〵清潔に行屆きたり、此お増が内縁の亭主殿は佃三五郎とて、舊東京俳優尾上某が床山なりしが、性來喧嘩を好み、到底も芝居者の粋畑では生育兼る無頼漢ゆゑ、先年當地に來りてより、一時は床散髪師にもなつて見たが、一月經ぬ間に廢業し、れ増と出來合ての後は此家をお興の据處と定め、小遣錢を請求てゝ、賭博に出掛るを職業となせる男なり、今日は友達の芳五郎が訪ね來たり、小酒宴を初め、鋤鍋の音忙しきを下物にして、先ほどより談話の半途と見ゆたり　三「ヂヤ何か、大層此節は眞面目らしく、散髪にやア櫛目を入れて、時々お羽織なんぞを着込んで歩くのは、其一件があるからだな　芳「左樣ヨ、だから今日も實はお増さんに逢ふて、少し聞きてへことがあつて來たのだが、斯んなに厄介になつちやア濟ねへなア　三「ナアニ、如何せ汝の大願成就の日にやア、何か祝事をするだらうから、トキニ芳公お増の話しぢや汝の妹と云ふのは、斯う云つちや何だが、汝と兄妹の樣にやア思はれねへ、大層嚴格性質だと云つて呆れて居たが、夫れでも汝に頼れた旗があるか

ら、此間も往た時に餘處でとから持込んで、本城を乘取せる樣に煽動つけたが、如何して汝の妹は肝腎の本妻を信用して居るから、アノ調子ぢや芳さんの思惑通りにや、行くめへと言て居たヨ　芳「處が大變な事を見附出したから、アノお菊に本城を乘取せて、乃公が北の方のお兄樣だと云ふ思惑は、ガラリと脚色の立替だから、其事も相談する心算だ、トキニ猪口はオヤ〳〵眼鏡ぢや恐れるねへ、大器な方を此方へ廻しねへ　三「サア芳「有難へ。三五郎が酬た盞を受けて一口に飲干　芳「乃公は本年は餘程星廻りが吉いと見ねるせ　三「格別然うでもあるめへ、此間まで愚痴を盈して居たぢやねへか　芳「何を、何日を聞いたせ、夫れが何で星廻りが吉いのだ　芳「マア聞てくんねへ、乃公ア汝も知つての通り、元來は當地の出生だが、親爺は母親に妹を授けて、乃公が幼稚の時分に東京へ連れて往つたが、十四の齡までは眞面目にお店拳公をして居た處が、其年に親爺は亡なるし、夫れからは芝の親分の内へ往つて、十五の齡にやアモウ汝、陸軍の馬部家へ首を突

込んだのサ、それからおひ〳〵友達が出來て、三田の邸で馬丁となつてからでも、五六年は彼のとほり勤めて居たところが、フトしたところからお辰の女に引かゝつたばかりに、三田の邸は梵天國ヨ、そうかうする間に彼女と薄情にも、世話になつてる旦那のところへ、表向で嫁入たと聞いてから、其時にや如何なに腹が立たか知れねへが、其旦那と云ふ野郎の名も知らにやア、町處も知らねへもんだから、口惜紛れに當地へ來て見ると、乃公が妹のアノお菊は、南地で全盛の藝妓になつてる事が判つたのサ、れ袋が器しく云ふのも搆はねへで、小遣をせぶり附て居たが、其お袋も亡くなるも、乃公も此春からまた東京へ暫らく往つて居る間に、アノ今橋の旦州に落籍されて、立派な囲者になつてるから、此奴は妹の尻を撲つてアノ、本宅へ乗込すには本妻と如彼に中が睦つては、此狂言は無益だと思つたから、汝の處のれ増さんから甘く持込せ、後へまた乃公が往つて、重箱の底を小揚枝でさらふ樣に云つて聞かせたのだ、處が聞きねへ、勝田の本妻といふのゝ乃公が索ねて居る、有明のお辰に逆へねへのだ　三「芳公待ねへ、开奴は大分話

しが面白さうだがお増が汝の妹から聞てるのには、本宅のレコはお重とか云つたヨ　芳「實は乃公も其處に不審を起したが、名前は兎も角、見て來た寫眞が確實な證據だ　三「而して夫れに違へがなくは汝は如何する了簡だ　芳「开處が汝と相談だ、オヤまた眼鏡か。此時鋤鍋の焦附音シュ――。

《第九枝》

三五郎は鋤鍋に肉と葱を入れ添へ　三「鍋までが話しを聞いてやいて居やアがる、トキニ已ア知つての通り、東京に居る時分にや芝居者だから、俳優の凄みな色情話しも聞きもしまた、實際に視た事もあるが、此處で以つて汝がマア假に、其旦那の宅へ乗込んでサ一番以前の事を言出して、菊五郎の臺詞で脅迫すにしてからが、其旦那は汝の妹が世話になつて居る、矢張旦那と來て居ちや、如何も开處ゝ處が變な塩梅しさで、汝の男を立る日にや、れ菊坊の方は縁斷になる事は、コリヤ云ふまでもねへ、當然だらう　芳「ソリヤ汝、事と品に依れば、如何いふ理屈に話しが轉がるかも知れねへが、斯いふ時は譬に

も云ふ通り、三人寄れば文殊の智慧だお増さんは尙だ湯から歸らねへのか　三「眞に、大分長湯だ。三五郎は首差延て厨許を覗き　三「婆や、お増はまだ歸つちや來ねへのかへ、オヤお増、和女其處に居たのかお増「今其處へ往く心算で、一ぷく呑んで居た處だヨ　三「和女の煙草も久しいもんだ　芳「お増さん、內に居るのなら早く來て相談に乘つて貰へたいもんだ。れ増は最前からの話しを、概略は聞き取りたるものと見え、芳五郎と三五郎が中央に座りてお増「妾も先刻にから芳さんの話しを聞いて、實は驚いて居るンだヨ、眞個に世の中には不思議な事もあるものだねへ、併しアノ歌菊さん、イエお菊さんは其事を、ちつとも知らないのかへ　芳「ソリヤ和女知らう道理がねへのサ、开處で和女にも相談だが、成程三公の云ふ通り、乃公も稻妻の芳五郎だ、下手にまでつくのも嫌だが、全然アノ勝田精一といふ奴は、此大阪では近來の金滿家とは聞いてるが、性質が判らねへぢや、話しを持込むのに都合が悪いテ、お増さん、和女是まで逢つた事はあるだらうねへお増「否へ、面と向ふて逢は爲ないヨ、併し噂も聞てるし、此間菊見の時に梅が辻でち

よいと横顏を視たが、中々立派な旦那だつたヨ　三「何しろ汝が乘込で嫌な文句を並べるにしてからが、オイソラと芝居で演る樣に、百と二百の金を出に極りもすめへ、夫よりか妹の尻ゑ叩いて、汝は當分飽までも眞面目と見せて、兄弟して咬り取にしては如何だ、お辰だつて汝に沙汰なしに、アノ旦那の方へ往つた限り雀、れ宿は何處とも報らしもせず、其後便宜もしねへ處を見ちや、彼女の了簡も如何なで居るか、茲は一番考へものだせお増「三さん、和郎は然うお云ひだが子、又芳さんの氣になつて見ると、然う斷念の附もんぢやなからうと思ふワ、だから妾が思ふのには、コリヤ兎も角も御新造に、其ナニサお辰さんとかお重さんとかに、芳さんが窃と逢つて見ては如何だらう子、而して當人の心底次第で、また法のかき樣もあらうぢやないかへ　芳「开處だテ、是れが東京に居る時分の樣に、料理茶屋の娘ならソリヤ和女、呼び出すには譯はねへのだが、今橋二丁目といふ場處柄で普通の商人の家ぢやア無し、一寸むつかしいせ　三「だからヨ、寫眞を見ねへ昔だと思つて、誰かに彼女が了簡をば、能く探らせて見ねへな、居處さへ然う判つ

たからにやア、何日が何時でも此狂言は出來るだらうお増「ソリヤ今云ふ通り、他人の和郎が了簡と、此芳さんが腹とは大違ひだから、お待ヨ、妾が何か工夫を編出して進げやう。お増は暫らく小首を傾ぶけ、何か頻りに考按を凝し居たるが、フト心注きし事あり しや莞爾としてお増「ある〳〵、宜い事があるヨ　三「何だ宜い事とは　芳「如何な事だへ、お増さんお増「一寸お待ヨ。お増は押入の棚にある反古箱より、怪しの古手紙を取出し持來りお増「是れさへ有れば大願成就、マア是れを一寸御覽。お増が渡す古手紙を、芳五郎は手に取りて默讀す　芳「コリヤアノ旦那から、妹の處へ寄來した手紙ぢやねへかお増「此間お菊さんの處へ仕事に往た歸りに、其手紙をば妾の手拭紙だと思つて、袂へ入れて歸つた處が、お菊さんへ宛た旦那の手狀だから、反古箱へ其儘に蓄つて置たのだヨ　三「夫れは宜が、大願成就とは如何するンだお増「开處は秘密の奥の手サ、芳さんも和郎も、一寸耳を両人「ウム……お増「ナア、宜しいだらう子　芳「なアる程。芳五郎は初めて莞爾しながら、有合せの盃をお増に献し　芳「お前本當に女楠だ、お前の智恵には已ア感心股くゝ

りだ。

《第十枝》

勝田精一は梅澤作次郎に誘はれて、今日の夕潮車にて京都に赴きたれば、季候柄と云ひ如何で甲乙處の、紅葉見などで両三日は、彼地に滯在するならん、其間には彼れも片附、是れも斯うして置べしと、流石お重は妻の役、婦人の省慎兎や角と、思案の折から下女お松が、文箱にも入ざる一通の書狀を持來りお松「御新造さん、旦那樣から此お手紙がまゐりましたお重「オヤ、何處から。お重は不審ながら書狀を取つて、上書を覗ると夫の手跡なり、手早く封を押開きて、口の中にて讀了りお重「而して誰が此狀を持て來たへお松「ハイ、車夫さんでございます。お重はまた繰返して書狀を讀みお重「眞に、車夫を迎へに遣るから、其車に乘て、直ぐに來いと認てあるが旦那さんが日來の御性質にもお似合なさらず、一寸近所へでも行く樣に、コレお松ヤ、髪は爲方がないから此儘行くとしようが、京都は着物に氣の張土地だから、何を着て行う、而して其車夫を一寸待せて置てお

くれ。お重は俄に慌て出し、衣服などを更めてお重「而してお松、妾は何の御用かは知らんけれど、停車場まで出て來いとの、れ弥が來たから往て來るが、殊に寄ると妾も京都へ供して行くかも知れないヨ、併しお弥にも昔てあるから、妾が假令れ供をして往つても、餘まり其事がパッとしては悪いによって、雖にも京都へ往った事は、内證にして置ておくれ、斯は云ふものゝ直ぐ梅田から歸って來るかも知れないが、何分往って見んと判らんが、不在中は氣を注けておくれヨお松「ハイ畏まりましたお重「皆なの者に然う云って行くも、格別大層だから、萬事は和女に頼んだヨ、而してモシ妾の不在中に、浮世小路の方から何か云ふて來たら、不都合のないやうにしてれくれお松「ハイ、宜しうございます、何もれ忘れものはございませんかお重「オヽ眞に何程何でも空手も往けないから、手早く手箱筒の抽斗より、幾許かの金を取り出し、合財袋に收めて帶の間に挾み、夜分なれども蝙蝠傘を手に提げて、迎ひの腕車に打乘て、我家を出しは夕暮頃なり、冬の日の短くまだ梅田まで來たらぬ間に、日も暮果て、人顔も確かに分かぬ往還を、車夫と櫻

橋を渡ると裏町を西に馳り、怪しの枝道を横切りたり、腕車の上からお重は氣を揉みお重「車夫さん、何處へ行くのだへ、停車場へ何故眞直ぐに行ないのだへ。車夫は委細搆はず駈りながら、或る小料理屋の戸外に楫棒を下すと、其音を聞附けてや、一人の下男が慌たゞしく立出で　男「入ッしやいまし、先程から旦那様がお待兼でございます、サア何卒れ二階へ。此言葉にお重は、不審の中にも少しは落着き「お重「此家へ旦那はまゐって居られますか　男「ヘイ、先程御尊來なさいまして、夫れでお手紙を持せて貴女をば、お迎ひに差上げたのでございます……若衆さん、御苦勞車夫「ヘイ左様なら。車夫は空車を挽きて己が帳場へ歸り行きたりお重も今は稍安心して、料理屋の下女を案内に二階へ昇りお重「此間ですか　下女「ハイ左様でございます、旦那さん、お伴れさまがれ入來なさいました。云ひつゝ襖を押開くにぞ、お重は夫の精一と、思へば何の遠慮もなくお重「ハイ、唯今大きに遲うなりました。と言ひつゝはじめて顔を見るに、コハ抑も精一にはあらずして、まだ東京に居りし頃、割なき中の情夫、三田の邸の馬丁にて、稲妻と綽號を得た

芳五郎にてありければ、ハッと驚き言葉も出ず、また座るにも体裁悪く、茫然として立居るを、容子を知らぬ此家の下女が下女「貴女マアお座りなさいまし、妾とお爛を直してまゐりませう。氣轉も菊の摸樣ある、爛陶器をば携へて、其儘座敷を下り行きたり、芳五郎は手に持煙口の酒を飲干し　芳「御新造、勝田の御新造……オイサお辰さん、萬更知らぬへ中ぢやア無し、然う起つたまゝ何時までも、衣川の辨慶を氣取ぬへで、久しぶりだ、マア此煙口を受けてくんねへ。

《第十一枝》

お重は先刻の書狀を僞筆とは思はざれば、如何にとても合點の往ずと、帶の間より取出すを、芳五郎は尻眼に視て　芳「オイ、マア落着て乃公の云ふ事を聞きねへ、其書狀も拵へものだ、今日と旦那の稲印が、京都へ往つたと聞いたから、此狂言を書て見たのだ、斯う云や乃公が頭から、恨み小言でも云ふだらうと、和女の方ぢや思つて居やうか、然うする乃公が了簡なら、何の斯して窃りと、和女を此家へ呼び出すものか、之れでも稲

妻芳五郎だ、事に寄つちや旦那の宅へ、轉げ込ひめへものでもねへが、然うすりや和女の身の上と、察して此家まで呼出したのだ、マア一口咽を濕してから、何とか語を云ひねへな。平素の氣質に似氣もなき、穩和しやかなる芳五郎が、今日の容子と猶更に、底氣味悪く思へども、素より嫌では無き人に、此再會の嬉しさが、交りて疾みに言葉も出す、唯吐息のみつぎの間から、下女が爛酒を持來たればお重「熱いのなら、此器へお酌をして下さいナ下女「ハイ、オヤ貴女、其器は煎茶のれ茶碗でございます子。と云ひつゝ下女が酌する酒を、キユーと飲干しお重「用事の時と手を鳴えますから、开處へ置て往つて下さい下女「ハイ、ヂヤ御緩りと。下女は其儘立去る跡に、お重また、手酌にて、一口飲んで芳五郎に獻しお重「何から話さうにも格外思ひ掛ないのと、和郎に云ひ譯がないので、實と先刻にから、穴でもあれば消たい位ですヨ、嘸和郎の氣では、妾が此樣な身になって居て、一度の便りもしないとお思ひだらうが、其事を委しく云ふと幼少の時から養育られた、アノ有明の養父さんの事を、悪く云ふにあたるから　芳「乃公だって和女と

は、如彼いふ中で居たもんだから、東京に居る時分に、和女が旦那の處へ嫁入つたと聞いた時にやア、如何な心持かマア察して見てくんねへ、和女の養父は云ふまでもない慾一方だから、金と聞いたら瀕病人の婿にでも往けと云ふだらうが、夫れをオイソレと云つて往く、和女でも有めへだらうお重「ソリヤね云ひの通り、妾も普通の事なら、旦那のところへ往くのではなかつたけれど　芳「フーン、惚てるからお興を上げたのかお重「アレサ、マアお聞ヨ、有明の内は知つての通り、負債の中から押切て家業をして居た處へ、否が應でも千圓といふお金がない日にや、養父さんは懲役に行くといふ事で、其時には勝田の旦那が、恰度東京に滞在の時分だつたから、妾には相談なしに養父さんが千圓を借込んだのサ、然すると旦那も、金の爲めといふ譯でもなからうが、何日が何日までアノ養父の傍に妾を置のは悪い、如何せ終には娼妓にでも賣れては可憐さうだと、夫から如何いふ話しをなすつたのか、妾は公然で旦那の方へ、籍も送る事になつたもんだから、其時に妾は養父さんに、和郎の事を打明けて云つた處が、ナアニ芳が彼是いふ氣遣ひが

あるものか、彼奴は和女こそ知るまいが、大阪の方には立派な女房もあるし、假令また何とか云つた處で、乃公も有明の助藏だ、僅な金でも遣て彼是は云ひせないと、妾が何と云ふても聽ないで　芳「カウ〳〵、其言譯は既往た事、今更云つた處で爲方がねへ、養父は兎も角サ、斯うして今日和女に再會た曉は、和女が是れから先の了簡を聞かしてくねへ、如何せ東京に居た時分は、假令旦那があるにしても、和女は有明の娘のお辰だが、今ぢや勝田の御新造と云はれて、れ重さんとか云ふさうだから、和女の思惑も少し位は異つたらうヨ、夫れを野暮に乃公だツて、以前の事を彼是と云ひ出して、此上に嫌はれたくも無へと思ふから、能く氣を沈着て返事をしなせへ、此時お重はいよいよ返事に息詰り、浮む涙を襦袢の袖口で拭ひお重「今日斯して和郎の顔を見て、而して斯んな事を云ふた處で、何を云ふかとお思ひだらうが、妾のお腹の底をば和郎に、見て貰ひたい事があるのだけれど　芳「ヘン、如何な器械で拜見するのか知らねへが、覗ねへ方が腹が立めへお重「アレサマアお聞ヨ、内の旦那に子お菊といふ外妾があるんだヨ、其女と以前

當地の藝妓衆だつたが、眞個に夫れは〳〵、和郎に能く似て居るもんだから、他人には其樣な事は云はないけれど、妾の氣では和郎の心算で、姉妹の樣に思つてる位だから。跡云ひさして俯首居るにぞ、芳五郎も心中に、偖はと思へど顏にも出さず　芳「夫れはマ、ア御奇特な事た、夫れよりか今も云つた、此行末の了簡を聞かしてくんねへ、返事次第で思案があるのだ。

（第十二枝）

勝田精一は梅澤作次郎が紹介にて、今回京都の骨董家が催す入札會に出席し、書幅器物等種々購求めて大きに愉快を盡し、今日はまた嵐山の紅楓を眺めんと、例の梅澤を伴ひ木屋町の旅亭を出て、三條通りを西に歩みながら　精「京の市街も石高道が、追々と改良しましたねへ　作「左樣、夫れに此通りなどは、市中の目貫ですから道路も此通りです　精「大阪と違つて、家毎に舊家が多い樣に見受られるが、君は京都の方は格別黑いが、四條通りから見ると此三條通りの方が、豪商が多いでせうねへ　作「左樣です子、如何しても

四條通りの方は、東に彼通り御旅町を扣へて、橋を越ゆると劇場に花街と來て居ますから、隨つて往來も頻繁ですが、其通行する人も恰ど大阪なら心齋橋筋の如き人種でせう、だから維新前から繼續して居る商家は、此三條に比しては尠ないかと存じます、マア何でも此下の町の六角通、また室町などには、隨分門閥家が軒を並べて居ます、夫れに西陣も昔と大違ひですが、夫でも彼の近邊は久しく火災に罹りませんから、家屋の古い事と實に驚きますヨ　精「古いといへば、昨日の入札で手に入つた、アノ其角の短冊は君は如何いふ鑑定でした　作「イエ、別に深い仔細はありませんが、御尊宅には豫て故人の俳句をお集めになつて在から正物で名人の手跡ならばと存じて、お勸め申したのです、而してソレ先達て拜見致しました、鬼貫の短冊に、エー、蓬來の麓へ通ふ鼠かなんぞは、意匠が甚だ面白いですねへ　精「成程、夫れで君はアノ短冊を非常に勸めて下すッたのか、併しなか〳〵アリヤ掘出しものですねへ　作「尤も左樣、畢竟貴君、彼れが一葉ですと表裝をして軸にする位ですが、貴家の樣に古人の名句を、澤山お集なさる方には、

是非見逃す事は出來ん短冊です　精「何日でしたか君に見た嵐雪の句に、黄菊しら菊その外の名はなくもかな、抑は格別面白いですねへ　作「如何も彼人達の、名人の句作は亦別です、トキニ菊と云ば何日ぞは一度お伺ひ申さうと存じて居りましたが、歌菊さんは其後如何お暮しですか、君が手活の花となつた以來は、ツヒ御疎遠に打過ぎましたが　精「イヤ、別に何です、相變らず壯健で居ますから、チト御通行の際はお寄り下さい　作「貴君に斯樣な事を申すと何だかお諂する樣に思召さうが、例の短冊ではないが、實にあの歌菊さんと堀出しものですよ、浮沈社會に居つたもので如彼のとわりません、チト陳腐な形容詞で申さば、泥中の蓮とも謂つべしです、エヘ、、、、、精「アハ、、、、作「イエ戯談でなしに眞個に、其換りにまた悪い事は悪いと申すですが、アノ歌菊さんにも似合ない、悪徒の實兄がわつて、彼女のお袋などと、其兄の爲めに何樣なに心配させられたか知れやしません吃度四五年は壽命を縮めたでせう、當今アノれ袋が存生て居やうものなら、如何なに喜ぶかも知れないのです　精「君はまた大層委しいが、お袋とは御知己で

したか　作「左樣、彼の人の亭主がなかなか大酒飲でして、今云ふ兄を連れて東京へ行く時分から、非常に苦勞をした人です、併し娘に似て頗る良人物でしたから、私が亡母などとは寺同行で、アハ、、、、、大分話が酒弊染て來ました子、トキニ迂かり話しながら腕車に乘忘れましたが、此處遊から車に召しては如何です　精「ヂヤ君が御苦勞でも、一人乘二輛命じて下さい。兩人此處より辻車を雇ひて、嵐山に至るまでは、別れ〳〵の腕車の上、雜談もならずゆられ行きたり、眺て嵯峨村に掛る渡月橋の手前にて腕車を歸し、四方の景色を眺ひれば、春にも優る樹々の色、錦織なす艶麗かさ、大ゐの川の水に散る、紅葉は流れの間に間をくゝり、書にも及ばぬ有樣に、我を忘れて精一が、進む向へ來かゝりしは、洋裝の有爲紳士にて、互ひに慮なく顔を見合し　精「オ、、篠崎君　作「ヤー、勝田君、君は何日當地へ、兎も角も久々ぢやから、アノ茶店まで來たまへ、其方は御同伴ですか、ヤー失敬しました、我輩は勝田氏とは別懇にする、篠崎高敬ですアハ、、、、。

（第十三枝）

京都上京區三本樹にて、東山を斜めに望む一搏へ、臭渠き露路の門柱には、篠崎寓と表札を掲げ、玄關の靴脱石には、一足の履物を行儀に並べたるにて、來客ありと知られたり、此家の主人高敬は、ツヒ近來まで某省の次官を務め、時めきし顯職なりしも、病痾の爲めに職を辭し、京都にと緣故の人多きまゝ、此地にて甲乙處の地所を買得し、其内福なる事は人の羨む程の貯蓄家なり、今主人の居間にて遠慮なげに雜談する客人は、彼の勝田精一にて、高敬とと格別親しき中と見えたり　精「實に今日嵐山で、突然お目にかゝつた抔は不思議ですねへ、豫て君が此京都に御在住の事は、山淵君に聞ては居ましたが、而して其後は追々御壯健な方ですか　高「ナアニ、御覽なさい、此通り今頃から袍温を被て居る位だから、壯健とは云へないです、併し醫者は時々散歩して、充分の運動をする方が、胃腑の爲めに宜いと云ふので、滕々今日は嵐山へ出掛たが、イヤなか〳〵、風景の美なるには驚いて、彼是と散歩して居る時に、君に出會たのサ、トキニ君、羽織

でも脱で、マア久々だから寛りとしたまへ旅舍の方は同伴の者が居るだらうから、搏ふまいぢやないか　精「ヂヤ失敬して羽織を　高「オイコレ、勝田さんのお羽織を其方でたゝんで置け、而して早く酒を出さんかい　精「イエモウ決して　高「お心安いから御遠慮はない、トキニ新聞紙上で見ると、君は近來格別交際を廣くすると見て、大阪で起る會事には、大抵首を突込で居らるゝ樣に見受るが、隨分如彼云容子では忙がしいでせう　精「イヤ據ろ無引張出されるのですが、往て見と知た顔が多いもんですから、夫から夫れとツヒ賴れる樣な事で、高「イヤ夫が君に信用があるからだ、何しろ結搆ぢや、我輩などは君の御親父が、まだ存命な時分から、君は才子であると云つた事があるが、御親父も今日の君の地位を見ずに亡くなられたは、實に遺憾ぢやテ、斯う申しては失敬ぢやが、先般の樣に小學校の教員位をさせて置のは、實に惜い事だと思つて居たが、併し今となつて見ると、夫れも履歴の一點で、今日では大阪で人望を得る樣になられたから、我が輩も大きに安心と云ふものぢや　精「舊藩の頃は、先年御逝去になつた尊大人と、愚父共は

同藩の情誼で、東京でも非常の御懇情に預つて居つたが、其際は僕は御承知の不品行で、死にました親共などは、僕を見る事我子ながらも、蛇蝎の如く嫌忌て居ましたものだから、東京で御在職中も、存じながら御不音に打過ぎました、併し以前の精一と今日の精一とは、人間が生れ變つて居ますから、如何か爾來は御懇命に願ひたいものです　高「ナアニ其心配は要ない事だ、失錯は則ち經驗だから、何でも經驗のある人物でないと話しは出來んテ、夫れに君が今日の信用は、山淵が來る毎に話しをして、羨んで居る位だから、モウ確實だ、而して大阪は、何區の何町邊にお在住だ、近來は　精「ハイ、東區今橋二丁目に居ります　高「左樣か、夫れは如何も第一等といふ所柄だ、而して御家内は。此時精一は稍躊躇せしが、飲みかけし煙草をはたき　精「東京に居る頃に、或家から娶りました　高「夫れは宜しい、まだ子供もあるまいが、大阪へ往けば是非お訪ねをしよう　精「如何か是非お待申します　高「而して何だらう子、當今では大抵の大阪紳士には、交際をばするだらうが、何處か手堅い銀行の頭取に知己は無いかへ　精「イヱ夫りや貴卿、國立

でも私立でも、是れと申す人達には懇意にしますが、何か御取引の御用ですか　高「ナアニ、別に取引をする譯ぢやないが　精「何れへでも御紹介をしますから、御遠慮なく　高「イヤまたお頼み申すかも知れんテ　精「トキニ今日同伴しました、作次郎といふ男も、大抵の紳士や豪商の家には出入をする男で、全体本業は表具師なんですが、格別名人の方でない處から多くの花主があつても、襖の貼かへか、壁の腰帖ぐらゐより職業がないので、近來は骨董の方に熱心して居ますが、隨分鑑定家ですから、骨董の賣買を周旋して、一寸理屈よく生活て居ます、貴卿もお嗜きな方ですから、明日は昨日僕が入札會で購求めた品を、御覽に入れかたく作次郎を伴れてまゐりますから、骨董類のた話しを爲すつて御覽、一寸一奇人ですから　高「ソリヤ、何より樂しみでせう。主客が話しの折から、下婢は酒肴を運び出したり。

（第十四枝）

勝田精一の妻お重は、此程稻妻芳五郎が策略にて、僞筆の手紙を夫の手跡と視過まり、

下女のお松にのみ萬事を托して、廻ひの腕車に打乗りて、至りし先方にて思はずも、昔馴染の其人に、再會し其夜の有樣は、如何なる話しをして別れしか、知るによしなき事なれど、其夜と十一時過ぎに今橋の家に歸り、れ松の体裁は宜き程の事を言捧へて濟せ置しが、また熟々と思ひ返せば、明日にも夫精一が、京都より歸り來りし時、何ぞの雜談の其序、お松が迂かり彼の夜の事を、言出すまいにも限らぬ事、然うある際には我身の大事、コリヤ今の間にアノお松に、暇取らすが上分別、されども何の失錯もなきに突然夫れと云ひ出しては、容易な事では歸るまじ、といふて此儘置ときは、必らず何日かに知れる大事、モウ夫も今夜か明日に、歸る日取と氣も焦ち、種々思案の其中に、何やら一つの工夫を編出し、態とお松を徐かに呼付け曰「お松、和女は東京からまだ妾が、當地へ來ない前から當家に勤めて居て、誠に萬事に氣を注ておくれだから、實は陸で且那さまと、其事を毎度云ふて喜んで居るのだが、少し今度と都合があるから、出替り時でない中途ではあるけれど、今日から和女には暇を出します、コレ、何も涙合む事は

ありやしないヨ、だから子、荷物は晩にでも誰かに請取によこして、和女は今ッから宿の方へ歸つておくれ。お松は格別意外の事に、唯目に涙を浮めるのみ、暫らくは俯首居りしが、驚ての事に顔を上げお松「御新造さん、妾は如何樣な不調法を致しましたか存ぜませんが、格別突然な事で、トント思ひ出す事も出來ませんが、長々斯して不束な者を、お目長く使ふて戴きまして、今日俄然にお暇が出たと申して宿へ歸りましては、何と云ふて叱られるかも知れません、夫れに豫て申し上げます通り、島の内の宿は妾の爲めには、アリヤ他人でございますから、尚はの事喧ましく申しますお事、夫れはマア氣の毒だけれど、妾の方も都合があつて、此中途に暇を出すのは、よく〳〵の事だから子、何にも云ずに歸つた方が、和女の身にも難癖が附ず、お互に要ぬ事を云ふ世話がなからうと思ふてサ。お重の言葉は何とやら意味ありげに思へば、れ松は涙を拭ひもあへずお松「唯今のお言葉に、よく〳〵の事と仰しやりまして、而してまた、難癖が附ずと宜いといふ樣な事と、如何いふ理由でございます妾も宿へ歸りまして、何で此中途半端にお暇

が出たのぢや、何か良ない事でもしたのかと、尋ねられました時に、唯お暇を出されたとも申されませんから、如何な不都合を致しましたか、妾が此末の心得にもなりますから何卒仰しやつて下さいまし。とまた泣出すをお重が胸には、最と憫なしと思へども、心を茲にて鬼にせずば、後日我身に禍ひを、招く種ぞと氣を持かへお重「お松、和女はマア優しい顔をして居て、其様なしら〳〵しい事をば云ふものではないヨお松「エーお重「妾が知らないとお思ひだらうけれど、何も角も能く知つて居ます、サア何をといつて、和女の胸に問ふて見なお松「貴女の仰しやる事ではございますが、妾の胸には何も記憶と申してはお重「無いと云ふのかへ、そんなら、マア和女の胸には無いとした處で、和女内の旦那には、妾といふ者もあり、亦知ての通り浮世小路には、お菊さんといふ外妾もあるのに、マア何をば目的で如彼な事をしたのか、妾は意外の事で呆れて物が云へない位だ、話しといふものは奥を聞うより緒端を聞けといふから、是れで大抵解つたらうから、何にも云はずに歸つてれくれ、給金は荷物のときに渡してもよし、又今和女が持て歸ると

もお松「イヽエ、お給金なんぞは如何でも宜しうございます、唯今のれ話しの容子では、何だか妾が旦那さんと、譯でもある様なお口振りでございますが、ソリヤ貴女にもお似合遊ばさん、お鑑定違ひでございます、旦那さまが何でまた、妾の様な不嫌致な者に、オホヽヽ、意外の事で妾は、可笑い位でございますお重「和女は妾の顔を見ると、嘸可笑いだらう、もつとれ笑ひ、併し笑はれる妾の身になつて見な、如何なに口惜いか知れないもの、サア〳〵可笑い妾の顔を見て居ずと、早く歸つておくれお松「イヽエ貴女妾が笑ひましたのは、左様ではございませんお重「エヽモ憤悶ねへ、何であらうと氣に適ないから、今から和女に暇を出すのだ、キリ〳〵と宿へ歸つておくれ、コレ誰ぞ〳〵。

(第十五枝)

主と病には勝れぬ俚諺、お松は口惜しくは思へども、傍輩の甲乙に宥め賺され、兎に角一旦宿へ歸りまた、詮術もあるならんと、皆それ〴〵に暇乞ひして、悄然歸りし心の中乙餘處の見る目も氣の毒なり、友傍輩にかゝる事の、有し其日は何となく、家内の人々

愁然として、此處では密々彼處では、呼やく酔も疵持足のお重が身には我事を、讒りもするかと氣を廻し、良心に咎ひる折しもあれ、小間遣ひのお琴が襖を開けて手を仕へお琴「御新造さん、表作さんがお入來なさいましてござりますお重「表作さんとは梅澤さんかへ、旦那樣も夫れぢや御一緒かへ。お重は夫が京都より歸りしと思ひ、能うマアお松を暇遣つた、後で誠に僥倖と、出迎ひの爲め立上ると、早や次の間まで來りしは梅澤作次郎なり、大形の風呂敷包を携さへながら打通りて　作「失敬致します、トキニ二三日の心算の京都行きが、申譯なう遲なりまして、實に如何もお重「委細は郵便が屆きましたから、安心はしましたが旦那さんの眼病は如何な容体です、而して今日は和郎お一人ですか作「サ、、旦那も是非お歸りの筈でしたが、モシ、意外な事が起りまして子。お重は夫の身の上かと忽ちに顔色變お重「旦那さんは如何かなすッたのですか　作「イ、エ、旦那はホンの逆上目ですから、御案じなさる事はございませんが、アノソレ、三本木の旦那が、孫ての御病氣も餘程御快方なもんですから、私がお話丈に參つた時なんぞは、平常の通り

御病人とはお見受なさらん位でしたが、昨日の夕刻から俄然に變が來て、當家の旦那も御迷惑でせうが御看病の御手傳です、イヤ實にとんざお關係になつたものです、开處で私は、甚だ自由がましい儀ではございましたが、明日は北濱の旦那の御供で、筑前へ行く御約束があるものですから、失禮ではございますが、今日お先へ歸りました譯合でお重「然でしたか、此間のお郵書に、久々で篠崎樣に御目に掛つて、お宅へ參て御馳走に成たと云て有ましたが、其樣なにまたお悪くれなり遊ばすとは、嘸御家内のお人達は御心配でせう　作「如何しても長々官途にお就なすッて居て殊に御役向きが重い程、種々な御心配があつたでせうから、夫れが今日自由のお身躰におなりなすッたもんですから、俗にいふ勞れが一時に出たのでございませうお重「何にしても御心配な事でせう、然して其大形な風呂敷包は何です　作「此品が則ち今度のお買物です。作次郎は手早に風呂敷包を開き、箱入の器物軸物等を取出し　作「今度の御買物は悉皆堀出しもの計りです、此器物類は旦那がお歸りの上で、寛々と御覧遊ばせ、まづ貴女向きは此軸物です、一寸憚りで

すがと。云ひながら掛物の掛紐の處をお重に持せ、次第に開きおがら中の畫を示し　作「如何です、景文の花鳥も澤山ありますが、斯んなに能く出來たのはありませんせお重「妾には畫の良否は解りませんが誠に美麗ですねへ、掛物は此品だけですか　作「イエまだ此處に山水畫がありますが、御婦人には如何ですか、斯く云ひながら以前の軸物は卷收めて箱に入れ、何やら俄然に思ひ出せしか、別に帛紗に包みて懷中せし、一葉の短冊を取出し　作「迂かりして居りました、旦那が別段にお言傳のあつたは此短冊です、彼女は斯う云ふ發句が好きだからと仰しやいましたが、是れと子貴女、其角の句です、尤も御當家には名人の俳句の短冊は、澤山御所持なさいますが、此短冊の樣に名高い句を直筆で書たのは、なか〳〵得難いものです、チト短冊は虫が喰つて居ますが。作次郎がさし出す短冊を、お重は手に取り何心なく其句を讀むと『稻妻や昨日はひがし今日はにし』と世にも名高き稻妻の句に、ハッとお重は胸塞がりモシヤ旦那が稻妻の芳五郎の噂を知つて、此短冊をば作次郎から殊更に、私にお見せなされし事では無いか、昨日は東今日は

にし、とまた繰返し讀むを傍から　作「如何ですへ御新造さん、貴女と何より其れがお嗜きでせう。と云はるゝ程尚は氣味惡く、話しを他へ轉じかへお雪「梅澤さん、旦那は何日お歸りですへ　作「サー、何日になりますか其邊とッとお雪「左樣ですか。またも短冊打眺め、暫し思案を爲し居たりぬ。

（第十六枝）

勝田精一は嵐山にて、慮りなく出會し篠崎の寓居を、屢々訪ふには深き慮かりのある事なり、夫れと知らざる高敬は、深く精一を信ずる者から、萬事を心措きなく物語り、其身が病ひの徒然には、好き談話相人の出來しと喜び、一日二日と歸阪を引止むる中、孫ての病ひに變症を起し、僅に一兩日に危篤の容体となりければ、家内の周章一方ならず、醫藥は素より晝夜を差別ず、看病に手を盡しけるが精一も茲ぞ我其心を見する好機會と、我身は眼病に罹り居るも脈はず、篠崎の家に詰切り、患者の傍らに在て何くれと心を用ゐ、最と實直だちて看病する中、昨今と高敬も少しく快氣の容子なれば、一先歸阪せん

と暇を告げ、何れ重ねて上京すべしと、約束しつゝ其日の夕方、七條停車場より滊車に乗じたり、中等室には先きに乗込み居る、二三名の客あるのみ、精一は眼薬の瓶を手に持ながら、隣に腰かけ居る客を見るに、其男も薬瓶の如きものを絹洋巾に包みて携さへ居れば、萬一此人も眼を患らふ人かと、同病相憐れむ心から尻目に見るに、至つて壯健の容子なれば　精「失敬ですが、貴客は大阪へお越ですか　客「ハイ、イヱ僕は神戸へ歸るのです、君はお眼が悪いです子　精「左様、俄然に寒氣を覺えましたから、冷逆上かして、此間中は困りましたが、モウ餘程快くなりました　客「何病でも、病癒に宜いといふのはありませんが、就中眼病は不可ものです　精「實は先刻から貴客も、薬瓶の様な品をれ持ですから、何處かれ悪いのかと存じました、此言葉に件の客は、莞爾と笑ひながら　客「是れですか、御鑑定の通り薬瓶ですが、僕は醫業ですから、京都で少し都合あつて購求した薬品です　精「左様でしたか、トキニ冬向きは京阪よりは、神戸の方が身躰には良いでせうねへ　客「左様です、山手などに居らうものなら、格別身躰の爲めには良いですね

へ、京都は兎も角大阪といふ土地は如何も餘り患者には良くない様です、飲用水にも關係するのでせうが、全体土地が宜いとは云へません　精「僕の友人が、實は豫て病氣でした處が、コリヤ京都の三本樹といふ處に居住して居ます、其人が貴客過日來、殆んど全快したといふても宜い位でして、大きに喜んで居られた處が、四五日前に突然に變症して、一時は危險でしたが、まづ昨今は少しく快いかと思ふのですが此人などは神戸の方へ出養生かたゝ、轉地療養をした方が、宜しくはないかと考へます　客「御病症は何ですか　精「肺炎ださうです　客「ハ、ア、そりや不可ねへ、宜しくない病ひですねへ。話しの中に精一は眼薬を眼にさし込み、絹洋巾にて眼の傍を拭ひ、薬瓶を其洋巾に包みて傍らに置き、尚は頻りに種々の雑話をする中、滊車は早くも梅田停車場に着ければ、精一は周章て合客に向ひ　精「失敬。と言葉を殘して手革匣と薬瓶を携さへ、蝙蝠傘を小脇に挾み、下車すると改札係に切符を渡し、上中等の待合所の前を通るとき、此所に居合したる山淵友純は目疾に精一を見付け　友「勝田君、今お歸りか。精一は突然に聲かけられ

て停止り　糟「オヽ、君、何處へ往くのです、今頃から　友「篠崎さんが格別危篤なと聞て實は爾三日前かられ訪ねに往く筈でしたが、今日の土曜を待兼て今ッから出掛けるのです、君も今度はお遂でしたらう　糟「實は今日まで三本樹の御宅に居たのですが、昨今は少し快い樣です、僕も餘り長逗留になるから、兎に角今日は歸つたですが、君が今から篠崎さんへれ越なら、憚りだが然いって下さい、何れ兩三日、遲くも四五日の中には是非お伺ひ申すですが、至急な御用でもわれば一音信電報で御手數をして下さる樣に友宜しい、君が御深切は我輩から傳へませう　糟「ヂヤ失敬します　友「御面倒でした、オヤ君、其持て居るのは藥瓶ぢやないか、君も御不快か　友「イエナニ、眞の流行眼で、左樣なら。糟一は友純に別れて、構内を二三歩東へ歩みかゝり、眼藥を包みたる洋巾にて眼を拭ひ、フト藥瓶を見ると、コヽ過まつて取違へしか吾目藥にあらざれば、尙ほも藥瓶を撿むると何か怪しの散藥なれば、偖は合客の醫師が所持せし藥と取換たるかと、又藥標を燈火に透し、熟さながら何か點首、其儘袂へ押匿すとき、傍から車夫が聲をかけ車

夫「旦那、御都合までまゐりませうか……。

（第十七枝）

女結髮のお增は、打絶えて芳五郎が來ぬを不審かり、今日も三五郎と膝突き合せて、愚痴の棚風しをゞ初めかけるお增「ねへ三さん、芳さんは彼れから斷然來ねへが、如何したんだらう子　三「乃公も不思議に思つたから、彼奴の友達に聞いて見た處が、此節は大分工面が宜と見えて、大層めかし込んで居るとの事だ、して見ると例の狂言は、甘く行つたに違へはあるめへが、夫れにすると乃公や和女に、逢ひ難いと云ふ譯はなし、翌日にでも何とか云つて來さうなもんだお增「左樣だとも、首尾よく行るやうに狂言を脚色だは、和郎と妾なり夫れに第一、肝腎の小道具に使ふアノ僞手紙だつて、妾が如何なに骨を折つたことか知れないヨ　三「勝田の御新造が有明の娘だと判るまでは、兄弟の樣にして、何事も乃公に相談をかけやアがつて、當家へも蒼蠅程來た癖に、彼れから後といふものは、融の道斷りをしたやうに顏を見せねへのには、コリヤおます、屹度と彼奴はお

たつに逢つてから、了簡が變はつたに違げへねへせお増「夫れでは芳さんも、餘まり勝手過ぎると云ふものだらうぢやないか、妾は其の後お菊さんの處へ職業に往つても、彼のとほり芳さんが、妹には決して此一件を、云つてくれるなと頼んだもんだから、態と芳さんのよの字も云ひ出さない樣にして居る位だのに　三「ナアニ、芳が其樣な氣で居るなら、何も乃公だつて然う義理ゑ立て、友達の情誼も思つちや居られねへから、殊に寄りや此尻をぶちまいて、一番彼女に困らせて遣るんだ、トキコお増、此長家の奥から二軒目の家へ、昨日から來て居る女があるだらう、アリヤ何かへ、該家のお源婆さんの娘かへお増「ナアニ、親類の娘だが、奉公先から暇が出たもんだから、彼家へ來て居ると云ふ事だが、和郎さ、また、女には目が早いねへ　三「ナアニ先刻和女が不在の間に、お師匠さんはまだお歸りにならねへかと、アノ娘が聞に來たからサお増「夫れは大方また、髮でも結つてくれと云ふのだらう、併し湯へ浴つて來てから、また油手になるのと眞平だ　三「お源婆さんは慾が深けへから、また彼の娘なば食物にするのかも知れねへせお増「如何せ

和郎アノ娘だつて出替期でない中途半端に、雇主から解雇になるくらゐだから、滅な者ちやあるまいョ　三「一寸面がヒケてるから、五十錢位なら流行だらうお増「お止ヨ、腎助染た事は、両人が噂する門口を、細目に開けて娘の聲　娘「れ師匠はんとモウお歸りでございましたか。お増は若蠅と思へど、流石は婦人を台手の商賣柄、口先ばかりは愛想よくお増「オヤ、小母さん處にお在のれ方ですか　娘「左樣でございます、れ源さん處へ來て居ります、玉といふ者でございます　三「サアマア此方へお這入なさい、先刻は折角お出なさつたがお増「眞に然うでしたとねへ、サア此方へれ上り、ナアニ和女さん、遠慮も何も要ますものか　娘「ヂヤ御免なすツて下さいまし　三「和女さん、开處へ腰をかけるも、此處へ上るも同じ事です、別に繰上の塩代を取やしません、アハ、、、、何かお増に御用が在んでせうから、マア此處までお出なせへまし　娘「イエモウ此處でお増「然して妾に何か御用ですか　娘「ハイ、眞に申兼ましたが却何か、此髮をば一ツ、お願ひ申したいのでございますが、モウ今日は何ですから、明朝お出かけにでも、一寸顧はれますまいか

お源さんが斯なに結てくれたのですが、是ぢや何處へも往けませんから、オホ、、、、
お増「イエなか〳〵、巧手に結ふてありますヨ、而して和女さんは此間さで、何家へ御奉
公に往つてお在なすッたのです　妻「ハイ、アノ船場の方へお増「夫れは宜い處ですねへ、
商人のお家ですか　妻「イ、エ、今橋二丁目の、勝田さんと仰もやるお内へ上つて居りま
した。斯くと聞くよりお増は、三五郎と顔を見合せ、之は此程の事を探るには何よりの
手掛りと喜び尚ほもお増と愛相よげにお増「オヤ左樣ですか道理で物の云ひぶりなんどが、
上品だと思つて居ました、而して今、れ玉さんとかお云ひなすッたねへ　妻「ハイ、實名
は玉と申しますが、拳公中は御主人さんのお宅の御都合で、妾はまつと申して居りまし
たお増「お松どんですか、何しろ少し妾も尊ねたい事があるのですから、マア此處までお
上りなさい、ナアニ此人に遠慮と有りませんヨ、今に何處かへ出て行くのですから。お
増は三五郎に目で報らすれば　三「ドレ、乃公は一寸今の間に、湯へ這入て來やう、マア
お玉さんお緩りとなさい。……

（第十八枝）

お増「サア、彼人は出て往つたから、此方へお上りお玉「ハイお増「开處ぢや戸外から見えて、
お話しが出來ないからお玉「夫れでは御免下さい。お玉は流石拳公した價値、言葉慇懃に
お増の傍近く座りてお玉「大層御清潔にしてございますねへお増「ナアニ、妾は出商賣です
から内の事なんぞと お持いッこなしです、而して今のお話しに、今橋の勝田さんに勤め
て居たとお云ひなすッたが、左樣ですかお玉「ハイ、貴女も彼れ家を御存じですかお増「イ
ヽエ、別に知つては居ませんが、何でも大層美しい、御新造さんがあると云ふ評判です
からお玉「眞個に美い御標致でございますお増「トキニ變な事を聞く樣ですが、妾は子、斯
んな家業だから、種々なお方に交際て居ますが、嫖致のよういい婦人に根性の悪いのが幾
人も有ますが勝田さんの御新造などは、其樣なことは無からねへお玉「隨分お人も善いれ
方でしたが、此節は何だか氣むつかしくおなんなすッて……お増「妾はマア餘計な事を聞
く樣だが、和女さんと何家かへ嫁付でもするので、突然にお暇をお貰ひなすッたのかへ

お玉「イヽエ、實はお暇をば出されたのでございます。と云ひつゝお玉は顔赤らめ、また思ひ出す口惜涙、ね増は茲ぞ容子の探り處と、態と深切らしく見せかけてお増「オヤマア泪含んで、如何なすッたのだへ、如何な事か知らないけれど、當今の時節だから何も和女、雇人だからッて雇主がそんなに威張ちらす譯もなし、全体マア何が不足で、斯んな中途半端に暇をば出したのだへお玉「斯んな事を申すと、妾が何ぞや御主人の事を、惡く云ふ樣でございますが、實は子貴女、モウ餘程此間の事でございました、旦那樣は梅澤さんといふ表具屋のお方と、京都の方へお越になつたれ不在中、四五日の間は何の事もございませんでした、處が三四日前に、御新造さんは妾をお居間へお呼び遊ばして、例にない御立腹の容子で、妾に今から暇を遣るから、宿へ歸れと仰しやるもんですから、妾も格外突然の事なり、何も粗忽をした記憶はなし、如何云ふものでお暇になるかと段々と其理由をお尋ね申しましたら、マア貴女有う事か、難題にも程のある、妾と旦那さまと……眞個にね話しするのも、阿呆らしい位な事を仰しやつて、ソレ今から歸れ、ヤ

レ歸れと、申譯も何もね聽なさらんのです、然ういふものでございますから、傍輩の人達が妾を宥めてくれまして、他の事なら如何なにでもとりなしをして進げやうが、何分にも御新造さんが、日來にお似合遊ばさず、旦那さんと如何だ斯だと疑ふてござると、假令置て頂いても此末が動にくいから、穏和しくお暇を貰つた方が宜らう、跡で妾等が和女の嫌疑を晴して進げると、皆なが深切に云ふてくれましたから、口惜ながら歸つたと云ふ譯でございます。お増は此話しを聞き、暫らくは何事をか考へ居たるが、膝を進めて低聲になりお増「ね玉さん、ソリヤ何だヨ、何か其の御新造の内證事を〻、和女だけが知つて居るのぢやないか、何ぞ旦那に聞せては惡い事でも。おたまも小首を傾ぶけて、思案はすれど思ひ當らずお玉「イヽヤ、別にお増「イヽヤ、屹度何んかそんなことがあるのだヨ、だから旦那の不在中に、其樣に俄然にひまを出したのだ、屹度左樣だヨ、能く考へて御覽、マア假令ば何處からか來た内證の弥を和女は何とも思はずに取次だとか、旦那の不在に其御新造が、何處かへ出掛けた事を和女一人が知つてるとか、何か有さうな

もんだねへ。れ玉はお増の言葉にフト思ひ出せしかお玉「眞に今となつて能く考へて見ますと、旦那さまが京都へお登りになつた其の晩に、斯々した事がございました。お玉は先夜車夫が旦那の書狀を持來り夫故お重が留主を托して出行きしが、如何いふ都合か京都へも至らず、其夜十一時頃に歸りし事などを委しく語れば、れ増は偖こそと點首お増「お玉さん、夫れで何にも角も判つたヨ、一寸お待ヨ。お増は押入れの棚より例の反古箱を下し、いつぞや狂言の材料に使ひし、手紙を取出し持來たりお増「此手を知つてお在だらう。れ玉と其手紙を視てお玉「コリヤ旦那さんの。と不審顏に繰返せばお増「お玉さん、和女の無念晴しは妾が仇響を討てあげやう、併しお源さんには何にもお云ひでないヨ、眞個にマア美しい顏をして其御新造も、悪い人だねへ。れ増は芳五郎が此節、自分等を○○ソデにする腹立まぎれ、其意趣返しを門違ひのお重に取つて掛らんとするものなり、お玉と委しき理由を知らざれば、呆氣に取れ唯お増の顏のみ眺め居るをお増「和女をば妾の妹にして一番勝田の御新造を、脅かし附けてやるのだから、和女も怖氣ちや不可から手

、多見之助でお演り、妾は右團治で行くから。此時三五郎は浴湯より歸り來り　三「乃公も琥珀郎で仲間へ這入うか二女「オホ、、、、、

（第十九枝）

京都の三本樹に居を搏へし篠崎高敬は、其後また病痾も旦夕に逼り、到底存命の覺束なきを知るものから、今日は枕邊に家族親戚の人人を招き集め、忿靜に何事をか遺言する中途と見ゆ、時々妻の峰子が鼻打かむ音と、頑是なき娘の靜江が叫るを、伯母のお谷が宥め賺せる聲のみ高く、其他は何れも愁然として袖に時雨を催ふせり　萬「今も云ふ通り假令ば急變の場合に接しても、必らず狼狽するな篠崎家の事に就ては今云ふ通りの事で、家名の相續は無論長男の敬勝にさせるぢやが、まだ漸やく年齢も十歳の事でわるから。と云ながら、實姉の方に目をつけ　萬「姉さん、お谷さんお谷「アイヨ……サア靜さちやん、一寸膝を下りて、阿母さん處へ往きなさい、膝に抱居たる姪娘を母親に手渡して、患者の傍近く進み寄りて早涙聲お谷「何だへ、妾と和殿とは跡にも先にも、唯二人の姉弟で、

今は妾は松室へ嫁付ては居るが、賴寄とするは如何しても眞身の中ぢや、サア何なりと云ふて置なさい、跡の言葉を嚥込みて、呟やく如くに聞こえしは窃かに念佛を唱へしものならん　高「姉さん、いままをすとほりまだ悴は幼年ですから、母親ばかりの敎育では不可とおもひますから、恐縮ですが新十郎（れ谷が夫の名）さんなり、芳雄（れ谷が悴）にも精々力となつて貰ちつて、萬事御後見を願つて下さい、妹のアノ靜江の方は五歳ですから、母が如何か斯うか成長をさせるでせうが、是れも何れ御厄介です、就ては從來貯蓄して居る僅かな金圓ですが、成可くば夫々筐代や何かに、予が眼前で配當をして遣つて置たら、後年に及んで、彼是と苦情がなくッて宜らうと思ひますお爲左樣ぢや、ソリやモウ、假令、滅多にそんな事もあるまいが、和殿が死後に及んで財産の分方で、一家の中に異論や、不平があつては宜しくもなし、第一にはまた、意外な事が失れから起るものぢや、併しながら生憎妾の方の新十郎殿が、東京の悴の方へ往つてござるので、昨日郵便は出して置たが、不在で誠に不都合ぢや　高「貴姉にさへ申し置けば、夫れで宜し

事です、みね、其革文庫を持つて來い　峰子「ハイ。妻は膝に凭れてスヤ〳〵眠る娘を傍らに寢かせ、用箪笥の中より一個の革文庫を取出し、此品を悴の敬勝に態と持せ、其身も俱に夫の傍近く座りて　峰子「阿父樣の前に置きな、而して能く仰しやる事をば承ッておき置ヨ。敬勝は流石十歳だけに感じも强く、父の顏を見て唯落涙するのみなれば、高敬も我子の心中を、思ひやりて泣を咎めず、徐に文庫の蓋取除けて、公債證書、其他の書類を種種取出し　高「不動産は新十郎さんが御歸りの上御相談をしますが、貯蓄の金圓は夫〳〵子供や、また親戚の人達へ今配分して置くとしませう、併しコレみね、大阪の勝田の方へ、電信を發たか　峰子「ハイ、報らせて遣りましたから、直ぐにお入來なさいませう　高「諸々、和女をはじめ悴や娘、また姉さんにも、まだ他の者にも程よく金子は分配して遣るが、金と云ふものは手許に置ては、ッヒ粗略に消費から、確實なる銀行へ預け置くが第一ぢや、幸ひ此程は深切に看病をしてくれた、アノ精一は舊藩からの知己でもあり、目下大阪ではなか〳〵人望家であつて、一昨日見舞に來てくれた、山淵なども彼男が事

は、頗る賞讃して居る位ぢや、アノ友純に譽られ、信じられる樣になれば、モウ人物は確實に違ひないから、其確實な精一に托して、一旦分配した金子をば、大阪の某銀行へ預けて、銘々其證書を持つて居さへすれば、大丈夫といふものぢや蜂子「左樣でござります、然うして置きましたら、ねへ姉さんお登「何角に高敬は注意家だから、宜い處へ氣が注きました。話しの折から下婢は徐かに襖を開けて手を仕へ下婢「大阪から勝田さんが御入來になりました。

〈第二十枝〉

勝田精一は篠崎の電報を見るより、直に京都へ至りしが、其不在の間に女房のお重は、彼のお菊の許に行きお重「お在宅ですかお菊「オヤ御新造さん、サア此方へ、而してマアお供もなしに何方へ。お菊は最と嬉し氣に取散せる品を片寄せ、座蒲團を敷設けてお菊「御覽遊ばせ毎度斯なに取散かしてあるんでございます、マア何卒マア此處へお重「イエ、モウ決して擽はないで下さいお菊「イ、エ貴女、生憎今日は下女が宿へまゐりましたからお

重「夫れと御不自由でお困りだらうねへ、イ、エ、お茶なんぞは打棄てお置ヨ、實は子お菊さん、旦那はまた今日突然に、京都へお越なすッたので、お不在中に妾は和女に、極内證の相談があつて來たのだから、れ一人の方が却つて妾は都合が宜いのですお菊「夫れではマア貴女、今日は御緩りなさいまし御用があらばお迎ひが參りませうお重「當家へ來ると云ふて置ましたから、何れ誰かが後刻に迎に來でせう、れ菊は此間に茶よ菓子と待過ながらお菊「而えてマア如何なお話しでございますか、何だか早く承はらんと、氣に掛る樣でお重「イ、エ他でもないが子お菊さん、コリヤ必ず旦那にも聞せられない事だが、和女だから打明て云ますが子、妾も今でこそ、斯した身になつて、居るものゝ東京では知つての通り、料理茶屋へ貰はれて居た位だから、旦那の前は兄弟も何にもないと云ふて有し、現にお菊さん、和女に迄も何日だつたか、妾は木から落た猿だと云つた事があつたが、今眞個の事を云ふと實は一人の兄さんが有るのだヨお菊「オヤ、然うでございましたか、夫れぢや貴女、お頼寄があつて宜いぢやございませんかお重「處がチお菊さん、

其兄さんが入しぶりで、實は此間一寸或處で妾と出會た處が、夫れから種々な事が起つてきて……开處と和女にも如彼して、兄さんがあるから覺えがあるだらうが、兄妹と云ふものは斷つて切れない中だから、ねへお菊さん、斯して妾が立派な身になつて居るからには、勝手にれ爲なさいと、如何も打棄て置く譯にも行かず、そんならと云ふて本宅へ、出入を爲せる事は尙は出來ない譯だし、妾が內證で其の兄にでも逢ひに行けば、人の口といふものは、又た如何な可怪なことを評判するかも知れず、如何したら宜からうと、モウ眞個に妾と、思案にあぐみ果てしまつたのです。おぢうは芳五郎を我が兄なりと僞はりて、餘處ながらおきくの智惠を借りに來たりしと、全く芳五郎をおきくの實兄と知らざればなり、れ菊もまたかゝるべきことのありと知らねば、わが身に思もひ比べてお重が心中を察しお蔦「そりやマア、世間の口には戸が建られぬと云ひますけれど、何んの貴女、密夫を引張込むのではなし、洗つて見れば根が然うした御兄妹の事なれば、其樣にまで御遠慮は無いぢやございませんかお事「サア开處が普通の兄さんだと宜いけれ

ど、實に放蕩漢で……まだ妾は和女の兄さんに、お目にかゝつた事は無いけれど、毎度聞いて居るには、隨分放蕩もしたお人だけれど、今では平素羽織を離さないで、眞面目になつてお在との事だし、和女にも苦勞をさせないとの事だから、其樣なにはなつてしまへば宜いけれど子、言語と云ひ第一、角帶といふてゞ〆た事なしで、袖口といへば廣袖のやうで、眞個にお座敷へ出せた姿ぢやないもの、此間も子、せめて兵兒帶でもゞて、シャツを着さへすれば、三尺帶よりか外見も宜いと妾が云ふと、フーンと鼻でわしらふて相手にならないから、爲方がないぢやないかへ、夫れもマア往來なら爲方がないとした處で、何だとか斯だとか云ふて、お金を貸せ〳〵と强求るには、眞個に困つて居るんだヨお蔦「妾も覺ゑのある事ですが厄介な兄を持つと實に困りますね〳〵お事、併し夫れも妹の身になつて見ると、ねへれ翁さんお蔦「眞個に左樣でございますヨ、兄でなしにまだしも弟だと、叱り附けてゝも遣りますけれどお事「マア何しろ斯う打明けて話しをしたのだから、お菊さん、御迷惑でも妾に宜い智惠を貸しておくんなさいな。

（第二十一枝）

此中は思ふ仔細ありて、態と訪問せざりしお菊の實兄の芳五郎は、今日日の暮るを待ちて浮世小路なる、勝田の妾宅の戸外に來て覗れば、誰やら客人のある容子に、暫らく榾端に佇立て耳傾ぶくれば、聲低ながらも女の音調の耳立やすく、如何やられ辰のお重が、妹に何やら話す樣子に、迂かり這入ては化の皮が露はるゝと、其儘門口の小蔭に身を潜めて、尚はも耳を欹て居たり、内には夫れとも知るよしなければお重「开處で妾が種々と考へて見るに、今となつて斯々した兄があると云ふ事は、如何も妾の口から旦那へ云ふ譯にも往かず、そんならばと云つて、默つて居て、萬一妾と兄が何處でか話しをして居る事をば、誰ぞが見て旦那に饒舌るか、また直接にお目にでも留つた後に、實は斯々だと云ふのも、餘まり隱し立をする樣で惡からうし、モシ此事が和女の身であらばお菊さん、和女はマア如何いふ事にお爲だへお菊「左樣ですねへ、妾の兄なんぞは、最初ッから旦那が、噂を人から聞いてれ在なすつたもんですから、大層お話しをするに都合が宜し

うございましたが夫れに此節はお庇蔭で、マア如何やら斯うやら眞面目な人間になつた樣で、妾も少し計り安心しましたが、彼れで都合の宜い女房でも持さへすれば、大丈夫と行かないまでも、第一規りが附といふものでございます、オホ、、、何だか自分勝手な事を申しまして お重「眞個に話しを聞いても、美しい樣ですヨ。お菊は何か暫らく考へ居りしがお菊「而して失禮な事をお聞き申す樣ですが、此間までは、何處にれ在なすつたのですお重「兄ですか、何處に居るッて、今も云ふ樣な放蕩者ですから、東京に居ると思へば大坂に居るので、何處と云ふ極りは無いのですが、此間までは東京にでも居たと見えますお菊「恰度妾の兄の樣ですねへ、併し如何で御兄妹の事ですから、何日が何日までも隱す譯にもまゐりますまいし、旦那も如彼いふ御氣質ですから、却つて隱し立して跡から知れたり、また他から知れた日には、何故然うなら然うと、打明けて話さないのだと御立腹をなさるでせうから、差出た事を申す樣ですが、寧そ妾が其事をば、旦那へ窃と申しては如何でせうお重「サア、然うして貰ふたら宜やうではあるが、そんなら一度私

が逢ふとでも仰しやると、如何も困るからお菊「何故、宜ぢやでございませんかお雪「夫れがサ、實乙子お菊さん、馬丁をして居た人で、別格人品が悪いからサお菊「オヤ、貴女のお兄さんも馬丁を、オヤマ左様でございますか、妾の兄も矢張左様でしたが、夫れぢやお目にかゝつたら、お顔馴染かも知れませんヨ、而して何と仰しやいますかお兄さんのお名は。れ菊が尋ねに、芳五郎と云はんとせしが、お重も心注き、今本名をお菊に語れば、モシ彼女が兄と馴染であつて、我實の兄といひし事の、偽りが現はれては一大事と、態と出放題に我舊の名を早速に附けてお雪「兄の名は辰と云ひますが、此話しは和女、限りにして、何卒和女の兄さんにも、云はないで置て下さいお菊「イヽエ、何の貴女、誰にも斯んな事は申しは致しませんが、何ですねへ、如何思つて見ましても、旦那のお耳へは入れて置方が宜いかと存じますお雪「眞個を云へば妾だつて兄妹の事だから、内へ出入りを爲せたいけれど、雇人の手前もあるから、假令旦那が承知をして下すつても、其様な譯には往かず、可成ことなら何處でも宜いから、餘り遠くない處で家を持せて小商ひの

一ッも爲せて置いて、而して妾の方から時々に、訪ねてあげる様にしたいものだけれどお菊「そりや貴女、旦那にお話しさへなすッたら、譯のない事です、旦那もまた貴女の御兄妹の事ですから、吃度夫れ位の事は、お爲せなさるに違ひはございません、而して早くお兄さんも、相應しいお妻さんをお貰ひなすッて、堅氣にさへお成なされば、夫れこそ貴女もお氣樂になりますから、兎に角旦那へは早く仰しやいましお雪「然うして見やうか知ら……お菊「貴女が何なら、妾からでも左様申しませうか。此話しの詳細は聞えねど時々兄々といふ事の耳立ければ、門口に立聽く芳五郎が、憤悶おもふ處へ東の方より、お重の迎ひと見え、下女が提灯を點えて來たる容子に、見附られては面倒と、其儘芳五郎は西の方へ行過ぎたり。

(第二十二枝)

髮結のお增は例になく、花主場を早く廻り終て家に歸り、合長家のれ源婆アを甘く說付け、預り娘のお玉を借出して自分の妹に仕立、日暮まへから今橋一丁目の勝田の宅へ出

向きたり、往く途路も小聲にてお増「此間も云ふ通り暇が出た曉には、モウ主人でも旦那でもあいから、氣が弱くッては不可ヨ、何でわらうと妾の妹の心算で、和女は唯御新造が内證の事をば、充分知つてる心算で居て呉ないと、妾が話しの强が利ないから子お玉」而して妾と旦那さんの事も、明りを立てれくんなさるでせうが、最初に妾は何と云ひませうお増「ソリヤ妾が甘く、其場の都合を見て話しかけるから、唯和女は悄然としてさへ居れば、お饒舌は妾がするから、オヤモウ其處だ子。兩女話しながら今橋の勝田の門口に來たれば、徐かに入口を開けて臺所の庭に通り、お玉を後に扣へさせて、お増は態と叮嚀に昇口に手をつかへお増「御免下さいまし、妾は長々御當家さまに勤めて居りました。此まつの姉でございます、御主人も誰殿も御機嫌はれ宜しうございますか誠に此女が御奉公中とあな方にも、種々れ世話に預りまして、此女も申し出しては喜んで居ります、一寸今日は妾が御主人さまにお目にかゝりまして、少しれ伺ひ申したい事がございまして、斯うして此娘を連れてまゐりましたが、如何か憚かりですが御新造さまに、其のよ

しをお願ひなすッてくださいまし。お増は臺所に居合したる、下女を相手に饒舌居るを、お重は聞き附けて居間を立出で、取合の暖簾口まで來て見ると、コハ思ひきや最に暇を出せしれ松と、一人は見慣ぬ女の來て居るにゞ、ハッと胸に波立て、其儘居間へ復りし處へ、一人の下女がお増の口上を取次ければお重「何の用か知らないけれど、和女が聞いて置てれくれ下女「ハイ。下女と立去ると間もなく又來りて下女「妾が聞かうと申しましたら、御新造さんに直接申し上たい事でございますから、是非れ目通りが願ひたいと申しますので、少しお氣分がお勝れ遊ばさんから、兎に角妾が承とりませうと申しますと、そんならば何事に限らず、お話をしても差支へはないか、跡で御新造さんが、其樣な事を人に聞かせてはと、仰しやつては不可から、モ一度念を押てお聞き申してくれと申しますが、如何致しませう。お重も何となく底氣味惡く、成程アノれ松は、人に聞せてならぬ事を知て居る筈、コリヤ却つて直接に逢ふが宜からう、然りとて逢ふも憂し、逢はぬもまた氣がゝりなれば、心に何やら覺悟してお重「夫れでは妾が逢ふから、此處へ兩

人とも通しておくれ下女「ハイ、下女は聽て兩人を主人の居間に案内しければお重「サアず つと此方へ、お槇(下女の名)れ茶をおわげヨお増「イエモウどうぞ……御新造さまでございますか、れ初にお目に掛ります、妾は此まつが姉で、増と申す者でございます、時分から追々とお寒くなりましてお重「ハイ、和女にもお障りがなうてお玉「御新造さま其後はお重「ハイ、此間は誠に氣の毒な事で、而て今日は、何の用があつてお出だへお増「イエ、其事は御新造さん、妾からお話しを致しまする、オヤお茶でございますか、恐れ入ます何卒お搏ひ遊ばさんで。れ重は如何なる話しか判らねど、他聞を厭へば下女に向ひお重「れ槇、モウ和女は臺所へ往つてお出、用があれば呼ぶから下女「ハイ。お槇が立去りし跡を見て、お増は少し膝を進めお下「御免遊ばせ、實は今日斯うして此女を伴れて參りしたのは、斯樣でございます、此間お暇を頂きまして、島の内の親類へ此女が歸りましてから、實は中途半端にれ暇の出るといふのと、何か和女が粗忽をしたに違ひないと、段々と尋問ましても、唯泣てばかり居りまして、何が何とも判りません、處がお聞き遊ばせ、

モウ妙齢も過ぎた位でございますから、何年まで拳公を爲せるも何だから、相應な處があらば緣付をさせやうと、段々相談を致しました處が、幸ひ貴女、少し回緣の方から、嫁に呉れとの話しがございましたので、ヤレマア安心だと妾も喜んで居りました、處が御當家から中途にお暇を出された事を、先方が何處でやら聞きまして、如何いふ都合で今頃に、拳公先から暇を出されたか、其理由を聞かせてくれ、萬一にも勤め中に、可怪い事でもありはせぬかと、媒人が穿鑿を致しますので、今日は妾が改めて、れ暇になつた譯を、承はりに參りました。

《第二十三枝》

其時お重は如何返答して宜からんかと、躊躇するをお増は重ねてお増「實は子御新造さん、此女が妾へ今來る途路で云つた事もございますが、大方宜い加減な事だらうと存じますから、貴女にさへ伺へば、夫れ程確實な事はございませんから斯う云ふ理由だと仰しやつて下さいまし、お重はます〳〵當惑せしが、お松が姉に

云ひしとあらば、最早是れまでと思ひお重「イヱ別に其様なに云ふ程の事でもないが、其お松が胸には、大方記臆があるに違ひないことだからお増「コレお玉御新造さんは彼の通り、和女に記臆があると仰しやるから、其記臆のある事を此處で云つておしまひ、然うすれば御新造さんの前なり、和女が嘘を吐くか、また眞實でお暇が出たのか、直ぐに判るから、斯んなに云ふのも今嫁入をする一段になつて、和女の身体に故障があつては、ねへ御新造さん、女と云ふものは別して最初の縁談は格別大切なもんでございますから、貴ふ方が念を入れるも、また親類が心配するのも、無理の無い事でございますお重「眞個に左様だヨお増「サア何時までも然う默つて居ては、當家も御迷惑だから、記臆のあるとは此處で云ふてれしまひ。お増は窃とお玉の袂を曳きて、合圖するを心得て膝を進めお玉「妾の胸に記臆のある事と申したら、御新造さんの前では如何もお重「ソレ、夫れ御覽、彼通りだヨ、妾の前で云へない様な事をして居るのだものお増「マア貴女、其御立腹は御正理ですが……コレお玉、何でも拵はんから云つておしまひ、遠慮するのも時に寄るか

らサお玉「夫では申しますが、妾は此間御新造さんが、旦那さんの御不在の間に。と云かくれども、まだ偽手紙の事とは心注すお重「旦那が れ不在に妾が和女の暇を出したが悪いのかへお玉「イヽエ、其お不在に車夫が、偽筆の手紙を持て來て、何家かへ貴女はお出ましになつて、其夜遅くお歸りになつた事をば、妾一人が知て居からでせう、今度お暇の出た原因は。お重はハッと思ふと、忽ち顔は眞赤になり、如何して偽物の事を知つたかと、思ふ間にお玉のお松は言葉を續けてお玉「夫れをば御新造さんは、妾が旦那にでも饒舌かと思召て、いろ〳〵な濡衣をさせてお暇をお出しなすッたのです、其嫌疑と云ふのは姉さん、途路妾が話した通りの事だから、其事は嘘か眞實か、和女から御新造さんにお聞申しておくんなさい。お増は默つて點首、ズッと膝を押進めお増「御新造さん、斯うして妹が貴女の前で、立派にいふ位なりまた貴女も然うして、眞赤な顔をなさる處を見ると、此女が云ふのは萬更嘘ぢやございますまい、して見ると貴女が何か内證事を、旦那に知らせない爲め難題を附けて、イヽエサ、拳公まて居ても他人の娘です、其嫁入

前の娘を、疵者にしてお歸しなすッたのを、何程お給金を頂いてる下女でも、默っちや居られませんが、此談判も女の妾でれ解りがなけりやア、妾の亭主は三五郎と云ふ者で少しは口も利男ですから、亭主を何ならよこしませうか。お重は我身に暗き事あれば、充分足元を見らるゝ心地、唯冷汗を發き吐息つくのみなりしが、漸々に心を沈めてお重「何も和女さんで話しが判らん事はないが、別に其女に難題を云ひかけたのでは、決してないのだからお壇「夫れでは當家の旦那と妹に、何か怪しい事があつたのですかお重「サー夫れも別に證據といふては無いけれどお壇「證據がなくッて其樣な事を仰しやるのは、矢張僞手紙の一件でお壇「アヽコレ、其樣な事をお壇「サア、夫れを云つて惡いのなら云ひますまいが、其換り此女が嫁入の、出來る樣にしてお貰ひ申しませうお重「嫁入の出來る樣にとはお壇「御新造さん、貴女も旦那の目を偷んで、イヽエサ、れ快樂の一ッもなさる方にもお似合なさらない妾に餘計な口を利すまでもございますまい、マア假令ばサ、此女が旦那に弄ばれたとなさい、然うすれば云ふまでもない、離緣金と來るは當惑でさア、

夫れも粹だと云ふ評判の貴女だから、別に妾の心算で此れ玉も、浮世小路邊で小意氣な家でも持せて下さるか、又其樣な事は無いが僞分の一件で、イヽエマアお聞なさいました、謂ば謝罪料に百と二百の金をお出しなさるのは、イエお貰い申すのは當然でせう、其一件で難題をお附けなすッたのなら、コリヤ云ふまでもない、他人の娘を疵ものにし夫れをお貰ひ申したからッて、無益消費にするのぢやアなし、御主人かられ暇になつたが、今度嫁入するに就て、御新造さんからお召古じの、一枚もお貰ひ申したと云ふ觸込みで、其金で荷物の一荷も增て遣るんですから、如何か何分れ願ひ申します。れ重は未だ返事の考へも出ざる處へ、下女のお槇が一葉のはがきを持來たり下女「御新造さん、京都から此はがきが……。

（第二十四枝）

お重は下女の持來りし端書を視れば、夫柳一が京都より投じたるものなれば、其文言を銘に讀むに、今夜歸宅する由を認めわれば、茲に忽ちに狼狽し、今にも歸りて此容子を

見附られては夫れこそ大變なりと胸に怖るゝ顏色を、早くもお增は見て取りてお増「御新造さん、唯今も申します通り、妾の亭主は斯んな事を聞くと、默っては居ない性分ですから、何とか御返事をばなすッて下さいまし、妾共なんぞは身分の卑しいもんですから何方へ轉んだ處で搏ふ事はございませんが、當節の事ですからねへ、御新造さん、直ぐに誰かゝ聞出して、今橋二丁目の勝田精一さんの御新造が、斯々した事があってなんかと新聞にでも出されて御覽じませ、お交際の廣い旦那の、御名譽に關はるぢやございませんか、また此娘だっても其通りです、有もしない事をば彼是云はれた日にや、何程下女奉公をする身分でも、固い者には角が附くと云って、默うちや居られません、だから清潔に嫁入の支度料として、二百圓ばかり頂いて歸れば、此娘は素より妾も、妾の亭主も親類の者も喜んで、貴女の例の一件なんざァ、モウ曖氣にも出さねへ事に致ます から。お重は身から出た錆、今となって辯解もなければ、豫て貯へある金を百圓取出し惜氣を隱してれ松の前に置きお重「コレお松、何も妾が身に暗い事があるから、此お金を

ば和女に進げるのではないが、和女も今度は緣附をするとの事だから、長々勤めて居た和女へ、此金を嫁入の祝ひに進げるのだヨ、だから彼此云はずに持ってお歸り。れ玉のお松は瓜眼でお增の顏を見ながら、默って百圓の紙幣に手を掛けんとするをお增「マァ和女れ待ヨ、御新造さん、委細は判りました、流石大家の御新造さんだけで、仰しやる事は行屆いて居りますが、其お金は何圓あるのです、お願ひまをした二百圓にしちやァ、チト高が低い樣ですが、紙幣が混交てるのですかお重「今云ふ通り此れ金も、畢竟妾が志で進げるのだから、チト祝ひにしては過ぎるけれど、妾は和女の顏を立て、何にも云はずに此百圓を進げるのだから、不足かは知らないけれど、妾も女の事だし、其樣に餘計にれ金を持ては居ないからお增「成程、お察し申して見れば、其お金も例の口へ、イエナニ、モウ云はないと云ふお約束ですから、マァ今日の處と百圓だけ、お貰ひ申して歸りませう、お玉、其お金を此方へおよこし、妾が持って往ってあげるヨ。お增は百圓の金を帶の間へ收ひ込みお增「ヂャ御新造さん、大きにお喧しうございましたお玉「左樣なら。

お重は默つて俯首居たり、兩女と臺所に來り、居合す下女には挨拶さへなさで、其儘に戸外に出て二三歩行きお増「如何だへ、お玉さん甘く行たぢや無かお玉」妾は何だかお氣の毒の樣な氣がしてお増「ナアニ、詰らない、其樣な氣の弱い事で如何なる者か、妾達が此金を取なくッても、如何で姦夫に取れるのだ、モウ九時だらう何家かで一口お祝をして歸らうお玉」妾はれ酒はお増「オヤ飲ないノ、不可ねへ、併し今夜は妾に附合ておくれヨ、トキニ勝田の旦那と云ふ人は、格別鼻の下は長いと見えるねへ、此時お玉はれ増の袂を曳て小聲になりお玉「向ふから旦那がお増「オヤ……。兩人は見附けられては面倒と、暗き樹蔭を傳ひて行き過ぎしを、精一は今勝田といひし言葉の耳に入りければ、兩人が後姿をキット見て　精「ハテナア……」同じ夜の事なるが、三五郎はれ増の歸り遲きを待兼ね、壘屋町の家を出て南地邊を素見歩かんと、宗右衛門町の方へ行く向へ、羽織を被たる男の行く後姿は、如何やら芳五郎の格好なれば　三「オイ、芳ぢやねへか、开處へ行くのは、芳ぢやねへか。呼止められて件の男は　芳「誰だへ汝を呼のは、オヤ三五郎か　三「三五郎

もねへもんだ、カウ芳、汝も餘り判らねへぢやねへか、併し兎に角お増の宅まで一遍來てくんねへ　芳「汝に然う云はれて見ると乃公も餘り薄情のやうだが、是れにやア種々な話しがあるのだ　三「マア辯解は止して、相變らず常羽織でも着込んで居る容子ぢやア、工面の宜い事は知れてるヨ、サア、今ッから來てくんねへ。芳五郎は嫌とも云はれず、三五郎に伴立てれ増の家にぞ至りける。

（第二十五枝）

お増は今橋から歸りにれ玉と倶に、何家で飲で來たか眼元を赤らめ、手に折箱を提げて歸へり來たりしが、路次へ這入ると小聲になりお増「お玉さん、お源さんの前は今云つた樣にして置ないと不可ヨ、而して此折箱をば土産に持つてお歸りお玉「ハア、而してアノお金はお増「アリヤ妾が預つて置ないと、和女が持て居てもお源さんに知れもするし、見附ると奪れてしまふから。れ増は携へし折箱をれ玉に渡し、我家の入口まで來ると、内にも三五郎と誰やらの話し聲お増「オヤ、誰ぞが來て居ると見えるが、お玉さん、マア這

入つて一ぷくしてれ歸りお玉「難有う、モウ直ぐに歸へりますお増「ヂヤお源さん處へ送つて進げやう、併し妾は一寸煙草を一ぷく。お増は我家の庭から手を延し、竈所の火鉢の火で煙草を喫居るを、三五郎は取合の障子を開け　三「お増か、恰ど宜い處ろへ歸つた、芳さんが來て居るのだお増「オヤ左樣　芳「お増さん、誠に濟ねへ譯でお増「濟ねへもないものだヨ、マア兎に角も妾は此煙を一寸……。お増はれ玉を伴れて合長家へ往きし跡を見て　芳「三さん彼娘は　三「彼れだヨ、今云つた口は　芳「左樣か、トキニ今も云ふ通り、乃公が來なかつた譯は別に何も、和郎やお増さんを邪魔者にした譯でも何でもねへ、アノ娘が勝田に居たのなら、夫れとなしに聞てくれても解る事だ、彼の晩はお増さんが狂言の脚色で、甘くお辰を釣出したが子、彼女もなか〳〵普通の婦人ぢやねへから、然うばた〳〵として、旦的に知れるやうな事をしないから、乃公も少しは思惑が違つたのサ、斯して羽織でも被て居ると、何だか工面でもよく見えるが、コリヤ和郎、今夜は妹の處へ往くので　三「斯々、其樣な辯解は今聞ても爲方がねへがお増が歸つて來たらマア緩り

と話しをしやう。両人は話しの處へお増も歸り來たり次の間へ三五郎を呼出してお増「今日一件へ往つた事は芳の字に云ひはしないだらうねへ　三「知た事唯勝田に居た下女が、此長家へ來て居るとだけは云つたのサ、勝田へ両女で往た事なんぞは、彼男には聞せられねへせお増「何しろ妾も芳さんに小言を云はないぢや虫が癒ないヨ。両人は此方の席に就けば、芳五郎も心中に思ふやう、此奴等却々狡猾だから、何でも金儲けの事を一ッわてがはねば、お辰の爲めまた我身の爲めにも仇するならんと、頻りに考へ居たるがフト心注きし事ありしにや、未だお増が小言を云はざる間に先立て　芳「お増さんの顔を見ちやア、實に濟ねへ譯だが、三さんにやア今も云つたが、アノ僞手紙で呼出して、唯の一度れ辰にも逢た限りサ、尤も其時は彼女も不意の事だから、懐中に金と云つては、眞の待合茶屋の拂ひをする位よりか持ちや居ねへし、其後は機會を見て、音信をすると云つた限りで實は何の返事もねへが、コリヤモウ大丈夫、如彼して内も知れてあるし、まさか違へば乃公が該家へ乗込んで、談判をやらかすのだが、夫れよりか子三公、斯いふ耳

寄な話しがあつて、今日まで乃公ア玉を搜し歩いて居るのだ　三「玉とは　芳「他ぢやねへが乃公の友達の銀次が、横濱から神戸へ來て或商館のコックになつてるのサ處が其館の西洋人が、廿一二でヅブ素人といふ妾を搜してるので、銀次も神戸をば大分搜したが、洋妾にならふといふ女は幾人もあるが、二十一二で素人といふのは有やうで無へもんだから、大阪にあるなら、乃公に周旋をしてくれと頼れて、實は其一件で乃公ア神戸の方へ往つて居たもんだから、和郎の方へも顔を出さねへと云ふ譯だ　三「而して玉は見附つたのか　芳「處が二人まで目見得をさせたが、氣に適ねへのサお增「何だか知らないが其西洋人は嫖致好と見えるねへ　芳「ナアニ然ういふ譯でもねへのサ、先方の注文は丸ポチヤなのだが、ホンニ今一寸見た娘の樣な容貌ならお誂へだが、此間からのは瓜實と云つて、面長ばかしだからペケを食ふのサ。れ增は流石に女の淺智惠忽ち目前に慾心の浮み出て、今まで腹の立し芳五郎が不沙汰は何處へか消失せお增「何かへ芳さん、其洋妾を周旋をすると、幾許か金になるだらうねへ　芳「なるとも、當人さへ承知するなら最初の支度料が

まづ五十か百もくれるだらう、而して月々の給金は、十五と二十とした處で、开處は當人の腕で、身の服裝だの指輪なんざア、日本人の旦那を取るよりか何程宜いか知れやしない、而していま云ふ支度料は、周旋人が七分に當人が三分サ、其換り月給は當人の方へ全收だから、百圓なれば七十の金ゑ濡手で粟サお增「芳さん、一寸耳をかし。お增は酒の香高き口を芳五郎の耳に寄せ、何か頻りに叫きたり。

《第二十六枝》

慾に傾ふき易きは凡の人情、とは云へ彼の髮結のお增は、お玉をたまに百圓の金を得たるに味付き、ます〳〵慾心增長し、寧そ此上はお玉に勸めて、町藝妓でも爲せんか、イヤ三味線が覺束なければ、月園ゐの旦那でも、イヤ夫れよりは娼妓を爲せるが埒明き、なづれ源藻アは斯う說付て、彼娘には斯う勸めてと、種々の惡計を巡らして歸り見ると、日頃不沙汰を怨みし芳五郎が來合せ居り、洋妾の相談を聞しより之幸ひ、娼妓にして警察の手數、身躰檢査の面倒、證文の故障等で、日數を費すよりは簡便の話しと、其翌日

お源には僅少な金で承諾させ、兎に角妾にお委せと、夕方からまたお玉を伴出し、最寄の小料理屋に行きて夕飯などを薦め、盞で口濕らせての密々話を「今云ふ通り、肝腎和女が便りにして居る、お源さんが慾一方だから、昨夜も來て云ふには、南地から娼妓にして出すとの相談だもの、妾も呆れてしまつたが、餘り和女の身が可憐さうだから、内の三さんに話して見ると、如何でれ源さんが然う云ひ出したら、遣兼はしないから、娼妓になつて多くの男に肌身を汚すよりか、旦那でも取ぜて遣たら、月々幾許かの金にもなるし、其旦那一人に身を委せたら宜のだからと云つて、段々と心配をした處が、漸く宜話しを聞出したもんだから、れ源さんにも得心をさせ、斯うして和女を伴出して、先方の周旋人の處へ連れて往つてあげるのだが、能く考へて御覽、娼妓になると成程三年とか年を限つて、今此處で幾許かの、れ金は纏つて這入るだらうけれど、夫れかと云つて和女が其金を取のではなし、三年といへば僅な樣だけれど、其月日の中にも如何で幾度か驕徵院へ入院するだらう、然うすると其日數だけ年期が延びる、其上に身体は大

なしになつてしまふは當然だし、假令ば全盛になつた處で、借金が出來る事は請合、運よく其借金も前借の金も立て、落籍と云ふ客があつた處で、其樣な人に限て好ない客でソリヤモウ愛川竹とか、苦海とか云程わつて、辛い事は今妾か云位の事ぢやないヨお玉「それはお增さん、妾も能く判つて居ますけれど、昨日お預け申たお金をば、お源さんに遣さへしたら、勤幸公だの、妾拳公をしろとも云ひますまいからお增「アレサ、まだ其樣な事をお云ひだ、其事と先刻に妾が云ふた通り、昨夜和女と連立て歸つた時、妾の内へ來て居た男をば、和女も見たらう子お玉「一寸おかほは見ましたがお增「彼れがサ、何日か話した勝田の御新造の情夫で、芳五郎と云ふ惡漢だヨお玉「エッお增「サアマアお聞よ、舊は東京の鎭臺で馬丁をして居て、稻妻といふ綽號を得つて居る位で、三さんとは友達ぢやアあるが、如何して惡い事にかけても、三さんなんざア彼人の足許へも寄付ない位だ、其芳さんが何處で聞出したか和女と妾が今橋へ往た事を知つて、兩人が歸るのを内へ來て待て居たのだヨお玉「オヤマア左樣でしたか、惡い事は出來ませんねへお增「然ういふも

んだから、妾が歸つて見ると愚圖附き出して、サア何んで乃公の情女の處へ往つて、脅迫しやアがつたと、遂々和女、アノ百圓の金を取上げて歸つてしまつたから、怡で犬骨折て鷹の餌食といふ譬の通り、三さんも妾も呆氣にとられて、茫然して居る處ろへお源さんが來て、モウお玉は寐て居ますが、彼の娘の身をば斯うする心算だと、話しなすツたのが身寶の一件だから、妾は素より三さんも、餘まり和女が氣の毒だと云つて、今朝ツからわざ〳〵神戸まで行くやら、れ源さんには妾か種々と話しをして、夫れも子、和女の前だが、彼通り慾張だから、素手で話をしたつて到底無益だから、妾が花主先で嘘の八百も云ひ並べて、五十圓といふお金を借てサ、其金をばお源さんに渡したもんだから彼通り素直に、何分お玉の事は、宜しうお賴み申し升なんて、穩順しく和女の事を妾に委任たのだヨ、だから今ッから兎に角神戸まで往つて、イヽエ、斯んな事は早い方が宜とも、善は急げだから……。といふ時間ゆる七時の時計にお増「オヤモウ時間だヨ、ちよいと姉さん、勘定書を。お増は此家の勘定を濟せ、合乘車を雇ふて梅田の停車場に

行きしに、折よく下り滊車の切符を賣出し居れば、早速三の宮までの下等切符を二枚買求め、一枚をお玉に渡せばお玉「行くは往きますが、全体先方の旦那といふのは、商人さんですかへ。お増は流石に洋妾とも云ひかね、返答に躊躇その折しも、彼方の待合所より一個の洋人が歩み來るを視てお増「お玉さん、一寸。と指示して「和女の旦那も如斯人だヨ……。

（第二十七枝）

勝田の妾お菊は、今夜慮らずも通りかゝりし、堂島川の田簗橋にて、身投げする婦人を助けて我家に連歸り、最と深切に勞たりてお菊「眞個に危ない事ねへ、アノ車夫がモウ一歩遲いもんなら、川へ陷つてしまふ處でした　玄「ハイ、誠に御深切に、種々な御迷惑をばかけまして、實に妾も如彼して覺悟を極ましたのは、能能の事でございますが、まだ死ぬる事節に至りませんのか、斯して貴女に助けては頂きましたが、夫れは〳〵云ふに云はれぬ、妾の身は不幸で……お酉「如何で深い理由の有る事でせうが、彼處では妾の乘

て居た車夫も聞いて居るし、また往來の人でもあつては、要ない恥辱を觸廻ふやうでは不可と思つて、兎に角妾が乘て居た腕車に乘せて、此家へ伴立て歸つた位だから、死ぬ程の理由をば話してお聞せ、失禮だけれど斯う見た處が、其樣に賤しい生活とも見ゆず、年齢もまだ二十歳そこ〳〵だらうし、モシ色戀で死ぬのなら、夫れこそ世間の笑ひ者になつて、和女の両親が跡で、如何なにお嘆きなさるかも知らないヨ、斯うしてお話しをするのも、何ぞの因緣だらうから、事と品によれは及ばずながら、また如何ともお世話をして進げるが、一体マアお住宅は何所で、何といふお名前だへ。お菊が眞情ある尋ねに隱しもならず、今身の上を語らんとする女は、之れ別人ならで彼のお玉なり、然れども お菊と其顏は知らず、お玉はまた酒の主人には、お菊と稱ふ妾のある事は知りながら、其人の顏を知るによしなく、殊に夜分此家へ連來られしゆゑ、夫等の事には心も注ず、唯心中には世にも稀なる、深切者と思ふのみなりお玉、妾が名前は玉と申しますが、實は當今は親類の厄介になつて居る身分でございます、而して其親類は、島の内の蠣屋町で

御座り升が、小母〳〵と申して居りますお源といふ人は、根が他人でございますが、妾の両親が先年亡なりましてから、何でも妾の事をば引受て、表面は深切に世話をして呉升が、其實は大の慾張で、今日も、子貴女、御近所で女結髮をして居る、れ增さんといふ人と言合せて、妾の樣な不標致な者をば、神戸の人の妾になれと云ひますから、夫れも今云ふ小母の事ですから、嫌だと云へば娼妓になれと云ふ事は判つて居りますので、悲しくは思ひましたが、お增さんと云ふのに伴られて梅田の停車場まで往きまして、其旦那は何をするお方だと聞ますと子貴女、マア呆れるぢやございませんか、其旦那は西洋人で、妾を欺して洋妾にする心算なんです、妾は夫れを聞て餘り口惜いからアノ停車場で、今切符を切て撿めるといふ混雜に紛れて、一生懸命に停車場をば、逃げた事は逃げ出しましたが、モウ島の内へは歸られず、そんならばと申して、別に賴寄る内とては無し、然ういふもんですから妾は一錢の れ錢も持つて居ず、如何したら宜からうと思ふとフト死ぬ氣になりまして……お菊左樣かへ、然して其お增さんといふ髮結さんと、蠣屋

町の笹田裏ではないかへお玉「オヤ、貴女は御存じでございますか、アノお増さんを。お玉は不審氣に顔を眺め、モシ知己なら悪い事を云たと、氣の毒がるをお菊と察してお蔦「其お増さんなら、妾も知つては居る人だけれど、隨分悪い評判も聞いて居るし、併し子、何分職業が彼通り巧手だから、彼女の手に惚て花主が多いのだヨ、而して何かへ、和女は両親に別れてから、其小母さんとかの家に、ズッと今日まで居なすッたのかへお玉「イヽエ貴女、二三年以前から此船場の、或お内へ御奉公をして居りましたが、ッヒ先達てお暇が出まして、據ろなく其親類に居りましたのですが、其お源といふ人はなか〳〵、其ない人の處へ持て來て、今云ふ近所にはお増さんと云ふて、怖ろしい人が居りますから、既での事に妾は、酷い目に遭ふ處でございました、而して種々な事をお尋ね申しますが、此浮世小路に、勝田さんと仰しやるれ方の妾宅で、お菊さんと仰しやるのが、御近所にはございませんですか。思ひがけなき此尋ねにお蔦「オヤ、其さくと云ふのゝ妾だけれど……成程、妾の事はお増さんから聞て、夫れで和女は知つて居るだらうねへ。お

玉も偖は噂に聞たれ菊と云ふのは此人なるか、我身に難題を云ひかけて、無理暇出した る御新造さんに引かへ、斯んなに優しい人があらうと、思ふ程、忘れて居たお重の事が怨めしくなり、妾は本宅に勤めて居ました、下女のお松と云ふ者ですと、語らんとする折から、門の戸をトントン〳〵。

（第二十八枝）

お蔦「オヤ旦那さん、大層今晩はれ遲い樣ですが、何處ぞからお歸りがけですか　糟「今日は洗心館へ招かれて往つて居たが、午後三時からと云ふ招狀の觸込は宜いが、例の大阪時間で、漸つと客が揃つたのは、モウ日暮だものお蔦「左樣でございましたか、サー、衣服をお着換遊ばせ。お菊は精一の衣服を着換させなどして、次の間へ持運べば、居合したるお玉は流石奉公せし身とて、默つて見て居ず、妾がと云ひながら手ばしこく襲かくるを、イヱ宜しい、妾がなど云へるを聞き　糟「れ菊、誰が來て居るのだお蔦「ハイ、此人は　糟「誰だへ、聞た樣な聲だが。斯く云ひながら襖の彼方を視れば、洋燈の灯影にチラ

と見えしお玉の顔　精「オー、和女は本宅に居た、松ぢやないか、辟かけられたお玉のお松は、次の間から叮嚀に兩手を仕へお玉「旦那様、御機嫌はお宜しうござりますか　精「和女も壯健で宜が、如何した、エー、先日私が不在中に、俄然に暇を取つて歸つたと云ふ事だつたが、緣付をしたのぢやないか、サア、マア此室へお出、知らん顔ぢやないから、併し此處の内へは何しに來たのだ、お菊、和女は此お松をば、以前から知つて居るのかお菊「イ、エ、實は斯樣でございます、妾は子、今日アノ岩本さんの處へ、貴卿の仰しやつたお話しで、日暮から參りました處が生憎岩本さんはお不在で、奥樣お一人でしたから、サアマア上れてッて、先緣にお話しをなさるもんですから、恰ど貴卿十時頃までお話しをして居て、夫れから腕車で急いで歸ります途中、アノ田鏇橋の南詰の所で子、貴卿、既でに此人が身を投げやうとする處でした。精「一も意外の話しに驚き、また更にお玉の顔を眺め　精「左樣か、ヤレ〳〵危ない事だつた、全体亦何で其樣な馬鹿な事をしかけたのだ、れ松、マア此室へ來て理由を話すが宜い、貴重な生命を馬鹿々々しいお菊「イ

エ、其理由は先程から、妾が概略を聞きましたが、此女が常から小母〳〵と云ふて居る人が、格別良くない人ですから子、此女をば可憐さうに、娼妓にするか、洋妾に遣るんでございますとサ　精「ハ、ア成程、其樣な思惑があつたものだから、中途半端に私の方も無理暇を取つたのだな、私はまた其樣な事とは知らんから、内でれ重と然ういつて居るのだ、アノお松も、マア良緣があつて結構だ、此緣と云ふものは機會を外すと、またトント無ものだと噂をして居たが、其樣な悪策があるから、欺して和女を引上げたのか、ヤレ〳〵氣の毒な、夫で如何したお菊「夫れで貴卿、今日も子、斯云ふ理由でございますヨ。れ菊は先程お玉より、聞きたる事を委しく物語れば、精「も お源、れ増等が不正の所爲を甚く憎み、またお菊が慈情深き心を、ます〳〵感じながら　精「夫れでは到底、其お源と云ふ人の家へ歸る譯には行くまいから、斯うするが宜い、和女は今日から此妾家に居ても宜いやうなものだが、和女はお重が如彼して使つて居たものだから、其樣な事を思ふやうなお重では無いけれども、無理に暇を取つて而して和女が、此お菊の處へで

き、奉公に來たかと、萬一思ふまいものでない、私もまた和女が此家に居る事を、本宅で隱すと云ふ譯にもいかんから、斯するが宜い、何かなしにまた本宅の方へ來て、今まで通りに奉公をして居れば、私の方から人を仲裁に入れて、お源の方と談判して遣うし、而してまた何家ぞ相應の緣があつたら、嫁入を爲せて遣るから、お重も如彼いふ氣質だから、決して否といふ氣遣ひもなし、ナアお菊、是れが一番上策だらう、而して何だヨ、和女もノ、何程職業が巧手でも、其樣な良くない了簡のお增は謝斷でしまつて、他の者に髮を結せるが宜い。精一は委細の事を知らざれば、斯く云ひ出せしを、次の間に居りしお玉はお重の事を口惜がり、心の中にて、獨り事彼んな浮氣な、彼んな惡ひ心の御新造と、斯んな實意のある優しいお菊さんと、同等に思つてござる旦那の了簡、エ、まゝよ、此身を助けられた恩報じに、アノ御新造のアラを、何も角も云つて遣ふと、胸に思案の臍を固め、此方の一室へ徐に來たりお玉「旦那さん、まだ貴卿と眞個に、何も御承知ではございませんか。

（第二十九枝）

仔細あり げあれ玉の言葉に、精一は何か思ひ當ることあるにや、飲かけし煙草の手を止め 精「お松、和女の話しも聞かうが、一寸私が尋ねるのは昨夜の事だつたが、私が湯車から上つて歸りに、自宅の四五軒手まへでチラと見た姿は、和女とモ一人も婦人だつたが、彼時は何處へ往たのだ、夫れから私は自宅へ這入て今斯々だがお松は萬一、內へ來たのぢやないかとお重に聞たが、左樣な事は無いと云ふから其儘で居たが、彼女がお增と云ふ髮結か知らんが、隨分中睦く話して居た樣にあつたがお玉「イエ貴卿、夫れがでございます、貴卿の前ではございますが、餘り口惜いから妾は、最初ッからの事を悉皆お話し申しますが子、御本宅の御新造さんは れ顏にも似合ない、大變な事をなすッて在しやるのでございますヨ。此言葉に精一より、お菊はハッと案じだしお菊「何の事か知らないけれど、此家で御新造の事なんぞを彼是と云ては……」精「コレお菊マア和女默つてお在、お松、遠慮は要んから話すが宜い、大變の事とは何だお玉「先達て貴卿と表作さんと

御同伴に京都へお越しになつた時ですが、其晩に子、貴卿停車場からだと申して、貴卿の偽手紙を持つて車夫が、御新造さんをばれ迎ひに參りますと子、御新造さんはお着物を着換て、妾には宜加減な事を仰しやつてお出ましになつたもんですから、妾はまた貴卿と御一緒だと存じて居りますと、恰ど其晩の十一時過ぎにお歸り遊ばして、妾には子、今思つて見ますと、何だか曖昧な事を仰しやつたのですが、妾も其時には何の氣も注ないで居りました、然うすると貴卿、不意に妾に難題をば仰しやつて、貴卿のれ不在中に突然にお暇をお出しなすッたもんですから、妾は據ろなく、宿へ歸つて、小母の宅に居ります間に、今云ふ御近所のお增さんにも、ッヒした事からお暇の出た譯をば話しますと、ソリヤ御新造が姦夫……イエアノ……糟「よし、夫れで概略は判つたが、併し私が何も彼女の事をば、辯護するのでもないが、お增が然いふ悪い女だから、餘計な事をば想像して、和女をば煽動といふ事は、コリヤ能くあるやつだテ。れ菊も意外の話しに呆れながら、傍より口を出しお菊「お話し中絶ですが實は子、妾から貴卿へ此間

から、申さうと思つて居た事がございましたが、ッヒだお話しせずに居りましたが糟「和女も其事を聞込んで居るのかお菊」イ、エ貴卿、左樣ぢやございません、妾の申すのは此間の事ですが、實は御新造が御入來なすッて、種々なれ話しから妾へ仰しやるには、まだ旦那にはお話しをばせずに居るが、妾には實の兄があると仰しやつて子、段々とれ話しを聞て見ますと、恰ど妾の兄の以前の間の樣で、ソリヤ眞個に御新造も、お困りの御容子でして、其お兄さんが此間久々で、音信をなすッた事も聞いて居りますから、大方何でせう、其樣な事の間違ひから、他人といふものは尾に尾を附けて、種々な事を云ひたがるものですから、悪評を立るのでございますヨ、畢竟貴卿、妾だつて此事をば、此間御新造に承はつたればこそ、此間違ひが解るのですけれど、不意に斯んな事でも聞いて御覽、夫れこそ變に疑ふ處です、れ玉乙傍から口惜がりお玉「イ、エ、夫れが嘘なんですヨ、兄さんなんてソリヤ嘘でございます糟「マアお松も、少し徐にしなさい、お菊和女にれ重が其話しをする位なら、疾に私へ其事を話すが當然だし、東京で彼女を引取

る時に、兄弟の事も調べたが、有明の老爺が話しでと、獨身と云たがお菊「ア夫れが今申した、放蕩漢の兄だとッも开處には　精「けれどサ、今になつて和女に其事を云ふ程なら、私の耳へ入れさうなものだ、併し其論を此處でしても無益だが、而して其兄は何が職業で、何といふ者か聞かなかつたかお菊「ハイ。お菊は流石我身にも、悪徒の兄を持てる思ひ遣り、傍に居るお玉の手まへに氣を兼て、疾みに返答を爲しかねるをお玉「イエ旦那さん、兄と仰しやるのは嘘でございます、其人は子、東京に居る時分は、鎮臺で馬丁をして居た悪漢で　精「ナニ、馬丁をして居たお菊「貧卿夫れですから御新造も、御遠慮をなすッてお話しをなさらるのですお玉「イエ、左樣ぢやございません其馬丁はお増さんの御亭主と乙友達でして、其人の顔も見た事がございます。お玉は厄鬼となつて話すを、精一乙漸くに信せしものか　精「而して其男は、何と云ふ者か和女と知つて居るかお菊「ハイ住居は存じませんが、稻妻の芳五郎といふ奴です。此一言を聞きたるお菊の驚き、精一の心中、如何なる思ひぞ拙筆には盡せず。

（第三十枝）

梅田の停車場にて、お玉を見失ひし髮結のお増は、掌中に珠玉を落失た心地して、其夜すご〳〵と我家に歸り、お源には知らぬ顔して、眠りに就き、其翌日は自暴を起して花主廻りも怠け、重なる三四軒だけ梳子のお房に斷りに遣り、膳の上で一口飲みながら、午前に出行きし三五郎の歸りを待居たるに、黄昏頃に茫然と歸り來たりて　三「オ、大分寒くなつて來やがッたなお増「不景氣な事をれ云ひでないヨ、而して今頃まで何處を彷徨て居るんだ子　三「何處ッて、昨夜の一件の穿鑿に往つたのぢやねへか、マア大器なもので一杯くんねへ。三五郎は膳の向ふに安座をくみ、半猪口で酒を飲みながら　三「今となつて云た處が無益な話しだが和女もまた彼女を見失なふとは、餘り氣が利ねへぢやねへか、併し彼女は先へ滝車に乘込んで、紳戸へ往ちまやしないだらうかお増「ナニ、昨夜も話た通り、アノ切符を檢とさの混雜の中で、妾が彼女より先へ境界の中へ這入て、モウ來だらうと乘車場で待て居ても、顔が見ないから大な聲で、れ玉さん〳〵と呼ぶもん

だから、大勢の人が妾の顔をば見る位だもの、彼女の耳へ這入らない理屈は無いヨ、夫是する中に瀬車は出て行くし、同伴人が居ませんからと、驛吏に斷つて妾はまた境界を此方へ出て、开處で氣が注てコリヤ屹度彼女は妾が西洋人を指示したから、洋妾といふ事を悟つて、混雜に紛れて逃げたに違ひなからうと、切符代の四十錢ぐらゐに關係つた事ぢやないと、餘程其處邊を搜したけれど、影も形も見えないから、詮方なしに歸て來のだヨ　三「逃る程の女が其邊處に何で居る者か、何しろ芳が神戸で待てるだらう、如彼いふ話しで先へ往たのだから　三「そりやア爲方がないサ、彼人だつて勝手な時は、不沙汰をする事もあるから　三「夫は宜にして、お源婆さんの方は何と云て置つもりだお甞「夫だつて昨日五圓の金を遣たらはた〳〵として、彼女の事は何分お賴み申しますと云つて居る位だから、默つてさへ居りや如何なつたか知るまいが、而して和郎は何かへ、心當りの處をば聞いて見てくれたのかへ　三「聞いた處ぢやアねへ、脚が樋木になる程歩き廻つたが、何分是まで心易くする家を知らねへから、雲を摑む樣なものだ、併しお增、斯んな話しを聞いたのサ、和女はアノお玉が、昨夜殿て居た下駄を知つてるか、履物をお甞「何だ子、突然に其樣な事を云つて、履物なんぞに氣は注ないが、夫れが如何したのだへ　三「昨夜何時頃か知らねへが、田蓑橋から身投げした女があると見ゐて、橋の中央に女の履物が一足脫いでわつたのを、巡査が見附けたもんだから、コリヤ適切身投げだらうと、川筋を探つた處が、死體も見えねへとの事だ、夫れに彼の通り交番所も近くだから、飛込んだのなら其際に知れる筈だし、併し夫れだと云つて、女が彼處で履物を棄て行く氣遣ひもなし、何んでも怪しいッて種々な噂をして居るのを聞いたから、乃公も念の爲だと思つて、該處の派出所へ往て、昨夜の容子を尋るとノ、生憎なものサ、今朝巡査が交代てしまつて、僕は昨夜の事は知ないから、北警察署へ往て聞けといふのだ、夫から和女御苦勞にも、また警察へ往つて聞て見ると、成程其履物はあつたが、乃公が見た處で見覺えはあし、愚圖〳〵して居て關係になつては堪らねへから、乃公ア歸つて來たが、履物は何だヨ、木地甕の跡聞に、黑天の花緒でまだ新いしいのだ、殊に寄ると彼女、死

たかも知れねへせお増「亦様だらうか子　三「死たのなら和女に取附くヨお増「アレサ、戯談
ゝお止しヨ　三「トキニ、此儲けの口が外れた日にやア、泣寐入でも馬鹿氣てるから、如
何だへ、寧そ和女の口からアノ芳の野郎の事を、浮世小路の菊印に話し込んで、一儲け
する工夫はあるめへだらうかお増「然うさ子、兄妹でも氣質は大違ひだから、何か工夫す
れば少し位になるだらうが、明日往つて甘く話しかけて見やうか子。二人が話しの處へ、
梳子のお房が歸り來たりてお房「お師匠さん、此金をお増「何だ子其金はお房「浮世小路のお
菊さん處へ往きましたら、誠に永々お馴染になりましたが少し都合がありますから、當
分は來て下さらんでも宜しいと云つて、髪結賃は全額でれ貰ひ申して歸りましたお増「エ
ヲ、お菊さんは妾を斷ると云つたかへ　三「失れ見ねへ、チヨッ忌々しい……。

（第三十一枝）

勝田精一が身に取りては、容易ならぬ事をお松が口より洩聞きたれど、之れを公然穿鑿
する時は、却つて恥辱の上塗、名譽にも關すると思ひしものか、又不義の相人が相人な

れば、少しく妾宅でゝ猶豫せしものか、堪忍強きも事によるもの、或は他に思ふ仔細の
ありてか、一時額に現出し、尊莱の如き青筋も自然に消滅し、釣上つた眥も次第に逆戻
りし、碎くる計り握り詰た拳は、知らず識らず緩むなど、一向お玉のお松が身に取りて
は、訴訟甲斐なき次第なれど、お菊の心中穏かならず、口出しすれば傍に居るお玉に、
芳五郎が我身の兄なる事の知るゝ道理、默つて居ては旦那へ濟ずと思ふ間に、時計はハ
ヤ十二時を報じたるに、マア何事も明日、アヽ一醉つた〳〵と精一の臂枕に、此一條は
中止となり、其夜は別に異る事なく、例の如く一泊して、翌朝は機嫌よげに歸り行きた
り、然れどお菊との寢物語は、聞くによしなければ後枝に讓りて、偖困つたはお玉の處
置なり、斯う物事がしらけし上は、お菊も妾宅に置く譯にもゆかず、と云ふてお源の家
には尚は歸されず、據ろなくれ菊が以前の知己にて、お作といへるが今は或料理商の妻
となり居るを幸ひ、其家に賴みて、當分乾娘代りに使ふて貰ふ事となりしはお玉の僥倖
なり、素より此お玉ゝ、悪き心ある婦人ならねば、只管お菊の實意を喜び、慣ぬ酒席の

立働きも、氣を利して動ひるゆゑ、お玉〳〵と持囃れる身とはなれり、夫れは偖置き彼の芳五郎は、お增と約束して神戸に行き、待合す家に待ども何の音信もなく、翌々日大阪に歸り、三五郎に逢ふて容子を聞けば、お玉は其の夜云々との事に、芳五郎の方では格別の失望もせず、却つて面倒がなくて宜きと思へど、表面はよき程に挨拶して別れ、其の後十日程も經て後の事なるが、一日南地の或料理屋にて、例のれ辰のお重と密會、奥まりたる一室で談話の半途と見えたり　芳「如何だへ、精一はまだ、喫付た樣な按排ぢやアねへかお重「イ、エ、此の間京都から歸つてからは、俄然に田舍の地所を買ふとか云つて、自分で开處此處を駈摺廻つて居るから、妾の事なんぞには搏つちや居ない樣だ芳「イ、ヤ、然う沈着ては居られめへゼ、和女はれ松といふ下女を、追放出したぢやねへかお重「オヤ、夫れを如何して知つて居るのだへ　芳「夫れが和女の油斷といふものだお重「併し何だヨ芳さん、妾は斯うして內證で、和郎と出會のも子、實は氣味が惡いから子、萬一の時の用心と思つて、ちやんと豫防がしてあるのだヨ　芳「ヘン、豫防なんて虎列拉ぢ

やあるめへし、生意氣に漢語なんぞを遣ふもんぢやねへやお重「イ、エ、妾は子、自然他人にでも見附られた時の辯解に、和郎の事をば妾の實の兄さんだと、云つてあるから大丈夫だヨ　芳「誰に、旦州が夫れを眞個だと思つてるかお重「イ、エ、まだ直接には云つては無いが、妾のお菊さんから程よく云はせる狂言がしてあるからサ　芳「ナニ、ヂヤ何かへ、アノお菊に乃公の事をお重「和郎彼女を知つてお在かへ　芳「イ、ヤ知らねへ、知らねへが和女また、其樣な事をば云つたのかお重「遠廻しに云つて置ないと危險だから、斯々した兄があるといふ事だけは話したのサ　芳「乃公の名めへもお重「イ、エ、そりや少し譯があるから、先方で名を聞た時に、辰さんだと誤魔かしてあるのだヨ、而してまた和郎は、れ松の事を誰に聞いたのだへ　芳「夫れが惡事千里だ、和女アノ三州を知つてるだらうお重「三州とは　芳「ホラ、三五郎ヨお重「俳優のかへ　芳「べら坊め、俳優ぢやねへヤ、床山をして居た三五郎だ、アノ淺草に居たお重「彼人かへ、其樣なら一二度東京で見たが、また當地へでも來たのかへ　芳「彼奴は乃公より先へ來て、今ぢや女髮結のお增といふ者

の宅に、亭主気取で居やアがるのだ。お増と聞くよりハッと胸に閊り、お重も過し夜の事を思ひ出し、思はずも膝を進めお重「芳さん、其お増といふのは、今云ふお松の姉ぢやないかへ　芳「何を云ふんだへ、姉でも妹でもわりやしないが、アノお松はお玉といふのが實際の名だ、而してお増とは合長家の、お源といふ婆アの内が親類で、其家へ來て居るのだが、一寸マア十人並といふ顔だらう、开處で子、お玉の事で妙な話しがあるんだお重「お待ヨ芳さん、妾も其れ松の事で話しがあるのだヨ。

（第三十二枝）

芳「如何な事だ、其話しはお重「此間の事だが子、其お増がお松の姉だと云つて、両女連で内へ來てサ、アノ偽筆の一件を知つてゐるものと見えて、妾をば脅かして、百圓の金を持つて歸つたヨ　芳「エッ、太い女だなア、乃公にやアちつとも其事ア話さねへのだお重「誰から偽手紙の事が洩れたか、妾は未だに合點が往かないが、和郎またお松に妙な話しがあるとは、如何な事だへ　芳「夫れも話すが、アノれ増の畜生、酷い事をしやアがる

ぢや無へか其手紙は斯いふ譯だ、最初乃公が和女の事を、三五郎に口ばしつたが惡いのだが、其時にお増が斯々して之如何だと、狂言を書いてくれたのだ、夫れだから和女を呼出した事をば、彼女は知つてると云ふもんだ、开處へ持て來てアノお玉が、暇を出された話しをしたもんだから、乃公は彼家へ暫らく行かねへのを、何とか思つて居る處へ持て來て、三五郎は彼の通り、奮が芝居者だから、騙り場なんぞの振付は甘へものヨ、夫れと知らずに和女が引かゝつたのは、足許が暗へからの事だ、併し其れ玉はノ、モウ大丈夫だ、モウ大方十日餘りにもなるだらうが、乃公が久々で三州を訪ねて往つた處が、お増は生憎不在だつて、両人で話してゐ處へ、れ増が一杯機嫌で笹折か何かを手に提げ、れ玉と一緒に歸つて來たのさ、夫りや和女たしか十七日の夜だつたヨお重「十七日なら、其夜に両人は内へ來たのだヨ　芳「わん畜生、夫れに乃公にや知らくしい面をして居やアがるのだ、其晩に三州が、散々愚痴を盈しやアがるから、今度は乃公が作者になつて、マア聞ねへ、斯ういふ工夫を編出したのだ。と是より芳五郎は彼のお玉を、洋妾にする

手綱さをお重に話し　芳「而して乃公は神戸で待て居ても來ねへだらう、だからまた歸つて來て、三五郎に容子を聞いて見ると、お玉は其晩にノ、田蓑橋から身でも投げて、死んだらしいといふ話しだから、モウ氣道へはあるめへと思ふが、茲に一ツ困つた事があるんだお重「何が……隱さないでお云ひよ、困る事とはまたお金かへ　芳「極り云つてらア、乃公さつて道成寺の白拍子ぢやあるめへし、然う金々とも云やアしねへヨお重「然うだらうけれど、何事にも先立ものと云つたらお金だから、夫れに旦那も子、此間京都から歸つて來た後は、妾に少しお金を呉れたから　芳「开奴はマア强氣だ、而て何の心算で其樣に、和女に金を呉たのだらうお重「ナアニ夫れと子、如彼いふ交際家ではあるし、近來の事だから和女もチト、人交際をするが宜い、夫れに付ては博物場でやるバザーの連中にも加はる樣にと云つて子　芳「バザーたア何だ、符牒で言はねへで、眞ともに云ひねへな面白もねへお重「オホ、、、、符牒ぢやないヨ、バザーと云ふ事は、此節紳士の奥さん達やお嬢さんが集つて、慈善市をする事だヨ　芳「慈善市か可の市か知らねへが、此方

は其樣な事にやア盲入だ、マア何しろ金を貰つたのは結構だ、而して今日は幾許か持つて來てくれたかお重「ソレ御覽、今道成寺の白拍子ぢやないと云つた癖に、矢張聞くと欲しがつてからに、併し困つたと云ふのはれ金の事かへ　芳「ナアニ、それは別の事ヨ、其お增がノ、和女は知るめへがお菊の處へ、以前から結髮に往つてたのを斷られたからサお重「エッ、そんなら何かへ、アノお增は浮世小路へ、モウ先度から出入をして居たのかへ。お重は此事を初めて知つて驚きたれども、まだ芳五郎とお菊が兄妹とは心注ず、芳五郎も此事を今迄かり口走りしものゝ、深く話せば自然お菊と兄妹の事が知れる道理なれば俄然に話しを紛らさんと　芳「ナニ、夫れも斷られたからモウ大丈夫だ、トキニ和女の懷中が其樣に温かなら、大袈裟に下物も注文して、マア緩くりとしやうぢやねへか、オイ姉さん、一寸オイ。芳五郎が忙しく叩く手の音に、ハイ——と返答て來る乾娘が、障子を開けて客を視れば、コハ思ひきや芳五郎とお重なれは　女「オヽ、貴女は……お重「和女とお松　芳「オヤ幽靈か……。三人一同に驚きし後の話しは如何ならん。

（第三十三枝）

勝田精一は、妻のお重が邪に托けて出行きし後に、一人居間に引籠りて種々の書類を取調べ、或ひは引裂き、甚だしきは火鉢の火に燃べなどする處へ、下女が來りて下女「旦那さん表作さんがお入來でございます。精一は取散せし書類を手早く取片附け　精「梅澤が來た、左樣か、此室へお通し申しな……オイ〳〵、其跡へ誰彼が入來ても、今日は主人は不在だと云つて斷け下女「ハイ。下女は心得て立行きしが、間も無く梅澤作次郎は、主人の居間に打通り、不審氣に鼻を蠢かせ　隼「御主人御不沙汰を……フン、大層紙焦臭い樣ですが　精「イヱ、今一寸紙の端が燃つたのです、サア此方へ　隼「トキニ如何も意外の御不沙汰で　精「定めてお忙しでせう、追々と一月にも近附ますから、御職業の方が　隼「處が貴卿、近來は如何して、一月が來たからと申して、襖の張替や、壁を塗かへて腰貼をさせるなどは舊弊だなどゝ、何にでも舊弊と云ふ言葉を利用して、其實は嬾惰なのか但しは飾儀主義か、表具屋は恰でやくたいです、畢竟私なんぞは斯うして、諸君の御懇

命を蒙つて、本職の方は彼處退けと云ふのですから、繁閑の頓着はございません、トキニ御新造さんは　精「今日は一寸他出しました　隼「左樣でございますかエー何でございます、今日は少し貴卿に、折入て御忠告、イヱ御話しがあつて參りましたが、決して何事を申出ても、れ氣に障て頂いては、甚だ恐縮ですが……　精「ハ、ア、何ですか。精一は早くも心中に、お重が不義一件の忠告ならんと察し、其事を知らぬと云ふもチト迂闊な話し、然れどもまた、不義ありと知りつゝ默許するは、如何にも意氣地なき所爲なり、まづ作次郎が言葉を聞きて、其上臨機の返答せんと思ふ中、作次郎は膝を進め　隼「實は私も、一寸或方で承はつた義で、確とした事とは存じませんが、餘り意外な事を聞いたもんですから、失禮ですが今日は、れ話しやら御忠告の考へで參つた處が、恰ど御新造は御不在中で實に好都合です、併し貴卿は實際まだ、其風說はお耳に入りませんか。精一は茲ぞと思案して　精「イヤ、君が注意は厚く受ます、尤も確乎とした證跡を押へはしないけれど、或者から既に私の耳へは、窃かに入れてくれた事もあります、けれども夫

れを私が好んで、公然の事にすると、自ら不名譽をば賣る樣なものだと思つて、今日まではマア默許して居たやうですが、而して如何な事を世間では云つて居ますか　作「イエ貴卿、斯んな事を世間で云ふ樣になつたら、夫れこそ大變でして、第一に其筋が默つては居ますまい、唯或人が密に其事を噂して居るのですが、私などは平素斯まして、お出入をするもんですから、左樣な事は萬あるまじき事と承知して居りますけれど、是れが貴卿、假に事實とすると大變ですから、誠に申上げ難い事をば、斯して申し上げるのですから、決して御立腹の無い樣に、イヤ實に他人といふ者は、兎角何事に限らず、妬心のある者ですから、貴卿が今日の御勢力と、御人望のあるのを或は妬んで、種々な事を申すのかも知れません　精「イヤ何事に限らず嫌疑を受るといふのは、平素の心得が良くないからでせう、併し私の參考にもなり、且つ將來の注意にもなるのですから、君が如何いふ人から其事の噂を聞いたか、夫れだけを洩して下さい、ナニ夫れを聞いたからと云つて、決して其人に彼是と云ふ樣な、卑劣な考へは無いから。精一は唯お重の事とのみ

思ひ居れど、今日此作次郎が忠告に來たりしは、然る事にあらざるにや、一層辭を密めて　作「貴卿を先達て私がお誘ひ申して、京都へまゐつた事がございませう。精一いよいよお重が事なりと思へば　精「サ、其時の一件でせう　作「左樣、其際私も、貴卿の御紹介で伺つた事のある、アノ三本樹の旦那の……。此言葉を聞くと忽ち精一は如何なる故にや滿面パッと赤くなり　精「篠崎さんが如何しました　作「イエ、其何です、或人が噂でして、其篠崎樣で貴卿が、何かお頼れになつた事がございませう、夫れをば貴卿が何なすッて先方へは何して置いて、其何した何は何でして。今作次郎が何蟲しの言葉を、他人が聞いては實に何の事か判然せざれど、精一には一々鉞もて刺るゝ心地、唯默つて煙草に紛らしけるを、作次郎も斯までは云ひしものゝ、体裁惡ければ歸る機會に、帶の間の時計を取出し　作「一寸覗て慌だしく　作「オヤ、迂りとして長席を致しました、今日は一寸お約束がございますから、モウ失禮を致します。

（第三十四枝）

浮世小路のお菊は、此程彼のお玉が云ひ出したる、お重と兄が姦通の話しを、亦熟々と考ふれば、如何も半信半疑にて今日も下女のお梅に向ひお菊「お梅、此間お増さんをば斷つてから、あの後妾の不在中に、倘然兄さんは來やしなかつたかへお梅「イヽエ、此節は一寸もお入來なさいませんが、何處かお悪いのではございませんかお菊「其樣な事もなからうけれどお梅「妾は種々な事をれ尋ね申しますが、彼の巧手なお増さんをば、何故貴女はお斷りなすつたのでございますお菊「和女には未だ話さないけれど、アノお増さんはなか〳〵人が悪いから、旦那さんも彼んな女に髪を結せる事は、廢せと仰しやるから斷つたのだヨお梅「左樣でございますか、妾も今だから申しますが、彼のお増さんの御亭主といふのは、大層悪い人だと申す事でございますヨお菊「左樣かへ、和女は其の人に逢つた事でもあるのかへお梅「イエ、先日アノ梳子さんが然う申しました、内のお師匠さんの御亭主は、三五郎さんといふ博徒で、毎度遊びに來る友達は、皆な怖らしい人ばかりだと申しました、其中にも稲妻とか、雷だとか云ふ名前の人があると云ひましたが、破落戸

に雷といふ名も、可笑いぢやございませんか。下女のお梅が何心なく、云ひ出す事もお菊が胸にギックリあたりし其處へ、人力車を急がせてれ玉は此家へ來たり、慌たゝしく入口の戸を開けてお玉「れ梅どん御新造さんはお在宅ですか。と訪ふ聲の普通ならぬに、お菊も何事かと奥より立出でお菊「オヤ、和女如何したの、何か該家のお作さんが、小言でも云つたのかへお玉「イヽエ貴女、如何して誠に宜いお内へお世話なすつて下さいまして、種々お禮を申さんければならないのですが、唯今まゐりましたは急なことで、急にお報せまをさうと思つて、南地から人力車で駈けてまゐつたのでございます、斯く云ひながら傍に居るお梅に、氣を兼ね居る容子なれば、れ菊も早く夫れぞと察してお菊「左樣かマア、彼處へれ出でなお玉「ヂヤ、失禮でございますが、然うさしていたゞきませう。れ菊を先きにお玉はおくの間へうちとはりてお玉「今日子貴女、アノ御新造が芳五郎といふ奴と兩人づれで、妾が該家に居ることを知らないもんですから、來まして子、貴女、いま兩人が散々酔つぱらつて居ますから、妾は其事をお報せに來たのです、マア貴女憎

らしいぢやございませんか。れ菊は半信半疑の處へ、今れ玉が此注進に、偖はと呆れながら小聲になりお菊「而して何かへ、未だ兩人ながら居るのかへお玉「未だ居ますとも彼の容子ではモウ三時間位は、大丈夫居るかと思ひますが、妾も子、此間彼んなに申したものゝ、お增さんの話しで聞た計りですから、何でも證據をば見附たらと思つて居る處へ、今日も子貴女、是れが天命とでも云ふのでございませう、妾が居る事を知らないで、奥の座敷へ來て居るのですヨ、妾も彼人達が、何時の間に來たのか知らず居たのですが、オイと云つて手を鳴すもんですから、何心なく往て見ますと子貴女、マア眞個に憎らしいぢやございませんか、芳五郎といふ奴は恰で亭主氣取になつて、對座で御新造に酌を爲せて、お酒を飲んで居るのでございます、而して妾の顏を見た時には一寸は呆れた樣でしたが、芳五郎奴は子貴女、妾を見て幽變だなんぞと云ひまして、御新造も平氣な顏で、マア馴染甲斐に一口れ飲み、なんかと云つて盃をさすのです、餘り忌々しく思ひましから、其時に何とか云つて遣らふとは存じましたが、夫れよりか貴女にお報せ申して

確な處をお話しする方が宜らうと、大急ぎで參りました。お玉は未だ芳五郎を、お菊の兄とは心注ず、頻りに惡さまにいふを聞く身の辛さ、此上は率そお玉にも、我兄なりと打明け語り、其上の一思案と猶一層聲を密めお菊「實と今まで和女には隱して居たけれど、其芳五郎といふ惡漢は、妾の實の兄さんだヨお玉「エ、ーお菊「無惘りお爲だらうが、其理由を今云つて居ると長くもなるし、折角然うして證據を押へたのだから、妾が今ッから和女の內へ往つて、御新造も兎も角も兄さんに遂つて、異見をさないと如何も旦那にも濟ないから、今から一緒にお作さんの處へ行かう、コレお梅、一寸腕車を……。お玉は餘りの意外さに唯お菊の顏のみながめ、うろ〳〵するこそ笑止なれ。

（第三十五枝）

かの料理屋の奥座敷では、れ重と芳五郎が密密聲お玉「ねへ芳さん、如何してまたアノお松が、斯んな料理商なんぞへ乾娘に來て居るのか、モ一度呼んで聞いて見やうぢやないかへ　芳「左樣さッ、三五郎の話しぢやア、停車場から逃出して其晩に、田簑橋から身投

をあたと吐したが、彼奴等また乃公をば、かつぎやアがつたかも知れねへヨ、併しお源といふ婆アは、宗右衛門町邊の青樓へ、とき〳〵お針に雇はれて行くと云ふ事だから、其樣な處からアノお玉も、乾娘になつたかも知れねへが、何しろ餘り思ひがけねへから、己ア幽的かと思つたお亀「併し今日の事を彼女が口から、饒舌りもしなからうねへ　芳「开處は何共受合ねへが、和女の處へお增と兩人で出かけて往つて、己の事をば訝う持込んで、金でも强求る程なら大体腹の底も知れたもんだ、だから斯しねへ、モ一度呼んで口止めに鼻藥でも遣つて置ねへ、然うすうや大丈夫だお亀「一圓で宜だらうか　芳「氣まづい事を云はねへで、三圓も遣んねへな、今日は大層懷中が重いぢやねへか、何んしろ遣るものならはやいが宜いヤお亀「一寸と和郎手を鳴らしておくれ　芳「オット來た。芳五郎は手を打ち叩き　芳「オイ、一寸……。臺所の方にて「ハイ――」と答へて此間に來たるは、れ玉にわらで他の下女なれば　芳「アノ何んだ、和女ぢや判らねへから、お玉さんを一寸來て貰つてくんねへ下女「ハイ、彼女は一寸お使にまゐりましたからお亀「オヤ左樣、而して直ぐにれ歸りかへ下女「如何でございますか、一寸聞いてまゐりませう。下女乙其儘立て行きしが、跡にれ重は小聲になりお亀「芳さん、何處へ往つたのだらう子　重「何處へ往つても宜ぢやねへかお亀「だつて斯して居る事を、偖どまた　芳「ナニつまらねへ、如何せ一度は騷動のもとよだお亀「アレサ、氣樂に古いド、一處ぢやないヨ。お重は頻にお松い事を心にかくる處へ、愛嬌者と評判の、此家の女房お作はか〳〵る事をも知されば、此座敷に入來りお作「如何も生憎に今日は、お客さまが込合まして、誠に不行屆でございます、夫に子貴客、二三日は不漁ですから、魚類も碌なものがおざいませんで……而してれ玉を呼べと仰しやいましたさうですが、何か不調法でも致したのぢやございませんか、まだ子貴客、彼女は家業に慣ないもんですから如何も……　芳「イエナニ、別に粗忽も何もしたんぢやありませんが、一寸聞てへ事があつたからですサアれかみさん、持合せを一盞お作「オヤ、然うでございますか、頂戴致します、コリヤ如何も恐れ入ります、イエ御ございます、お作は芳五郎の盞を受け、れ重が酌に頂いて飲干し、盃洗で猪口を濯ぎなが

ら芳五郎に返杯しお作「失禮でございますが　芳「左樣か、ヂヤれ貴へ申しやせう、トキニ種々な事を聞くやうですが、アノお玉さんといふのは、アリヤ何日頃から當家へ來たのですかお作「彼女でございますか、アリヤツイ此間ですが、お見かけの通りまだ素人でお面「而して何ですか、貴家とは御懇意なんですか、以前からお作「イ、エナニ貴女、彼女は斯でございますヨ、妾がまだ當家へ嫁入ません以前の友達で、歌菊といふお妓がございまして、其妓も唯今では或旦那に落籍されて、船場の浮世小路に居りますのです、其お菊さんから賴れて、據ろなく乾姐代りに使つて居りますが、一寸目先も利ますし、素人にしてお容さまの待遇も、萬更ぢやございませんから、お客さまの中には却つて初心で宜いと仰しやつて、大層御贔負にして頂く方がございますので……　芳「左樣ですか、イエナニ使に往つたのなら、歸つて來てからで宜うございますから、一寸此室へ寄來して下さいお作「ハイ畏まりました、貴客方は彼女を御存じなんですかお面「イ、エ左樣ぢやございません、トキニれ忙がしいでせうから、此室は宜しいですヱお作「左樣ですか、ヂヤ

失禮を致します、今にお玉が歸りましたら、斯く云ひながら爛陶器の重箱を見てお作「温かいのを直ぐ持つてまゐりませう。れ作が立去りし跡を見て　芳「オイ、れ菊が周旋で此家へ寄來したのぢや、迂かりと油斷はならねへぜ。

（第三十六枝）

芳五郎は其時、腹の中にて熟々考へると、斯して何日までお菊の事を隱し居るとも、到底知れる事なれば、寧そ遲々ながらお重に話去置んと思ひ　芳「今改まつて云ひ出すのも何だか變だが、實はノ、浮世小路に居るアノお菊と乃公は、實の兄妹だぜお面「エッ……嘘々、芳さん、其樣な戯談處ぢやないヨ、夫れよりかお松が其お菊さんの世話で此家へ來て居るのは、如何いふ理由だらうか、モ一度此處のれ內儀さんを呼んで、聞いて見やうぢやないかへ　芳「厥々、夫れよりか今云ふ通り、お菊は乃公が妹で、其妹の內へは如何して、お增が以前から髮を結ひて往てたのだ、處が夫れも如何いふ理由か知らねへが、斷つて來たと云ふ事を三五郎が云つて居たが其日は何だヨ、乃公が神戸へ往つた翌日だ

さうだから、殊に寄るとアノれ玉がれ菊の宅を知ってるもんだから其の晩停車場から直ぐに、浮世小路へ往ったのかも知れねへぜお重「芳さん、夫れでは何かへ、眞個に和郎と お菊さんは兄妹かへ　芳「嘘を云って何にするものか。れ重はまた更らに芳五郎の顔を熟々と眺めお重「あらそはれないものだねへ　芳「何を云やアがるんだへ、乃公の顔に穴があくぜ其樣に視るとお重「お菊さんが和郎の樣な氣だと宜けれど、如彼に嚴重い氣質だから、モシ此事を聞かれると、此間妾が云った言葉もあり、夫れこそ大變だが……れ松は倘然饒舌にいったのぢやなからうか子　芳「何處へお重「浮世小路へサ。芳五郎も俄然に夫と心注き　芳「开奴は大變だ、旦那に知れたって屁でも思はねへが、お菊に知れては乃公が云った事があるから、而してモシ此家へでも出て來られちゃ、しまつにはをへねへから、お辰モウ、然なっちやァ和女も膽力を据て、今ッから隨德寺と山掛ねへ、恰ど幸ひ路費もあるぢやアねへかお芳「妾も何だか氣が咎めて歸りにくひから、今ッから何處へでも伴て往っておくれ　芳「何しろ此家に長居するは危險だから、今夜は何處かで泊り込んで、

殺くりと相談をしやう。芳五郎はまた忙し氣に手を鳴して下女を呼び、勘定書を取り寄すると、れ重と合財袋から紙幣を取出してお重「姉さん、お邪魔をしました子、お剩金は少しだけれど、私女が收ってお置き下女「左樣でございますか、毎度難有う、お腕車を申しませうかお重「ナァニ宜しい　芳「姉さん、お玉さんは未だ歸らねへかへ下女「ハイまだございます、如何も誠に不都合で、氣の毒氣に云ながら表の方を向き下女「奥のお二人さん、お履物。店の邊りにて男の聲　男「ようてなァ……。芳五郎れ重が此家を出しと一足遲ひに腕車を急がせて駈來たるは彼のお菊とお玉の兩人なり、門前に楫棒を下すと、直ぐにれ玉は家に駈込みお玉「お内儀さん、奥のお二人はお作「オヤお玉、和女マァ一寸と云って、何家へ往ったのだへ、而して子、お兩人のお客が、何だか和女を尋ねてれ在なすッたが、今まお歸りなすッたヨお玉「オヤモウ。兩女が此問答の處へお菊も入來たりお菊「お作さん、其後とお作「オヤ歌菊さん、サアマアれ上りお玉「貴女へ、モウ御新造と芳奴、イエ芳さん、今歸りましたとお菊「オヤソリヤ不可ねへ、モウ餘程になるのかへ、お作さん

其両人は先刻に歸つたのですかへお隼「オヤ和女はんも知つてる人かへ、今方开處へ、腕車にも乘らないでお出なすッがた……お菊「夫ではれ玉どん、和女一寸お玉「ハア宜しうございます、追駈て往つて捕まへるか、又何處へ行くか見てまゐりませう。れ菊とお玉が此有樣を、れ作は如何なる事がと怪しみながらお隼「如何したのだへ、一体マアお玉「イヽヱ、大變な事ですから、委細は跡で其御新造さんから、れ聞なすつて下さいまし、妾は一寸一走り往つてまゐります、三どん（下足番の名）北へ往つたのだねへ、彼人達と。お玉と宵闇の星明りに戸外へ飛出し、何でも兩人の跡追かけて姿を見附けんと、一丁半ばかり馳行けども、似た人だに居らざれば、モシ跡の四辻を何方へか横切りしかと、立戻る竪町から來かゝりしはお源にて、出合頭に顔を見合せお源「オー、和女はれ玉かお玉「オヤ、小母さんお源「コレ小母さんぢやないヨ今妾は柴梅さんで、和女が此横町の料理屋に居る事を聞いたから、出かけて行かうと思ふ處だ、れ増さんが折角世話してくだすつた先方樣をば如何いふ塩梅しさで歸つて來たのだ、アレサ何をそんなに狐附きの樣に、う

ろうろとするんだヨ、マア妾と一緒に來なさいお玉「イヱ、一寸今尋ねる人があるから、マア此袂を放しておくんなさいヨお源「滅太にや放さない、サア〳〵、妾と一緒に來なさい〳〵。

（第三十七枝）

れ菊はれ作に委細を語り、お玉が返事を待居る處へ浮世小路の宅より顔馴染の車夫が、腕車を以て、迎ひに來たり、旦那が唯今お入來との報せに、れ作へお玉が歸へりたれば、斯樣〳〵と頼み置き、急ぎ我家に歸りて座敷に通りお菊「とんだ失禮を致しました、一寸南地のれ作さんの處へ往つて居りまして　繕「左樣だとお梅が云つたから、腕車を持せて呼びに遣つたが、何の用だへ、松が慌て何やら云つて來たので、和女も腕車で急いで往つたとの事だが、如何いふ事だつたお菊「ハイ。返事はすれど明瞭にも云ひ兼て、猶躊躇子に精一もまた强ては問はず、携へ來たりし革匣を手許へ引寄せながら　繕「實は態々呼びに遣るでもなかつたが、今夜に渡すものがあつたから。斯く云ひながら革匣の中より

數百圓の紙幣をとり出し　糟「斯な事をば突然に、云ふのも何だか變だけれど、和女もマ
ア斯して居るものゝ、萬一に私と別れる樣な事がないにも限らず、何か將來の目的も附
て置くが宜らうと、實はモウ疾くに氣注ては居たが、さして之ぞといふ金融がなかつた
が、幸ひ此間賣買した地所で、非常に收得があつたから、斯んな時こそ其金をば無いも
のにして、和女に遺ふと思つて持つて來たのだから、コリヤ取つて置きなさい、仔細は
何か判らねど、紙幣をお菊の前に突遣り　糟「併し何だヨ、和女に進げた以上と勝手にす
るが宜けれど、兄にまた消費されぬ樣に、要用時分までは和女の名義で、貯蓄銀行へで
も預けて置が宜らう、實はお重にも二三日前に、何かの用意にと云つて遣たつのを、今
日乙銀行へ預けに行くと云つて、使者にも遣ずに自分で持つて往つて私が内を出る時
にはまだ、歸つて居らなかつたヨ、お菊は慮らずも今宵精一が、此大金を惠みくれしを
如何感じたか瞼に一杯涙を浮めお菊「旦那さん、妾はモウ貴卿に申譯けもなければ、お顏
を會せる事も出來ませんが、夫れだからと申して、今となつて斯して多額のお金をば貰

ひ申して、是れッ限りお暇でも出る樣では、妾の身に取つては、如何なに悲しいか知れ
ません　糟「オイコレ、何も今日限に離縁とも、暇を遣とも云つてるのぢやないヨお菊「イ
ヽヱ、然う仰しやいますけれど、何の爲めにまた此お金をば……ソリヤモウ妾が幾許何
と申しても、兄が如彼な事をばして居るもんですから、妾にれ憎しみのかゝるのは御無
理でもなし、第一は世間といふものがあつて、他人が默つて許しますまいから、何程妾
が離れともなくつても、貴卿の御名譽に關はるとあれば、如何も致し方はございません、
夫れも悪皆アノ兄が心からですから、併し此末假令妾の身は、如何な苦勞をせうとも、
此上貴卿のお顏に、泥を塗る樣な事をせずに、遠い田舍へでも往つてしまつて、一生を
尼で立通す決心ですけれど、夫れとしても斯んなに澤山れ金をお頂き申しては、妾が第
一冥加にも盡きますし萬々一こんな事が他人の耳へ這入てゝも御覽、夫れこそアノお菊
の兄妹はと、後指を示れる事は、今ッから目に見えて居ります、ですから今日も子貴卿、
實は斯いゝ理由でございますヨ。お菊が鼻つまらせて云ひ出すは、孫て兄が不埒の證據

を押へんと思ふ折から、今日慮らずお玉が來たりし事より、お作が家に行きて、兄に意見なさんと思ひしも、早やお重芳五郎が歸りし後にて、お玉に云附け踪跡を探らせ、其お玉の安否を聞ざる中、歸りし由を語りければ、精一も粗察せし事のあるにや、更に驚く氣色もなく　菊「其樣な事だらうと思つて居たのさ、先達て頃までは、隠分彼女も体裁家を氣取つて、容易に一人歩きをする處か、帳場の腕車も、新調のでなければ乘ぬくらゐだから、辻待の人力車などに乘る事はなかつたが、今日は自分が勝手に出車に乘つて、南の方へ往つたと聞たから、何でも怪しいと思つて居たのサ、併しながら實は私も、少し考へがあるから……併し何だヨ、夫れは兎に角、其金を取つて置なさい、兄は兄、和女は和女だ、素より良ない兄のある事は、私も承知で居たのだから、夫れにお重の一件も然うだヨ、まだ東京に居る時分からの馴染とあれば、夫れをば知らずに妻にしたのは、云ふまでもない私が失錯だから、唯其相手が和女の兄であつたのが、實に偶然だテ、イヤ眞個に意外と云ふものだ……夫れは然うと此節は、生命の保險だとか、火災保險だ

とかいふ事が流行するが、實に此不幸といふ事は、豫じめ期する譯には不可、虎列拉といふ樣な病ひが流行するから、考へて見ると人間は果敢ないものサ。例になき精一が冒葉て、何となく心に掛れば お菊「エッ。と云ひつゝ顔を眺むるを、精一は煙草の煙りに紛らし　精「アハ、、、、イヤ斯んな事は鶴龜〳〵。

（第三十八枝）

お源乙慮らずも途中にてお玉に出會、種々と話しを聞くと、全くお增に煽動され、彼等が金儲けの材料に遣ひし事も判り、其上れ菊が周旋にて、今は乾娘拳公する事から、今宵また云々にて、お重芳五郎が行方を索ねに出たりと聞き、流石に慾深なるお源なれども、少しは義理人情を知るものにや、何かお玉に呼やぎ示して、其儘別れてゐふたと、我長家に歸り來たり、お增の家に往つて見ると、何れへ行きしか生憎に、戸を閉切りて不在なれば、其夜は腹の虫を叩き附け、明日お增との應對ぶりを、考へながら眠りに就たり、翌日はまたれ增が在宅時間を計りて、態と平素に異らぬ素振して入來りお源　お增

さん、今日はお増「オヤ、奥の小母さんかへ、大層冷て來たぢやないか、寒さ初めと云ふのか、モウ火鉢が慈しくなつたねへ、サアマア此方へお上りヨお源「アイヨ、難有う、ヂヤ れ免し。お源は座りながら其處邊をじろ〳〵眺めお源「眞個に結搆だねへ、和女どこなんぞは、手からお金を引延す、加之にときゞ大摑みな收得があるんだから、實に結搆だねへ、トキニお増さん、今日は子、誠に申し兼ちやア居るけれど、和女に御無心があつて來たんだヨ。れ増はお源が昨夜、お玉に逢ふたる事は素より知るによしなければ、一向に何の氣も注ずお増「オヤ左樣、斯うして近隣同士なり、妾は出商賣の事だから、何日も御近所のお厄介だのに、然う何も改まつて、御無心も糸瓜も入るものか子、醤油でもされたのかへお源「ナアニ、其樣な品なら一寸一走り行つて買て來るが子……お増「オホ、、、左樣だつたねへお源「アノ子お増さん、今日は據ろない理由で、お金が少し要用事が出來たから、御無心に來たのだが如何だらう子お増「左樣さ子、少し計りなら如何ともするが、一体幾許程要用んだへお源「ナアニ、片手だけ貸て貰ひたいのだがお増「ハア宜し

い。れ増は火鉢の抽斗から財嚢を取り出し、中なる二十錢銀貨を三個ひねくりながらお増「オヤ、生憎十錢がないか、足ないより多い方が宜からうから、此の六十錢を持てお歸り。お増が差出す銀貨は手にだに觸れずお源「オホ、、、妾も此齢にやなつては居るが、何程御近所だつて他人樣のお宅へ來て、僅か五十錢のお金の無心は云ひたくないヨ、ソリヤモウ先方樣に依つちやア、五錢が十錢でも、お借申さないにも限らないが、妾は子お増さん、和女に借る因緣があるから無心を云ふんだ、片手と云ひなら五十圓の事は、解りさうなもんぢやないか。此言葉に漸くお増も心注き、扨は此婆、れ玉の事を喚き附て來たな、よし〳〵左樣なら此方も其心算で返答せんが、何にしても肝腎の、お玉の行へ方が知れぬこそ不都合なりと、思ふ心を顏には見せずお増「何だか知らないが、訝な言草が多い樣だが、如何云ふ因緣で和女に、五十圓と云ふ大金を貸す譯があるのだへお源「ヘソ、其樣なシラを切らないで、和女の胸に聞くが宜いやお増「何か知らないが、理屈は偖置た處で、お心安い中だから有さへすりや、千が萬でも貸すんだけれどお源「オイ〳〵、

泰平楽をれ云ひでないヨ、鶴や亀の諭ぢやアあるまいし、千だの萬だのと、其樣な御大層な望みはないのだ、勝田の宅へお玉を伴れて行つて、強求取つた百圓の半額なら、默てくれたつても言草はあるめへ お増「マア徐にお爲ヨお源さん、其事を和女が知つてる上は、モウ隠したつて爲方がないが、成程れ玉さんと相談の上で、勝田へ行つたには違ひないが子、其時に貰つて來た金をば、何でまた妾一人が全收をするものか子、アノお玉さんだつて、木偶や石佛ぢやあるまいし、お金を皆な妾に渡して、夫れで宜はと默つて居る譯もなし、其時に子、ちやんと自分が半額は、取つてしまつたのだヨお源、其取たとらねへを、今此處で云つた處で水掛論だが、全体アノお玉と和女の周旋で、舅戸の何と云ふ家の旦那が、妾にしてくれたのだへお増「エッお源イ、エサ、妾に其時五圓の金をくれて、何と和女と云つたへ、何れ當人から目見得が濟だら、何とか便宜をすると云つて萬事は和女が引受たぢやないかへ、何の某で何をする人で、舅戸の住居は一体何處だへ お増「其旦那と子、アノ何だヨ、其何でも……お源「斯斯、宜加減な事を云ふもんぢやねへ

夫れよりか御無心申した、五十圓をば清潔に貸しておくれヨ お増「何でまた其樣にお金がお源「無けりや爲方がないから、お玉をば今取戻すか、往つてる先方へ連れて往つて下さい。お源も隙さね天秤言葉、さしものお増も此返答に、暫し小首を傾ぶけたり。

（第三十九枝）

委細を戸外で立聽いたるか、三五郎は徐かに内へ入來り 三「お源さん、言草なら私が聽きやせう。ト尻眼にお源を見やりて沈着顔に座るを見てお源「何だへ三五郎さん、和郎に何も云ふ因縁はありやアしないヨ、而して此お増さんの爲めにや、情夫か御亭主かは知らないが、長家一統へ披露のないうちは、和郎は此家の食客的だ、イヽエサ、餘處の人だらうぢや無いか、夫れともお増さんが己の處の、アノお玉をば勾引した罪をば、和郎が引受る心算かへ 三「カウ、默つて聞いて居りや 宜かと思つて、御大層な事を云ふなへ、乃公がノ、此家の食客だらうが何だらうが、和女の摺つた事はねへのだ、而して今も聞きやア、お玉をば勾引した、カウ、何日お玉を何處で勾引した、マア能く聞ねへ、

彼女が何卒周旋して下さいと頼ひもんだから、近所の情誼を思つて此お増が、妾奉公の周旋をしたんだ、宜かへ、其時先方の旦那から、手附に貰つた、五圓と云ふ金は、和女雛有へと貰つたぢやねへか、宜加減に慾張て置きねへなお源「オイ〳〵大將、イヤ三五郎さん、和郎も放蕩漢にも似合ねへ、己を普道の婆アだと思つてるのかへ、イヽヤイ、唯の鼠と思ふか猫婆だヨ、猫も〳〵尻尾は二股の、化猫だア、併し此年代記を今廣げた所で恰で演劇の臺詞だから、また折を見て話さうが子、夫れよりかお増さん、默つて居ずと五十圓をおくんなさいヨお増「有さへすりや進もするが、其樣大金は手許にないからお源「手許になけりや預けてある處へ往つて、取つて來ておくれ　三「れ源さん、和女も苦勞人の樣でもねへ、無へと云ふ金をば出せと云ふのは無理だらうせお源「だからサ、金がなけりやれ玉の往つて居る先方を云ひねへなお増「三さん、先刻からお源さんが、如彼に云つてるが子、お玉さんは神戸の何處だッたかねへ　三「ナニ、往つてる先方か、ソリヤ何だヨ、アノソレお源「云はれめへ、可憐さうに彼のお玉は洋妾になるが嫌さに、田簑樹か

らさんぷりと　三「エッ……お源「サアれ増さん、是れだけ云つたら解つてるだらう、モウ餘計な口を利くのも野暮だ、何にも云はねへから五十圓を貸ておくれ。れ増は今更何と言譯もなく、三五郎と何やら呟き合、兩人がコテ〳〵と金を集めて、お源が前に差出しお増「實はお源さん今和女が傍で見て居る通り、妾の所有金の有つけたと、三さんが持てるお金を引さらへて、恰度此處に二十一圓ある、だから、今日はマア此金で堪忍して歸つてれくれ、何れ其中にはまた、如何か工面をするから。れ源も目前へ金を突附けられ、元來小膽の女なれば、忽ちに我を折て齣を現はしお源「左樣かい、併し此金ぢや云ひ出した半頽にも足ないが、ねへものは仕方がねへや、マア此金はれ貰い申して、而して何かへ、跡の二十九圓は何日頃になるノ　三「カウ〳〵、何も掛金の催促ぢやあるめへし、何月何日と日を限るにも及ばねへだらうお源「だつて金の事は心算があるからサお増「マア何だヨ、此三十日になりや妾も花主場で、如何せ祝儀も貰ふから、其金で以つて如何にかするからお源「成程、夫れも然うかい、ドレ歸らう、大きにお喧しう……。れ源は金を携

へ歸りし跡に、兩人はホット息を吐き、れ增は入口の戸を閉て小聲になりお增「ねへ三さん、アノ婆ア田鍵樹の事をば、如何して知つたらう子　三「乃公にも判らねへやお增「併し何だヨ、近所に居て今日が日まで默つて居て、不意に如彼な事を云つて來るのは、何でも昨夜か今朝遲り知つたのだが、アノ一件を知つてるのは芳さん計りだから、また彼女の口から饒舌たのぢやなからうか子　三「違へねへ、乾度左樣だせ、アノ野郎忌々しい奴だ、併し芳はアノお源婆アと、惡意にする事があるかお增「イヽエ、まだ一度も逢つた事はあるまい　三「ヂヤ其事を饒舌のも可怪譯だテお增「何分にも誰から聞たと云ふ事が、判らないと危險だから、妾が甘く欺かして云はせて來るから、和郎一寸れ酒の準備をして置ておくれヨ。れ增はゆるみし帶をグッと〆め、合長家のお源の宅へと出行きたり。

《第四十枝》

茲ま又、故篠崎高敬の親戚なる松室の家では、粹芳雄が今回法律學校を卒業し、久々京都に歸り來たりしを喜び、母親のお谷は積る話しの其中に、亡き叔父の事をも思ひ出し

てお谷「叔父さんも子芳雄、先達て報せて進げた通り、まだ和郎アノ齡で死亡なすッたは、アリや全く奉職をなさる中、種々と氣を遣つたからだヨ、和郎達に昔の事を云つた處で知りはすまいが、妾の爺親で和郎の爲めにゝ祖父樣なんぞか、國の御殿樣に仕へた時分と云ふものは、唯武士の道を守つて、而して忠義といふ事さへ忘れなければ、今時の樣に職務上に心配はありやしないヨ、併し子、マア和郎も喜びなさいヨ、叔父さんが夫々筐分を、生前にして置て下すッたから……ドレお待よ、貯つて有るのを出して見せて進げやう。お谷は何れに收ひ置きしものか高敬から貰ひ得たる、彼の銀行の預券を取出し來たり、芳雄に示して涙聲お谷「アヽ、此れを見ても何だか悲しい氣になるヨ、筐こそ今は仇なれだ、南無阿彌陀佛……妾の弟ではあつたが、アノ高敬はなかなか人物ぢや、和郎もノ、其叔父さんをば自似て、何でも世の中に名を知られんければなりませんぞ、而してノ、アノ大病の中で、くれぐれ遺命して置たは、アノ從弟の敬勝の事だ、まだ和郎十歳だから、親の死だとき抔は合衆が泣もんだから、小兒心にも悲しく思つて泣ては居た

が、葬式の際なんぞは、大勢人の集つたのを喜んでサ、恰で祭禮の時の樣に思つてをるのヨ、眞個にまだ〳〵頑是ないから、和郎が確乎と引廻してお遣ヨ。芳雄は母の言葉を耳にも止ず、頻りに預券を見て居りしが、阿母さん、此預券はお谷「サ其れが和郎、叔父樣が下すッたお筐だヨ　芳「僕にですかお谷「左樣だヨ、千圓と云ふと何でも無い樣だが、なか〳〵の大金だから、難有くお思ひヨ、叔父なればこそだ　芳「イエ、頂戴する金額に異論の有る筈は無いですが子、マア一寸御覽なさい、貴母は僕への遺産だと仰しやるのに、此處には敬勝と連帶の預け主になつて居ますがお谷「夫れでは不可かい、妾には其樣なことは解らないが　芳「ソリヤお解りなりますまいが、全体誰がこの一條に奔走して、ことに此の京都に銀行もあるのに、大阪の此銀行へ預たのです、尤も僕一人ので無く、此容子では叔父さんの遺産は、悉皆銀行の方へ れ預になつたでせうが、誰が周旋をしたのですかお谷「ソリヤ和郎、アノ何だヨ、舊は叔父さんとは同御家中だつた、勝田仁左衛門の息子で、精一とか云ふ人だつたヨ　芳「勝田精一……勝田……。芳雄は暫らく考へて

ア、何ですか、アノ大阪で種々な事に首を突込んで居る、勝田といふ人なら何でせう、東京へも屢々來る男でせうお谷「和郎も知つてお在かへ　芳「面識はないですが、新聞で名を知つて居ります、併し此預券は一寸僕が借用して、今ッから大阪へ往つて、此銀行の方を照會して見ませう、如何も其の意を得ないことがありますから。芳雄は母に受取りたる預券を懷中し、直ぐに我が家を立ち出で、七條停車場より滊車に乘じて、大阪に着せしは午前のことなり、早速某銀行へ腕車を飛せて、名刺を出だして役員に面會を乞ひければ、同行にては芳雄を應接所に案内し、頓がて行員春藤峯三が應接に來たり、芳雄の來意を尋ぬるとき　芳「突然に御面倒に出まして、御繁忙の中御迷惑でせうが、少し伺ひたい事があつてまゐつたのです、エー本年の十月下旬でしたか、勝田といふ人が周旋で、京都に居る篠崎某から、預金の御面倒をした事はございませうねへ　峰「ハイ……暫らく。行員は呼鈴を鳴して小使を呼び、何やらん小聲にて示せば、今一人の行員も此處に來り行員「唯今お尋ねの口は調ましたが、如何もございません　峰「左樣ですか、松室さ

ん御聞の次第ですから、他の銀行とお間違ではございませんか　芳「イヤ御當行です。此時芳雄は、持參の預券を出して行員に見すれば、肇三も其書類を手に取りて熟々ながめ驚く事大方ならず　峰「コリヤ全く僞券です　芳「エッ……　峰「重役の姓名は記してありますが、印形は全く違つて居ります、而して唯今のお話しでは、勝田と云ふ人が當行へ……

芳「ハイ、勝田精一です、イヤ夫れで相判りました、芳雄は件の僞證を懷中し、挨拶そこ〳〵銀行を出行きたり。

（第四十一枝）

勝田精一は妻のお重が、家出せしをもさして心に留ず、今日は何思ひけん浮世小路のお菊を本宅へ呼び寄せ　精「お菊今夜、和女をば、斯して呼びに遣つたのは外でもないが、れ重と此間の晩から、未だ歸らぬのは東京の方へ、往つたかと私は想像するが、和女の方へ兄の方からは、何か音信でもなかつたかお菊　イイエ、實は妾も彼の時から、心當りの處と悉皆索ねましたが、何處へも立寄ない容子ですし、またお玉も彼晩に、兩人の

跡を捜しに出ました時に、拍子の悪い貴柳、小母に出會て引止られ、話しをして居る間に、見失つたと云ふ事でございます　精「夫れでノ實はモウお重は離縁の手續きにして、委細の事は郵便で東京へ云つて遣つたのだ、最初彼女をば引取ときは、有明の爺から取つてある證書もあるから、故障や異論は決して云はせないから、人籍も東京へ送つてしまつて、先づ此一條は片附だが、其處で和女だナ、斯いふ事を云ひ出すのも、何だか變だけれど、お重の代りに内へ入れると云ふ理屈にも、少し行兼るので……お菊　ソリヤ貴卿、仰しやるまでもございません、實は先達てもアノ髪結のれ增さんが來て、妾に申しますのは、江湖には斯々した御新造があるから、今の間だに本城を乘取れなんぞと、人そば煽動るやうな事を、申した事がございましたから、其處で妾が萬々一にも、御新造を放出して、本妻にでも直つたといふ樣な、悪い評判をアノ人達が聞いて御覽、夫れこそ如何なに悪く云ふかも知れません　精「サ、開處もあるだらうが、芳五郎の一條もあるから、私は精はんやうな者だが、和女が他人に後指を示れるのも氣の毒に思ふし而して

ノ、實は今度或人の周旋で妻をば貰ふ相談が、至急に整つたので。れ菊は素より本妻になるべき望みは無きも、斯く俄然に後妻を迎ふとの話しに不審を生じ、且つ女の身にとりては、何とやら胸苦しく、嫉妬にあらねど膝を進めてお菊「妾が彼是と申す筈はないのですが、まだ貴卿御新造の方の話しが……　精「ナァニ、彼女の方はモウ無關係だから、一切介意たことは無いが、和女の思惑がサ、如何せ人情から云つても快くはあるまいが併しまた私の方にも種々都合があつて、モウ解約することにも、行かない頗末にあつたのだから、一寸念の爲め其の事をば和女に話して置くのと、モ一點茲に和女には云ひ難い相談があるのだ……。精一は直ぐにも得云はで、煙草を喫み居るをお菊は心ならずお菊「また其他に、お相談と仰しやるのは　精「如何も直接には云ひ難いが、別に和女を貰ふ時に、媒人を入れた譯でもなし、萬事を周旋した重は彼の通りの譯だから、據ろなく私から直々に云ふがノ、其何だテ、今回妻を周旋する媒人は、和女の事をば能く知つて居るものだから、如何も其處に何だか都合が悪いと見えて、一時和女との、手を斷つてくれぬかとの相談だから、サ、、恂りするだらうが、ナニ和女別に案じる程ぢやないヨ、僅々一月、モシまた長くッて一月半も別れて居れば、其後はまた私が考へもある事だ、何も今度來る者に、然う束縛される譯もないが、唯其媒人の手前だけに、茲で以つて離緣たと云ふ事を、公然で知らしさへすれば宜のだから、併し何だヨ、浮世小路の家宅は和女が戸主だから、依然として彼家に居てもよし、また當分南方角へ移轉てもよし、所處は心任せにするが宜い。事を譯たる精一か言葉に、お菊もまた熟々と考へ見ると、此原因も兄芳五郎が皆爲せる所爲、誰を怨みん樣あければ、涙む泪を拭ひながらお菊「モウ何とも申しやうはございません、併しながら先達ても申しました通り、まさかの時は妾も覺悟を極めて居りますから、決して未練な事をば申して、此上貫卿に御心配をかけては濟ませんから、ヂヤ當分だけお別れ申して居りませう　精「何卒マア左樣して居てれくれ、假令朋友が遠方へ行く別れでさへ、胸に過つて變な感じの起るもの、況て一生の、イヤ一緒に毎日の樣に、顔を見て居る者に別れるのは、何だか不可ものだ……。精一は

豫て用意せしものか、一束に封せし紙幣を取出し、精「其二月ばかりの小遣ひに、此金をば上げて置うと、渡す紙幣の封じ紙に、何やら書類の如きもの〻挾みあれど、夫等の事には心も注ずお菊「モウ貴卿、此間も如彼に澤山頂きましたから、此お金はモウ 精「ナアニ、そんな他人行義が要るものか、兎に角其金は收つて置きなさい。精一は强て其金をばお菊に與へ、追立つる如く歸らせしは、まだ夜の十時頃なり、何日になく雇人等にも早寐をさせ、自分も居間に入りたるが、何時の間に認め置きたるものか、二三通の書面を傍の机の上に置き、旅行革匣を手許に取寄せ、豫て底に秘め置きしは、先日滊車中にて取違へたる藥瓶を取出し、よく〳〵檢めて腰を叩き 精「フム――、慮らずも取違へた此一藥が、斯う云ふ事なるとは實に偶然だ。

《第四十二枝》

篠田の遺族と、某銀行よりの告訴に依つて、警察官乙直に今橋二丁目なる、勝田精一の宅へ向はれしが、精一の宅にては今混雜の最中なり、开は今朝精一が居間へ例の如く、

下女が烟草の火を持行き視ると、主人は一間に倒れゐる有樣に呆れ驚き、醫者よ藥と周章騷ぎ居る處なれば、今しも出張せし警官は、其由警察署へ急報せしにぞ、更に警部及び醫師また裁判所よりも係官が出張して、檢視を遂ぐると全く精一は、モルヒ子を多量服して自殺せし事の判然し、且つ傍にある遺書などをも夫々取調ぶる處、最に思ふ仔細ありて、某銀行の重役の、偽印を製し置きし事より、篠田の預金を僞書僞印を以つて詐僞せし顚末を概畧に記し、其他には到底免れ難き犯罪を知り、先日京都より歸路滊車にて慮らず取違へたる、劇藥ありしを幸ひ之れを服用して、自殺云々の事を記せしまで、數萬の金圓は何に費消せしとも、何方へ預しとも、更に行方は知れず、夫故貴族に就て取調べせしも、妻なるれ重は既に戸籍面離緣となり居り、尙ほ委しく探偵を遂ぐると、姦夫と逃走して所在判らず、妾お菊も其前夜云々にて離緣せし由なれば、差詰此女を呼出し、取調ぶと雖も確たる事實も判らず、家宅搜索を嚴密にせども、注意行屆て書類などは大抵燒棄、是ぞと云べき物も無りしとぞ、然ばお菊の身に何事の關係もなく

其後日を經ぬさしも喧しかりし、モルヒ子往生の取沙汰も早晩消失しが、偖れ菊は其後如何せしぞと尋るに浮世小路の家も半月經ざる中に、かしや札を貼付けあるを見れば、此處にも居らず、隣家で聞ても移轉先の判然せざるは、如何にも不審き事どもなり。

本年の秋の末、菊觀んとて梅澤作次郎は、瓢を携へ北野邊を唯一人歩み行く後より、オイオイと聲かけて、早足に來たるは山淵友純なり　友「貴公は梅澤君だノ。作次郎も立止りて　作「オヤ貴君は山淵さん、其の後は實に一別以來、併し相變らず御壯健で、今日は何方へ　友「友人と觀菊の約束をして、今此後の紙久へ往った處が、來て居らんので此方へぶらぶらと來たのぢやが、君はまた何處へ行くのだ、モウ此先には菊のある茶店も無い筈だが　作「茶店はありませんが、此間或人に聞ますと、此北在に何とか云ふ、新染い尼寺が在るさうでして、其の庵主が大層珍らしい菊を、庭前に培養して居るといふ事を聞きましたから、今ッから索ねて行くべしで、斯うして參りましたが、如何です、貴君もお出掛になつては　友「夫れは何よりだ、御同伴をしやう。兩人は之れより野路を北へ

歩みながら　友「トキニ昨年は、アノ勝田は大變なことを行ったねへ　作「左樣、實に意外と申さうか、何と申して宜か、彼の旦那に限つて如彼事のあらうとは、思ひきやでした　友「アノ家内は如何したか知ら　作「彼れも貴君、お聞及びの不体裁で、其後は子貴君、何でも其情夫の爲めに、東京の小塚とかで娼妓になつてると申す事です　友「左樣か、情夫は如何したか　作「其事は確と聞ませんが、如何しましたか、如何で碌では行きますまい　友「此間新聞に載た、アノソレ、淫賣女を外國へ密航させようと企て、其筋の手にかゝつた女は、勝田に關係の有た者ぢやないか　作「アリヤ貴君、別に關係と云てはありませんでしたが、南地で悪い評判の、女髮結のお增といふ女でして、此情夫の三五郎も、何か舊犯が露顯して、捕縛になつたとの事です　友「悪い奴は天が免さないテ、而してアノお菊といふ、勝田の妾は　作「サ夫れがです、トンと行方が知れないが不審です、オヤ此新築が尼寺らしいが、一寸私が聞て見ませう。作次郎は庵の門に入り「御免下さい」と訪問ひければ、奥に聞ゆる看經の聲止みて、徐かに立出しは之れ別人ならで、彼のれ

菊が世の塵を捨、今は尼となり果し姿なれば、互ひにハッと驚きて　作「貫女は……

此末を事細に記載るも蛇足に似たれば、唯わづま菊の夫ならで、貞操の色の最と美しき、お菊が菩提心を愛でたまへかし。

あづま菊　大尾

明治廿九年七月廿五日印刷
明治廿九年七月卅一日發行

著者　香川倫三

發行者　大阪市南區櫓町通壹丁目百八拾四番屋敷　早川熊治郎

印刷者　大阪市東區和泉町二丁目八番屋敷　前野茂久次

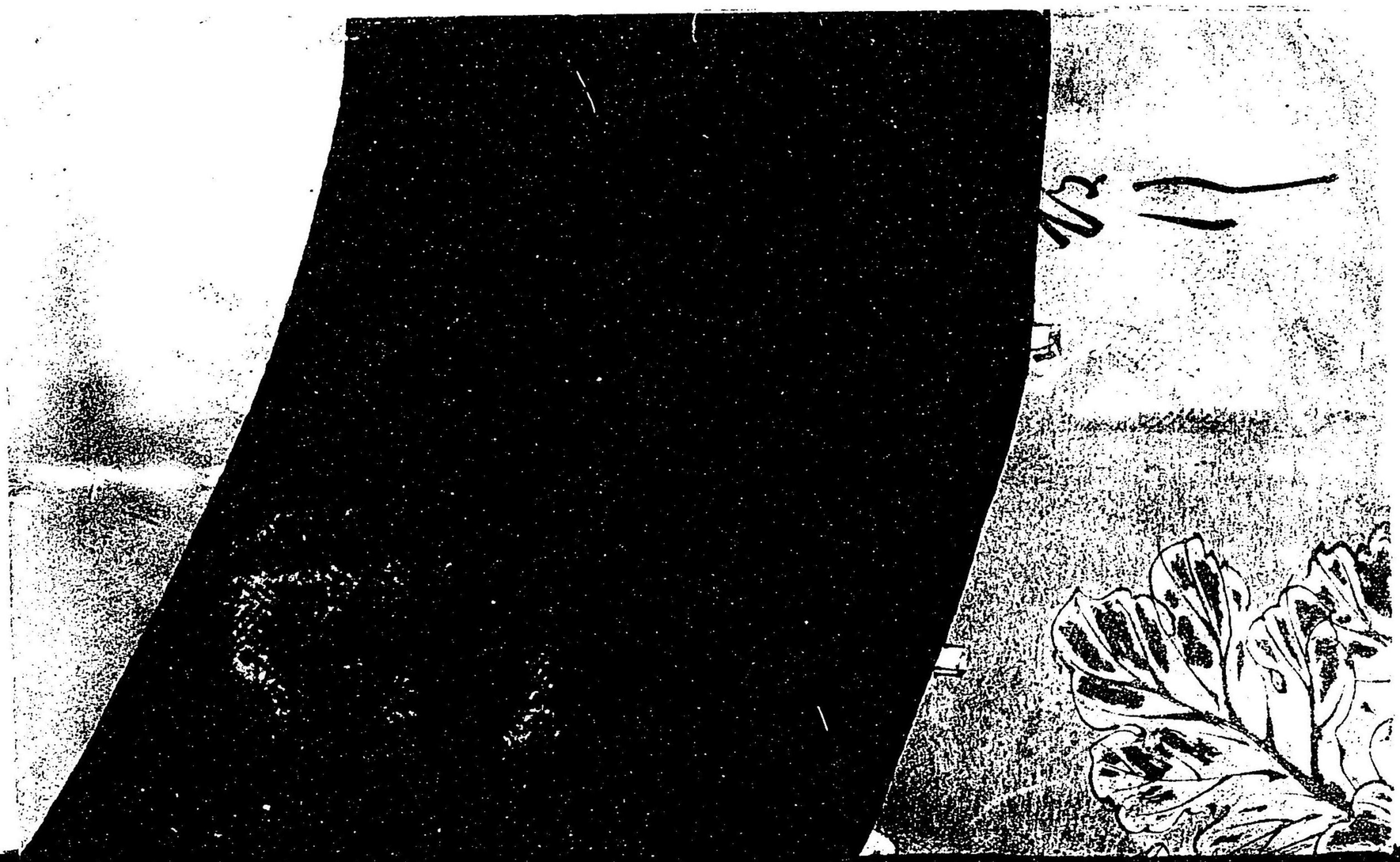
發賣書肆　大阪市東區備後町四丁目七拾八番屋敷　吉岡書店

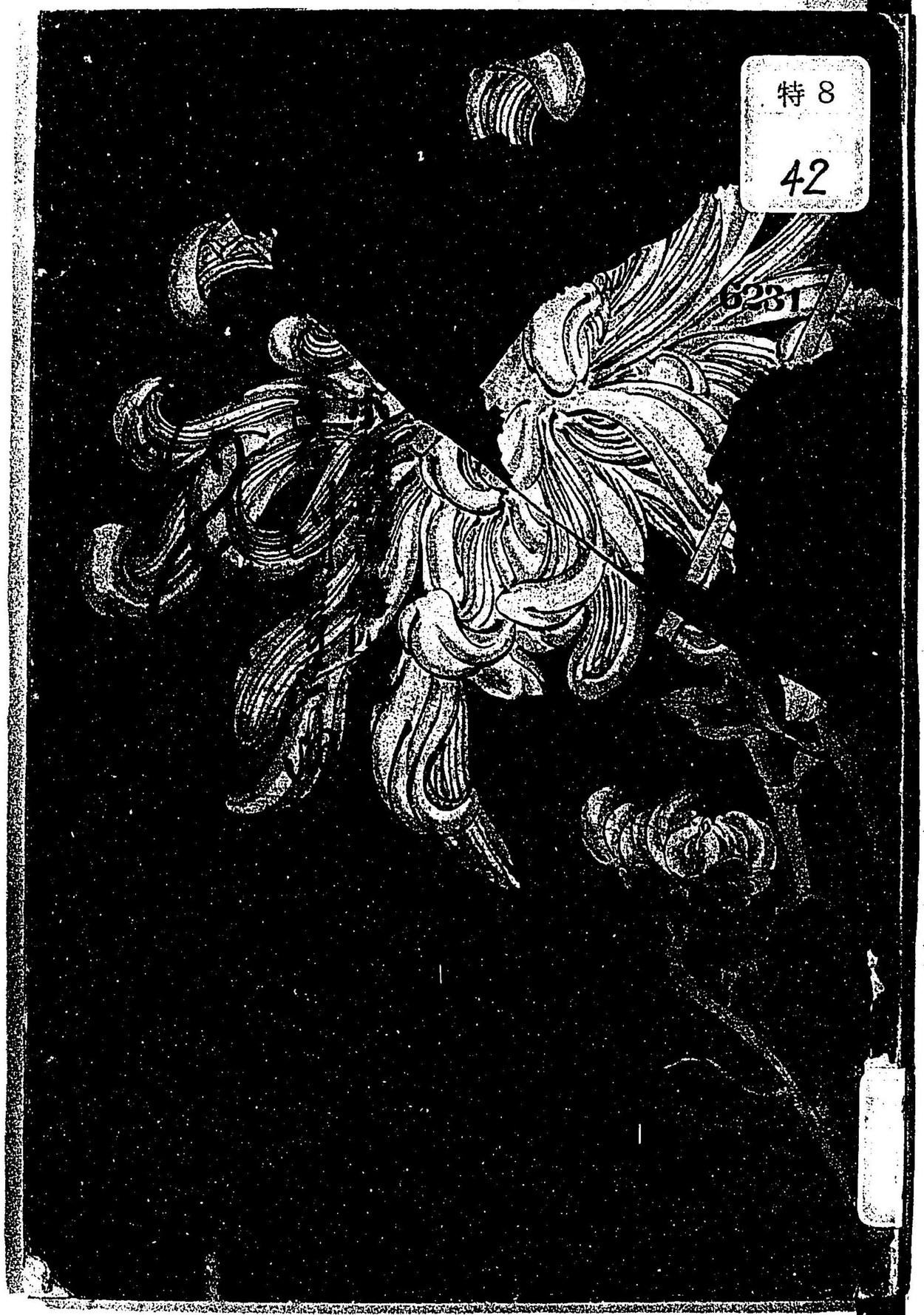
同　神戸元町通五丁目貳拾三番屋敷　吉岡支店

同　東京市神田區通新石町二番地　同文館

わづま菊奥付
正價金廿五錢

版權所有





特 8
42
6231

092784−000−9

特8−42

あづま菊

香川　蓬州／著

M29
DBQ−0067